女子文壇

第二巻第四號

明治三十九年三月一日發行(毎月一回)
明治三十七年十二月十九日
第三種郵便物認可



東京帝國大學文科大學教授文學博士　坪井九馬三先生序
東京高等師範學校教授文學博士　那珂通世先生序
東京帝國大學文科大學教授文學博士　白鳥庫吉先生序
東洋史專攻　文學士　高桑駒吉著　（上卷既成發賣）

參考 東洋大歷史

全三冊　上製　菊判

◉紙數五百頁餘　▲定價一圓廿錢小包料金拾五錢

本書の著者高桑文學士が東洋の歷史文學に精通するは學界既に定評あり況や我が邦史學の泰斗たる坪井那珂白鳥の三博士が本書の序文を快諾せられたるを見ば其空前の大著述たるを知るに足らん若し夫れ支那の史實のみを叙して東洋史の能事足れりとなす世間普通の書と其選を異にするは漢人以外の朝鮮及び塞外諸族又は西南諸蠻の盛衰興亡を叙することの詳密なるにあり實に我が東洋史界に一大革命を喚起する者は本書なり苟も東洋史を研究し或は眞の東洋史を知らんと欲する諸君の一讀を冀ふ

廣島高等師範學校教授　理學士　志田順
廣島高等師範學校教諭　大島鎮治　共著

參考 實驗物理學

全一冊　上製　菊版

◉紙數六百頁餘　▲定價金壹圓六拾錢小包料金拾五錢

中學程度の物理教科書は、良書あるも參考書に至りては、一二の出版あるも何れも程度高きに過ぎ理解に困難を感じ完全なるものなし本書は此の要求に應ぜん爲め出版せるものにして本書の特色は

一中學校五年級程度の智識にて理解し得べき樣編纂せしこと
一文部省の中學校教授要目に準據し普通物理學の各要項を網羅し之れに詳細なる說明を加へたること
一物理學を一層學ばんとするもの、爲めに多くの新事項を加へたること
一嶄新にして詳密なる圖畫四百個以上を挿入し計算及應用問題を掲げ詳解せり

故に本書は、中學校師範學校高等女學校實業學校凡て中學程度學の良參考書たるは勿論諸官立學校小校教員入學受驗用書に適當せり

東京日本橋本石町
大阪市東區備後町　寶文館
神田區表神保町　東京堂
神田區裏神保町　高岡

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇

第二巻第四號目次

本號 石版極彩色口繪—三宅克己先生 水彩畫(興津の春景) ○鏑木清方先生繪はがき(花野)

女學生必讀良書

▲再版發賣▼

日本女子大學教授鹽井文學士。女子高等師範教授尾上文學士。東京帝國大學講師佐々木信綱。巖谷小波、廣津柳浪、山中古洞 先生選評

女子文壇社編輯局校訂

大好評

女子文壇

懸賞文集

▲選評諸家寫眞肖像及懸賞當撰書色刷十數葉入

全一册 洋裝印刷美 中判上等紙 四百廿頁

正價 無類低廉 金廿五錢 郵税六錢申受けず（郵券代用必壹割增）

此書は女子文壇第一卷の懸賞傑作のみを網羅したるもの、女子が文章を練り詩歌を學ぶに模範的作文書としては唯一の寶典たるべく殊に附錄として諸大家の作文上の心得となるべき名文數篇を載せ修養の便に供したる無比の良書なり。今や增刷成る、陸續注文を乞

出版元 東京京橋大鋸町 電話本局六〇七 女子文壇社

特約發賣所○東京堂、北隆館、東海堂、上田屋、良明堂

●御最寄の賣捌書店になき時は「出版元」へ直接御注文の程希上候

▲大見切廉賣

口繪の水彩畫丈でも價あり

●女子文壇 第壹卷第參號 定價金拾錢

美麗口繪（三宅克己先生水彩畫（春の郊外）九色密刷一枚其他寫眞版（肖像、風俗、名畫）數葉あり

●女子文壇 第壹卷第七號 定價金拾錢

美麗口繪（三宅克己先生水彩畫（夕立雲）十色密刷、山中古洞先生家庭密畫（朝の散歩）六色密刷の二枚其他寫眞版（三大女學校卒業生、名畫、風景）數葉

●女子文壇 第壹卷第拾壹號 定價金拾錢

美麗口繪（三宅克己先生水彩畫（小春日和）九色密刷、鏑木淸方先生繪はがき（白菊）七色密刷の二枚其他寫眞版（米國女學生遊戲、肖像、名畫、風景）數葉

●女子文壇 第壹卷第拾二號 定價金拾錢

美麗口繪（三宅克己先生水彩畫（冬枯）九色密刷、鏑木淸方先生繪はがき（落葉）七色密刷の二枚其他寫眞版（泰西名畫、肖像、風景）數葉

大見切 各壹册に付き廉價金五錢 外に郵送料壹錢

▲廉賣期限＝三月廿日迄

今般棚卸に付前記の通り無類大見切の廉賣實行仕候右孰も殘本に限りある事ゆゑ期限内に至急御注文あらんとを乞ふ

二月十五日

東京京橋區大鋸町 電話本局＝六〇七 女子文壇社

興津の春



小島工藝石印

三宅克己先生筆

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

大日本女學會

●本會が十年來女學の通信教授に盡せる事畏くも　皇后宮の聽聞に達し特に御歌下賜の恩命を蒙りたり●本會は伏見若宮妃殿下を名譽總裁に奉戴し鍋島侯爵夫人會長として會務を監督す●今度新學期を開き會員を募集す會則希望者は葉書又は電話にて請求あれ

●高等科(學期二個年)　月謝四拾錢束修四拾錢
○倫理(下田次郎)○禮法(佐方鎭子)○教育(安井哲子)○國文(坂正臣)○文法(岡田正美)○作文(今泉定介)○作歌(大口鯛二)○美辭學(島村抱月)○漢文(菊池晩香)○日本歴史(大森金五郎)○萬國歴史(喜田貞吉)○名媛傳(下田歌子)日本地理(喜田貞吉)○萬國地理(同上)○地文(脇水鐵五郎)○數學(藤野了祐)○植物(松村博士)○○動物(石川博士)○鑛物(脇水鐵五郎)○理化(同上)○生理衛生(三宅博士)○家事衛生(同上)○小兒衛生(三島博士)○家事教育(三輪田眞佐子)○家事經濟(後閑菊野子)○割烹(石井泰次郎)○裁縫(渡邊辰五郎)○習字(坂正臣)○圖畫(武村千佐子)○美學(島村抱月)○音樂(東儀季治)○挿花(戸川正得)○點茶(松浦伯爵)○園藝(池田伴親)○法制經濟(岡戸諭介)○附錄機關雜誌なてして

●簡易科(學期二個年)　月謝貳拾錢束修貳拾錢
○修身(後閑菊野子)○禮法(佐方鎭子)○國文(同上)○作文(今泉定介)○漢文(菊池晩香)○歷史(大森金五郎)○地理(喜田貞吉)○數學(藤野了祐)○博物(脇水鐵五郎)○理化(同上)○生理衛生(三宅博士)○家事綱要(後閑菊野子)○家庭教育(三輪田眞佐子)○割烹(石井泰次郎)○裁縫(渡邊辰五郎)○習字(坂正臣)○圖畫(武村千佐子○史傳(下田歌子)○お伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

●目下五巻迄發行　入會の好時機

●東京市麹町區下二番町三七　大日本女學會　電話番町一三三〇

(中付の一)

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ



東北凶作地義捐金募集

善いと思ふ事は直ぐ行ふと云ふ本社の主義から、今回東北凶作地へ寄贈する爲に、本誌愛讀諸孃に義捐金を募ります。天寒うして家に食物の貯へなく、老幼婦女相抱いて飢餓に迫るとは、何と云ふ氣の毒な狀態でせう。我々衣食に不自由なき者は、此際應分の義捐をする義務があらうと思ひます。本社は素より金額の多少を問ひません、金拾錢以上ならば欣んで取扱ひます、慈善者の姓名金額は本誌上に發表します。扨て本社が此の事を思ひついた動機は去る五日、ゆくりなくも下野の一令孃から東北凶作地へ送つてくれと、金五圓を本社に托されました。本社は其公德心の厚きに義憤を起して、茲に義捐金募集の擧を企てるやうになりました、諸孃よ、願くば多少を問はず憖むべき窮民の爲に喜捨あらんことを。下野の一令孃の金員に添へてあつた手紙の全文は左の通りです。

一金五圓也　封入いたしてあります

近年にない今年のお寒さを記者先生諸氏いかがおしのぎ遊ばしますか東京は此地方よりも雪がふりましたとか聞きましたがお變りは御座いませんか、私は下野の南東のすみの方の田舍に住んで居りますものですが文學を好みまして學校を卒へましてからは貴誌を唯一の師としたのみ初號から愛讀致して居るもので此度我愛する文壇も先づ創立一週年に成り一卷一號に比して非常の(此度のは)進歩實に私はうれしくてなりませんこゝにつゝしんでよきごとを申上ます

サテ記者先生!!まことに恐入りまして御座いますが何卒此願をいれて下さいましそれは本月一日發行の近事畫報をみましたところ實に宮城縣などの慘狀::目もあてられぬ程で御座います、自分は父母の膝下にあつて何不自由なく(當地方はそれほど不作でもありませんでした故)充分に衣食して居る身、あゝ今食するものもなく親子相抱いてまさに死せんとする、病の爲めに打伏し今の不作に逐ひ壹粒だに口にすることも出來ず、子は死を恐れて遠く走りて家にあらず遂に「あゝ飯が食ひたい」の一言を此の世に後して死したる者、又自分は出征し露醜打平げて目出度凱旋して家に歸つて見れは、あゝそもいかに::最愛の妻は病のために黃泉の客となり愛兒二人は年老いし父と共に見苦しき家にやうやく其日を送つて居らうとは::まあ其時其人々の心中はどんなでせう私はとても平氣で「こんな風なのか知らん」などゝ申して其樣子を見て居ることが出來ませんみす／＼そんな人達の死することを聞いて居ることが出來ませうか同情の念禁じがたく私が平生かみ飾何かに所親よりいただいた金をためて居りました幸此れだけになりましたからあまり少ないと思ひましたが心から出すのですから多少に左右して居られません、右樣なわけ故どうぞこの心中可と思召すならば愛讀者のよしみを以て我同胞にすこしなりとも幸を與へて下さいまし多く書することは出來ません先づは右御願まで

二月四日夜　下野少女より

記者御中

どうぞ名は問はないで下さい

一　喜捨金は拾錢以上の事(送金は爲替に限る、郵劵代用は謝絶す)

一　喜捨者は一人又は多人數申合せ送金差支なき事

一　申込期限は三月十五日迄の事(可成早きを望む)

一　喜捨金の三縣へ分配法は其筋に依賴する事

一　詳細の報告は四月一日發行の本誌上に發表する事

一　申込所は『東京京橋大鋸町十一女子文壇社義捐金募集掛』宛の事

卅九年二月十五日　女子文壇社

新刊

既刊

幸田露伴先生編並序
最好會同人詩集
短詩

表紙　川村清雄先生畫
挿畫四葉寺崎廣業先生畫

總クロース
洋装美本
木版極彩色
口畫四葉
實價金四拾錢
郵税金四錢

曾て讀賣紙上に連載して江湖の喝采を博したるものの中より粋を抜き華を選みこれに新作數十章を加へて一巻となす請ふ愛讀を賜へ

月刊

小品文學

第貳巻發行
紙質體裁改良刷新

實價郵税共●一冊金十六錢●六冊金九十三錢●十二冊一圓八十六錢
其他諸種の小品多々

代用切手は二錢以内の物に限る

要目

水　扉　花
小さき　實
時　史　兒
乳　形　母
折〃　草
宗教意識に關する根本の一問題

小川未明
宮崎湖處子
中村春雨
高須梅溪
前田曙山
島村抱月

▲懸賞小品募集▼
課題「初めての戀」　小杉天外選評
一事實に基けるもの
一十行廿五字詰五枚以内
一懸賞金壹等拾圓

本誌は諸大家の小品を網羅し、簡潔奇拔一點の惰氣なく從つて俗累多忙の人にも卓上車窓一分の餘暇に猶ほ能く精巧鋭利なる拳銃匕首的文學を供せん事を期す

投稿歡迎（短詩短文小品文）其他懸賞募集等

發行所　東京市京橋區中橋和泉町五番地　泰山堂

（中付の四）

河原操子女史と蒙古女子留學生



下田歌子女史邸宅にて撮影（二十四頁の記事參照）

（何蕙貞）　（金淑貞）　（河原操子女史）　（于保貞）



（十一頁にある水繪の友参照）

耕作

（佛國女流畫家ロザ、ボンノオル氏筆）

誌友おもかげ（其一）



群馬細谷いゑ子君
同　節三君

齋藤てい子君
浦野とき子君





栃木川島美輝子君

東京秋元きよ子君



東京穎川とき子君少時の家庭

（記者曰……〆切後に澤山到着の分は逐次紹介致します）

古洞先生選　懸賞圖畫（其三）



ステーション（特別二賞）麹町區平河町六ノ十四合田俊子○おとめ（特別三賞）韓國仁川港浦字柝田中又太郎方小國敏子
お掃除（天賞）陸中伊藤伊與子○雪の小樽（地賞）小樽色内町六一岩谷綠子○梅見（人賞）姫路五軒邸八三萬代つれし子

女子文壇目次

◉二巻第壹號 一月既刊 目次 定價拾錢

美術口繪

◉二巻第二號 二月既刊 目次 定價拾錢

美術口繪

（添付の二）

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添をこふ

文士奇譚

文學士久保天隨君編（再版）

口繪（應澤露夜屋に上りて赤穗義士の討入を窺ふ 獨山提灯に描きて下男の窮を救ふ（不折畫伯筆石版五色摺）

文士印譜：（二頁刷）▲附錄：（名著序文集）

▲全一冊大判 百三十頁 正價拾錢 郵税一錢

立志訓

文學士 大町桂月先生序
長谷川天溪君校閲
立野天風君編

（諸新聞雜誌の好評）第三版

▲正價金二拾錢 郵税二錢

全一冊 袖珍

歐洲 學生の生活

文學博士建部遯吾君述
原田道寛編

全一冊袖珍 正價二拾錢 郵税四錢

學生必讀 旅行の友

全一冊美裝 實價拾六錢 郵税二錢

皇太子殿下毎號御上覽

六卷第五號（三月一日發行）

秀才文壇

▲一號附錄 大元帥陛下御愛馬 大好評增刷出來

▲四號には 東宮殿下最近御尊影 額繪版入

▲低廉無比▼ 毎月二回發兌（一日十五日）石版極彩色畫 繪葉書寫眞入

價 一冊拾錢 六冊五十七錢 十二冊一圓八錢 送無料

▲類書中王▼

父母と子供

慶應義塾々長鎌田榮吉君題辭
慶應義塾教授 當綠蔭君譯（再版）

全一冊中判 洋裝美本 正價參拾錢 郵税四錢

目次 ○總論○新誕生兒に就て○第一期の教育○幼兒の言葉に就て○餘計なる心配は無用なり○子供は愛す可きものなり○子供は奴隷にあらず又暴君にあらず○理論は餘り早く教ふ可からず○虛言及び模範の効力に就て○體育に就て○衣服に就て○睡眠に就て○五官の修養○觸官に就て○視官に就て○嗅覺に就て○聽官に就て○音聲に就て○味官に就て○勉强の時代○好奇心に就て○實物教育に就て○學問と趣味○實驗物理學○實學に就て○「ロビンソン、クルーソー」○結果―十四五歲頃の子供

此軍艦帖は紀元節をトし東京市四谷第一、二、三尋常高等小學校を始め全國重なる各學校にてつまらぬ菓子抔を廢し數萬部御買上の命を忝ふせり殊に「紀念品としては上乘の者なり」との讃辭をさへ賜はりしは無上の光榮といふべし

◀美術寫眞銅版三色刷▶

軍艦寫眞帖 第七版

附錄大捷軍歌集

全壹冊袖珍美裝價金七錢

（送料 一冊ても二冊まて 二錢）

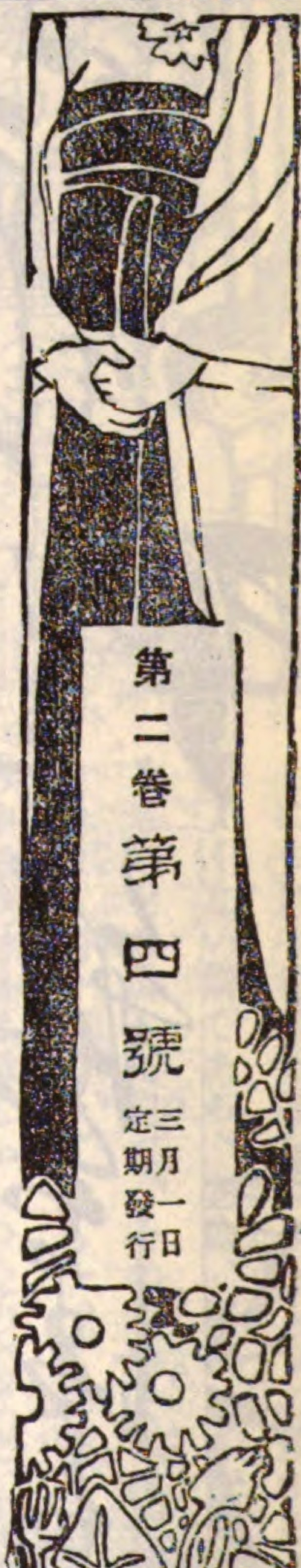
勅語……上等洋紙鮮麗刷金

出版元 東京神田旅籠町壹丁目廿三番地 文光堂 賣捌 東京堂外全國書店



愛讀者たれ

本誌の誌友倶樂部て、記者に「私は未だ高等小學校を卒業したばかりですから、投書はいたしませんが是から永く本誌を愛讀しやうと思ひます」とか「投書はしないが愛讀者の一人に加へて下さい」とか言ふやうな意味を言寄せらるゝ方がありますが、床しい心掛てあると思ひます。如何にも初めから投稿する目的で見るより、只讀み味ふと言ふ積りて、本誌を見られるのが眞實てす。讀者必ずしも作者たる必要はないので、一人の作家よりも、十人の愛讀者を得たいのが記者の願いて、作ると云ふには修養も入ります、用意も入ります、頭も惱まさんければなりません、時間も費さんければなりません、それて人並の作家たるには容易な事てはないのてすから、それより初めの間は愛讀者たるに甘んじて、讀書眼を養ふ方が最も怜悧な爲方かと思ひます。讀者たるには少しも手數が掛りません、新聞を讀み得る者は「女子文壇」を讀み得るのです、讀む樂みは作る樂みより、遙に多く人に行きわたりますから、此樂みを有して居らるゝ諸嬢は、作る樂みを有して居らるゝ諸嬢より、遙に多くのお仲間がある譯て、紙上に名が出ると出ないの相違はありますけれど、皆同じ文藝の光に浴すべき幸福を有して居る方々てす。



女子文壇寄稿諸大家寫眞筆蹟



文章家の技量（二）

文學士　岡田正美

前回に於ては、話が中途からわきへそれた嫌があつたが、とにかく「おもしろい事がらを見付けること」が文章家の技量の一であることを述べておいた。今回は

（二）材料の分量、選擇、幷にその組立方

について述べよう。

（１）　材料の分量

材料の分量は豐富でなくてはならないといふとはいふまでもないことであるが、地方在住の人々は、はたが静かで物事が割合に簡單である爲でもあらうか、とかくに少量の材料で事を成さうとする傾がある。是は甚だよくない僻である。勿論、何にても、出來上つてるものをこはして見て、その材料を數へて見たなら、その數は割合に少いであらう。さればといふて、初から少量の材料を以てかゝつたのではとても思はしいものは出來ない。

僅かの材木を與へて是で立派にやれといつたところで大工はとてもそれで立派なものを建てることは出來まい。粉本をわづか與へて、それで立派な繪を仕上げて見せよといつたところで、立派なものが出來るわけがない。おもしろい福引でも考へ出さうとするには、やつぱり勸工場へでも行つて、陳列してある品物をあれこれと見て、そしておもしろい取り合せやおもしろい工風をするのが一番上策である。嫁入仕度を新調しようとするには、近邊の小店で買ふよりも、やはり三越か白木屋か大丸か又は高島屋かへ行つて、澤山の内から一番氣に入つたのを買つて來る方がいゝ。世の中には、腕さへあれば何でも出來るやうに思ふ人

もあるやうてあるが、それはまちがひ。いくら裁縫が上手でも、仕立てる材料がなければ、何も出來はしない。いくら料理が上手でも、庖丁て俎をた丶いてるだけては料理の出來る筈がない、どうしても、い丶材料を十分に豐富にたくはへておいて、その內から、入用なだけをつかふとか、又は、最もい丶ものをつかふとかするやうにしなくてはいけない。

蘭と竹とをよく習へば、その力で他のものは書かれると、畫師は敎へるさうであるが、それはとても出來るものでない。いかにも、筆づかひ、筆の勢、筆のこなし等は大抵にやれるてあらうが、第一どうすれば松の枝になるか、どうすれば梅の枝になるか、わかるまい。梅の花はこ丶がかうなつてゐる、桃の花はこ丶がかうなつてゐる、といふことが十分にわかつてゐなければ、とても梅の花と桃の花とを書きわけることは出來まい花鳥に妙を得てゐるといはれてゐる人でも、物によると、隨分ひどいものしか書けないことがある。是等はいづれも部分々々をよく知つてゐない、部分々々の材料が十分に頭にはいつてゐないからである。西洋の油繪師は一枝かくにも非常に骨を折るといふことであるが是は、つまり、油繪は繪の性質として、あらゆる點に於て繪の中のものを實物らしく見せなければならないから、從つて、實物に對する研究が必要なのである、即ち書かうとする實物に關する材料が最も多く且つ十分になくてはならないからであらう。

詩歌文章に於ては、うまくいひまはしておけば、一寸見られる。しかし、夫もやつぱり、一時のごまかしに止まるので、その作者はそれを以て作家たる榮譽を得ることはやつぱり出來ないのである。論より證據、現今の小說家、新躰詩家について調べて見るがい丶、外國語が出來て、外國ものをとり入れることの出來るものは格別、さうでないものは大抵ぢきに種切れになつて、忽ちに窮してしまふといふ有樣ではないか。

材料はどこまでも豐富でなければならない、事がらの上に於ても、文句や單語の上に於ても、飽くまでも豐富てなければならない。それて、和歌麓の塵、和歌濱の

眞砂、今古和歌うひまなび、新選歌典、歌の栞、なども無論見るがいゝ、萬葉集古今集をはじめとして世々の選集は勿論、諸家の家集、物語、軍記、随筆、雜纂等、凡て皆讀むがいゝ。そして、又、和歌を詠み、和文を綴り、新躰詩を作るものでも、詩語粹金や圓機活法や佩文韻府などをも見るがいゝ。玉石混淆も固より辭するには及ばない、他山の石以て玉を攻くべしといふこともあるし、又、實際、聯想に依つて、得るところも多いのてある。和漢洋の諸種の書を讀んて、作歌、作文の材料を豐富にするのが極めて肝要てある。材料の豐富な者は確に作家になれる資格があるが、さうてない者は、其資格がないといはなければならない。

（ロ）材料の取捨撰擇

さらば、材料を豐富にさへすればいゝかといふに、さうばかりてはない。繪具をばいくら多く供へたとて、それですぐに繪が畫けるものてはない。材料がいくら多くあつたとて、夫をつかひこなすだけの腕がなくては詩歌文章は出來るものてない。料理を品數多く列べたとて、夫て立派な膳部が出來たといふことは出來ない。田舍流儀ては品數を多くし分量を多くするのが最もいゝ御馳走てあるのてあるが、御馳走なら御馳走らしく、適當な品々を適當に見立てゝ、たとひ品數は少くても取あはせをよくして、出してもらひたいと思ふ。たゞ食ふばかりが饗應の本旨てもあるまいと思ふ。この適當なものを見立てゝ、適當に取合せるといふことが極めて肝要なことてあるのてある。

さて、繪は全面を一度に見ることが出來る。左の方の緣側にはどういふ人が立つて居る、その側にはどういふ人が坐つてゐる、立つてゐる人は何處を見てゐる、向の方には瀧が落ちてゐる、瀧の上には何がある、下の處には何がある、水が何處から何處へながれてゐる、路が何處から何處へついてゐる、小山もある、小橋もあるといふやうなことが、一目に見られる。ところが文章の方てはさうはいかない。文章ては、一句々々について、讀者の腦中に影像があらはれてくるので、文句がごた／＼すると影像は腦中で錯亂してしまふ。よ

ぐよく注意して、この影像のごた〳〵にならないやうに、文句をつゞけて行かなければならない。

繪は一目に、全部が見られるとはいふもの丶、實は第一瞥に於ては極く主要なものが眼に入るだけで、その他のものはそのあとから漸次眼にはいるのである。で、繪に於ては、この第一瞥に於て眼にはいる物が最も大切なのであるが、文章に於ても丁度その通りで、その主要物を思ひ浮ばせ〳〵して、そして、適當な影像が腦中で適當に全體の影像を組立て丶行く樣に文句をつづけて行かなければならない、出來かゝつた影像が中途にふいと消えてしまふといふやうなことでは到底だめてある。で、事がらを叙述しようとするに當つて、その事がらの内で、どれ〳〵が主要な分子であるか、どれ〳〵をさへ逸しなければあとは逸してもさしつかへないか、之を見わけるのが、作家の技量の一つなのてある。即ち、數多の材料の内から、その事がらをうつし出すに最も必要にして欠くべからざるものを選拔する、これが最も肝要なことてある。

ところて、その必要にして欠くべからざるものと思はれるものどもは、いづれも作家の考で定めるのであるから、甲と乙と丙と三人がよる場合には、その定めかたが皆ちがふかもしれない。肖像畫を書く場合にはよくかういふことがある。即ち、同一の人を書くのでも、畫工によりて見方がちがふところから、出來上つた肖像が皆ちがふとがある。さうすると、三人の畫いた畫は皆うそを書いたわけになるのであるが、夫はしかたがない、否な、さうでない、三人の畫工は各々正眞正銘いつはりなしの處をかいたのであるが、たゞ見る眼、見る心の眼が三人とも違ふところからかやうな結果になつたのである。もしこ丶に判官として公平無私な寫眞鏡を持出して、之で同一の人をうつして見たならば、その寫眞がまた、三人のどの畫ともちがつて、つまりどれが一番正しいのかわからないやうなこともあるであらう。

畫はつまりうそを書いてゐる、否、不用な部分を去つて最も主要な部分だけをかきならべてゐるのである、

しかるに、夫が人々によつて主要と認める場所がちがふところから、他の者が見るとうそをかいたように見えるのである。
文章でも此通りで、一の事がらを數人で書いたなら、きつと數人ともちがつてしまふであらう。さらば、その記事は皆うそを書いてゐるかといふと、うそばかりともいへない。しかし、もとより寫眞のやうにいつはりのないところをうつしてゐるとは無論いへない。――既に、場合に於ては、寫眞でさへも、いいわるいがある、なんだかほかの人のやうだ、といはれることもある位であるから、まして、文章などは正眞正銘にありのまゝをうつすことはとても出來ない。――で、文章はまことをうつさずともいいが、といふに、それはまことをうつすに越したことはないが、場合によつてはまことを寫さずともいい、といひきつていい、代表となるやうなものを適當につらねて、夫で全躰の模樣を大抵の度までうつせばそれていいのである。場合によつては、いくらかおまけがあつて、うそになつても、豫め期してゐるだけの影像をうかばせることが出來、又は、夫れだけの感動を與へることが出來れば夫で十分なのである。
繪や文章は必らずしも正眞のものをうつさない、また、うつさずともいい、と定めると、――さらば、と、一歩を進めて、――繪の方では、或は山をも少し高くする、形も少々改める、木の數も丁度いい工合のところまで增減する、遠近の工合、大小の工合もいい樣に改める、川の流れも少々ひろげる、木橋を丸木橋に改める、茅屋も一軒くらゐかき足す、こんな工合にして谷川にのぞんだ田舍の家の樣をかき上げる、――さて、それで、こんな處はどこにあるかといふに、どこにあるかわからない、或は、どこにもないかも知れない。――なくても、かまはない。谷川にのぞんだ田舍の家の樣が十分にあらはしてあれば、それで澤山である。――文章に於てもその通り。實際の事がらに幾分の增減を加へてもいい。つまり當初にその事、その物にあたつて、うつし出さうと思ひ浮んだ感じを十分にうつし出すこ

とが出來れば夫て十分なのである。

さて、前にもいつた通り、文章では、あまり文句がごたつくと（即ち材料がごたつくと）腦中にうかぶ影像がごた〳〵になつてしまふ。之をさけるのには材料を適宜に減少することが必要である。然るに、この適宜に取捨するといふことが非常にむつかしいことなのである。主要でもないものを主要と思つて取り、主要なものを不用と思つて捨てたりなどする場合には、折角やつても、その結果はとんでもないものになつてしまふ。また、主要なものをとるにしたところで、どこまでが主要なものであるか、又、その程度はどの位であるか之を見わけるのが頗るむづかしい。又、主要部分がわかつたとして、之をどの位の度まで取り、どの位の度まで捨てるかといふと、これまた甚だむつかしいことである。下手にすてれば、讀者をして思ふだけに影像を浮ばせることや感動を起させることが出來ない、なまなかに多く殘しておけば影像はぼうッとして、緊つたところがなく、感動は一向に起さないといふ様なことになる。この適宜といふことが、一番むつかしいのである。

雪舟は非常に苦心して省筆法を練磨したといふことであるが、その筆になつた人物を見るに、いかにも筆の數が少く、予の様な凡眼者には一向わからないが、專門家が見ると、何ともいはれない妙處があるといふことである。又、先般東郷海軍大將が凱旋された時には予も出迎にいつて見たが、新聞にもあつたとほり、たゞ一つ勳一等の大章を胸につけてをられたのは、あつさりして、非常に心持がよかつた。全躰勳章の類は少いよりは多い方がいい様であるが、しかし、あまり數の多いのはうるさい、又、全くないのもさつぱりしてゐていい。婦人の指輪もさうである、片手に一でたくさんである、三つも四つもはめるものがあるが、却つて美觀を損じ、不快の感を起すことがある。

歐陽修の醉翁亭記の冒頭に環レ滁皆山也の五字がある、是はもと滁州の地勢を述べた文句數十字であつたのを凡て削つて右の五文字にして了つたのであるさうだ。

予等の實歷に徵して見ても、又、學生等の作文に就て考へて見ても、年の若い、所謂初學のものの文章は文句の上に虛飾が多く、材料がごたついてゐるが、だんだん老功になつたものを見ると、よほどあつさりとしてゐる。虛飾を去り、材料を減ずることが名文章を作るに必要な條件であるやうである。如何樣な場合に如何樣なものを如何樣に除去るがいいかといふことは、こゝに概括的にはいふことは出來ないが。まづ概して形容的の語、(即ち連躰形の形容詞、副詞等の類)を成るたけ省くやうにし、又、なくても事がらのわかるやうなものは成るたけ削るやうにするがいい。此他は古來の大家の文を熟讀して、材料の取捨に關する大家の意向を見なければならない。

(八) 材料の組立

次には、材料の組立が大事である。同じ品が膳の上にあるにしても、その在場所が例に違つてゐると、一寸妙な感じがする。同じ色でも排列によつては隨分目立つこともあり、また、全躰に沈んでしまふこともある、又、非常に愉快を感じさせることもあるが、また、非常に不愉快を感じさせることもある。繪畫に於ては、材料の組合せ一つで、まとまつた畫にもまとまらない畫にもなり、いい畫にもなりわるい畫にもなる。文章に於ては繪畫ほどではないが、しかし、たゞ組立方の如何のみで隨分立派にも出來、また餘りうまくはいかないこともある。

て、文章に於ては、先きに選んでおいた主要な材料の内で、どれから先きに腦中に入れるやうにしたら、最もよく又最も容易く、影像を浮べさせたり、又感動を起させたりすることが出來さてあらうか、といふことを考へるのが第一に肝要である。又、繪畫に於ては(寫眞に於ても)上下左右の釣合、主物客物の釣合、場面の中心、といふやうなものが大事であるが、文章に於ても同樣で、冒頭と結尾とは最も大切なものである、又、主想客想の釣合、抑揚の工合、全文の頂上、是亦極めて重要なもので、總じて、文の勢、文の調子が、特に大切である。文の勢をたゆまないようにさせるに

は、隨分、捨て難い材料を捨てなければならないこともある、文の調子をよくしようとする爲には隨分、事實とちがふことをも附加へなければならないこともある。既に、大躰の方針が定り、大躰の組立が定つた以上は文の勢を保ち文の調子を保つ爲には多少の加除は固より辭せない、つまり定めた方針に違はず、定めた大躰の組立に背かない限は、文として躰面を保たせる爲には材料を如何につかつてもかまはないのである。材料は如何に豐富でも、かやうに自由につかふことが出來なければ何の役にも立たないのである。又、選擇したい、材料とてもかやうに自由につかふことが出來なければ、それらは皆活動を失つて、その結果は必ずおもしろくないものになるにきまつてゐる。であるから、材料の選擇とその組立とは作家の技量の內で最も重要なものである。

以上の三項の事がらは手を懷にしてゐてはとても得られない、必ず、常に心掛けて實際に骨を折り、研究して、始めて身に得、心に會得せられることである。心あるものは、そのつもりて十分に奮勵しなければならない。

作文の手引（一卷十一號つゞき）

大和田建樹

三、文躰を撰べ

現今世間に行はるゝ文章には種々あり。曰く。いはゆる和文躰。即ち中古風の雅言もて綴りたるもの。曰く通俗文躰。即ち今日普通に解せらるゝ新聞の雜報的に書きたるもの。曰く。言文一致躰。即ち「といふのである」的に口語のまゝを寫したるもの。曰く。漢文直譯躰。即ち「豈然り豈それ然らんや」流に漢文素讀のまゝを書き取りたる如き語氣のもの。

今いづれを用ひて我文を作らんかといふに。和文躰は優美古雅なりとはいへ。現世紀の文章ならねば。そのまゝ用ひんは時代を知らぬ嘲を受くべく。漢文躰また

徳川時代以來の流行とはいへ。外國の文章を無理に訓點附けて讀ませたる口調なれば。我國民の文章として適當せざるは言ふまでもなし。然らば言文一致かといふに。我口に言ふ言語を以て我手に執る筆に書かしむ。理論の上よりは、之に優る文躰なきやうなれども。從來の習慣と。現時の通用とに因れば。猶言と文との二躰併せ用ふるを常とすれば、言文一致躰は別問題として。文章としては通俗文躰を用ひん事こそ望ましけれ

四、耳に聞かるべき詞を用ひよ

ある人「昨日はバイケンに行きぬ」といふを。何の事ぞと押し返して問へば。梅見の文字を音讀して言へるなりき。始よりウメミといへば分り易きに。バイケンと言はれて直に解し得る人あらんや。

是は殆ど滑稽に屬すべき話なれども。耳に聞きたるのみにて字を見ざれば。何とも意味の解せられぬ詞を用ふる事の流行するは苦々しき次第なり。

「春」とか「春の頃」とか言へば分りよきをシュンゲツ(春月)といひ。「あまたり」にてよかるべきをウテキ(雨滴)といひ。「うめの木」にてよかるべきをバイジュ(梅樹)といひ。「やどや」「はたごや」「りよくわん」などならば分りよきを殊更にリヨテイ(旅亭)といふの類。數へ立てなば幾らもあらん。もとは漢文躰から來れる弊を受けて、人に分らぬ方が學者らしきといふ意味にもあらざるべけれど。知らず〳〵の間に耳遠き詞を好み用ふるに至りしは。あさましき次第ぞかし。

ある人西洋をセイヤウといはん事を俗なりと思ひしにや。サイヤウでは云々と話して西京と誤解せられ。柳橋をリウケウと音讀して。「此野郎は人に琉球まで行けといふ。馬鹿にするにも程がある」とて。車人になぐられたる笑話は既に古し。耳に聞きて解せられぬ言語を用ふるの不都合なるは。かくの如し。文を學ぶ人、まづ此注意を忘るべからず。

女學生と芝居

中村春雨

昔から薯、鮹、南瓜と共に、女子の大好物の隨一に數へられてゐるのは芝居である、されば今日、市中の大小各劇塲の見物の六七分、甚しきは八分通りまで、束髪や丸髷や、島田、銀杏返しなどで持切つてゐるのを見ても、如何に芝居が女子の間に喜ばれ、又女子が芝居といふ者に對して、如何に大なる勢力を有してゐるかは、略推想せられるのである。

今日の芝居の改良せねばならぬ事、明治の新らしい、光榮ある時代を歷史と世界とに耀かすに足るべき新らしい、立派な芝居が出來ねばならぬ事は、世上の識者の皆均しく口にする所であるが、芝居は矢張世間相手の商賣である、見物が來てくれねば坐が立ち行かぬ、如何に立派な脚本が出來、名人上手と云はれる俳優の粒が揃つて來ても、脚本と俳優と丈ては芝居が打てぬ、

そこで芝居の改良といふ事は、見物の改良といふ事を引離されぬ關係を持つて來る。

さてその見物の大多數を占むる者は女子である以上は、見物の改良は女子諸君が、芝居を見物する眼の改良といふ事を意味して來る、眼の改良は、取りも直さず、その心持の改良、芝居といふ物に對する心得方の改良である。

下町の女子、——町家の主婦や娘、子守子などに向つて、今更、芝居といふ者の講釋をしたり、見物する時の心得方を說法するのは無益であろふ、頭の古い人やもう舊式に凝り固まつた人々に今時何の彼のと明治式の、新曆の話をしても、それは木茸に蓄音器を聽かすのと一般である、自分はそこて、女學生諸君が御相談相手なのだ、女學生諸君を最も頼もしい方々と見て、思寄つた事を云つて見やうと思うのである。

或人は、今時の、家庭小說や、淫奔小說に現を拔かしてる海老茶式部なんかに、歌舞伎芝居の味が分つて堪るものか、まア彼等には、本鄉座の小說劇を見て、泣

く位が身上だろうなどと、痛罵を浴せかけてゐる者がないてはない、素より、女學生諸君の中には、忠臣藏も、千代萩も知らないで、始めて本郷座の、所謂小説劇を見て泣く人も尠くはないだろうと思ふが併し忠臣藏や、千代萩は、明治の芝居てはない、歌舞伎芝居の味が分らぬからと云つて、明治の義理や人情が解せられぬといふ筈はない、錦の片が如何に尊くても、古い襤褸になつたものをまさか帶にも縫ひ直されまい價は廉くても新物の黒繻子の方が幾何小ザッパリして氣が利いてるか知れない道理てある。

歌舞伎芝居は次第と滅亡するてあろう、遺つてゐても骨董品だ、書生芝居は、今のところ、勸工場仕入の間に合はせ物に過ぎない觀があるが、兎に角、これが明治の産物てあるから、明治劇となつて行くべき筈のものてある、女學生諸君は、今の若さに、骨董いぢりてもあるまい、勸工場の顧客となるのが當然だ、何となと云はして置くが善い、女學生諸君は耻づる事なく、堂々と大手を振つて、小説劇の見物をするが善いのてある。

併しこれからが相談だが、一言にして云へばあまり手巾を用いないやうに注意して貰ひたい事てある、素より泣くのは情にもろい女性の本性だから惡いとは云はぬ、僞に出る涙てないから尊いものかも知れぬが、原作の小説て見た時、悲しかつた、その聯想や、見る目にあまり場面の慘々しさから、つい取外したり、或は、他の者が泣くので、お附合に泣いたりなどして、眞に人情の至極せる處から泣くのではないやうな場合が甚だ多いやうに見受けられる、吾々の眼から見ると筋の辻褄が合はなかつたり、出てゐる人間の性格がトンチンカンになつたり、場面の移り變りが理窟に合はなかつたり、アラが眼に附いて、舞臺の上て泣いてるのが、却つて可笑しかつたりなどする場合に、女子諸君は一向無頓着て、夢中になつて泣いてゐる、これては芝居を見て泣いてゐるのてはない、泣く爲めに芝居を見に行くのてある。

要するに、これは批評の眼がないからてある、筋や

性格や理窟は何うでも善い、唯、憐れな、氣の毒な、悲しい眞似さへすれば芝居であると思ひ、泣くべきものであると心得てゐるので、お化の繪を見て泣き出す小兒と殆んど撰ぶ處はないと謂べしてある、普通以上の敎育ある女學生諸君が如是き爲躰では、小説劇は何時まで續くか分らない、心細い次第である

小説劇が惡いとは云はぬが、芝居は芝居で、小説は小説である、芝居は見るべきもの小説は讀むべきもの、この二つが混線してゐては、用事は捗取らない、小説劇は一時の間に合はせ物であるから、芝居には芝居のための脚本が出來ねばならぬ、脚本劇が、小説劇に代らぬ以上、明治劇は成立せぬのである。

間に合はせ物の小説劇が、脚本劇にその席を讓る時代が、一日一刻も早く來ねばならぬ、早く來させねばならぬ、それには小説劇が人氣を失つて了ふやうに仕向ける必要がある、小説を脚本に引直すから生じて來る不自然や、不理窟や、頭でつかや、尻すぼりを一々指し笑つて、彼小説劇をして、周章狼狽匆々に引下らしむるやうに取計らはねばならないのである、そこで女學生諸君は、芝居を見て泣く代りに笑ふ事を力めねばならない、手巾の代りに、白い齒を以て、今の書生芝居若くは小説劇を見物する覺悟が必要である、敎育ある女性に、それが出來ぬ筈はない、アラの見えぬ道理がない、批評眼が何時迄も盲ゐてゐやうとは思はれない、諸君は下町の主婦や子守子とは丸て別天地の人である、時代が違つてゐる筈である。

芝居改良の一方便として、思ひ當つたまゝを一寸と書きつけて見たのである。

水繪の友（三）

かつみ

（名畫の説明）

『黑神さん、貴女その神代杉の緣に這入つて居る牛の繪て御座いましやう。それは佛蘭西の有名な女流書家の描いた油繪ださうで御座いますが、種々その書家の御話を伺ひますと。男子も及ばぬ程の立派な技術家て、

その傳記を一通聞たばかりても、妾等女子の身として何と無く、肩身が廣くなる樣な心持が致すので御座います。

丁度好き折ても御座いますから、今日はその書家の御話を致しましやう。』と高子は平素の言葉少なに何事も控目なるに反し、珍しくも極めて快活に辯舌爽に語り出せるなり。これ蓋し裡に欝積せる藝術に對する情熱の迸りしが故ならむ。高子が平常を知る艶子は今日の高子が寧ろ平日に異なる樣子を訝かしく思ひたりしが、而もその談話の甚だ耳新しく、且つ又極めて有益なることともなれば、寧ろ眞心よりの喜悦を以て謹みてその説明を聽きたるなり。

高子は乃ち座作を直し、續て次の如く語り出せり。

『その繪を描た書家は、佛蘭西人ださうて御座いますが、ツイ六七年前に歿たのださうてす。その女の父さんも矢張り畵家で、もう極幼少の時から、父さんの書筆などを玩具として、遊むて居つたのださうて御座います。名はロザ、ボンウオルと申しまして、閨秀書家の大家と爲て、世界てその人の名を知らぬ者は、殆ど無い位ださうて御座います。さうして先づ日本の女流書家なればてすねえ、その取る圖題も一寸マー美麗な花物とか、可愛敷鳥類とか、又風流な山水と申す樣なものてしやう、それが貴女何うて御座いましやう、そのロザは好むて重に獸類を描たのださうて御座いますそれもねえ日本繪の方て御座いませば、先生の御畵になつた御手本を摸寫でも致して、稽古致すので御座いましやうが、夫れが西洋畵て御座いますから、稽古致しますにも矢張實物を寫生爲て、研究致しますより外に途は無いて御座いましやう。貴女如何程美術の發達致して居る佛蘭西に致しましても、女子の身と爲ては中々に容易で無からうかと存しますわ。

勿論最初の間は父さんが書家てあつた爲め、その書室て繪の御手本も寫し、又石膏の摸型なども寫生して稽古致したて御座いましやうが、最早幾分か書けるやうになつては絶へず生きて居る動物に就て勉强致したのださうて御座います。そして動物園などは平日の稽

古塲てあつたさうて御座います。ロザは最初から一通て無い畫才があつて、屢々父を驚かしたさうて御座います。無論天才も人並外れて持つて居つたには相違無いてしやうが、又その勉强も尋常て無かつたさうて御座います。ロザは、幼少の時分からその服裝など、丸て男子の樣な風を爲て女の服裝は畫を描くに不都合だと云ふて居つたさうて御座います。先日も妾二宮先生の御宅てロザの肖像と云ふのを一寸拜見致しましたが宛然何う見ても男子ですわ。一つの藝術に熱注すれば誰も彼樣になるのてしやうが、別に飾りも無くマー穢い怖い老爺さんてすね。尤もロザは長命な畫家て八十歳近くまて生て居つたさうてすが、一生終に獨身て押透したのださうて御座います。

ロザが若い時の研究の模樣を聞きますと、婦人と爲ては隨分大膽な仕事を致したのださうて御座います。その圖題が馬とか牛とか、時には又羊とか云ふ樣な物て御座いますから、是等を寫生するに中々普通の苦勞ては無かつたさうて御座います。或時は動物の研究に誰も厭ふて却て避ける屠殺塲などに參りまして、鬼の樣な屠殺人と朝夕を共にし、一心不亂に動物の寫生などを研究致したさうて御座います。

夫ても熱心はとう〳〵ロザを成功の域に迄導きました、ロザの描た最も有名な大作は「馬市」と申します油繪て御座いますが、この繪は今米國ニューヨルク市の中央公園の美術館に陳列爲てあるのださうてす。この畫をロザが描たのは丁度卅二歲の時てあつたさうて御座います。この畫を描た時は、全く男裝して態々馬市塲に出懸けて、一々其姿勢や骨格等を研究致しましたのださうてす。貴女西洋婦人の遣ります仕事は隨分思ひ切つた事を致しますね。さうして畫が仕上つて世に出た時は女畫家としてのロザ、ボンウォルの名は、世間に轟きまして、もう第一流の畫家と認められたさうて御座います。その繪は近頃日本の諸雜誌の口繪などに、寫眞版となつて、能く出る繪て御座いますが、貴女も御覽になつたてしやう。馬が幾頭と無く列むて行く勇ましい繪て御座います。彼の繪が出來上つて初め

て賣つた時は、一萬五千圓てあつたさうてしたが、其後米國に渡り彼の有名な金滿家のヴンダービルトの手に這入つた時は、十二萬圓近い價格に騰つたと申すことて御座います。

一幅の繪がマー何んな立派な繪か存じませむが、その價が一萬圓とは妾共信じられない位て御座いましやう。夫れがまして十二萬圓とは最早何だかホンノ御話の樣て事實とは思へませんねえ。然しロザと云ふ方は少しも自分の名譽とか成功には意を止めず、唯一心に終まて藝術に忠實てあつたさうてすが、實に概略の御話だけても、妾共御互何だか氣が浮き立つ樣ては御座いませんか。

こゝに懸けてある（口繪參照）牛の繪は、これも矢張傑作の一つて、今巴里の美術館に陳列されてあるさうてすが、御話を承りますと、嘗てロザが住むて居つたフオンテヌブロウと云ふ森に立派な紀念の石碑が御座いまして、其碑には中央に畫家の肖像を、其左右に「馬市」の繪と、この「耕作」の繪が彫付けてあるさうてすが、此御話を聞たはがりても、實に豪い者ては御座いませむか、何れに致しましても婦人だからとて決して失望致すとはあるまいかと存じます。マア能く其繪を御覽遊ばせ、筆の確な處から強い處は如何したからとて婦人の筆とは見えャ致ませむね。貴女何う思召て」

艶子は以上高子が說明せし物語に甚く感服爲したる樣なりしが、初めて口を開き、

『花野さん妾今日初めてそんな御話を伺つたので御座いますわ、西洋にはその樣な豪い婦人が本統に有るのてしやうか、へーこの繪をその畫家が書いたので御座いますかねー。妾には未だ筆法や圖組などは何うてあるか少しも解りませむが、今伺つた御話だけても、妾本統に尊敬致しますわ。それに就けても、妾その御繪ても、又その「馬市」と云ふ名作ても、一枚何うか爲て欲い者て御座いますね。さうして貴女の樣に額に入れて、自分の部屋に飾つて置いて、其畫家の一生を考へながら繪と云ふとを心懸けたら定めて進も早からうと存じますそれに又何の位氣強く希望が深いか知れャ致しませんわ。花野さん今日は一寸御伺を致しまして、不圖も色々と面白い御話まで伺ひ、妾何の位嬉いか分りませむ。御話に身が入つて長座を致しましたが――マー最早そんな時刻て御座いますか。夫ては今日はこれて御暇を致しまして近日又伺ふとに致しましやう。此次は貴女の御書き遊した御繪を拜見さして頂戴な。』



女學校の作文

拜啓當校庭內には東鄕海軍大將の誕生地有之候に付其位置へ松樹を植ゑ客年十一月廿三日該紀念式を舉行し別紙生徒の記事文を徵し及送附候條貴社發行の雜誌餘白へ御掲載相成候はゞ幸甚に候艸々

明治卅九年一月十七日　鹿兒島縣立高等女學校

女子文壇社御中

○東鄕大將紀念會の記

第四學年甲組　北川すみ

うちつゞきにし平和の春の夢は滿洲の野にふきすさぶ夜嵐にやぶられて東亞の空は世のうき雲におほはれたりそれより我もの丶ふは大君のみことのまに／＼勤め勵みて西に東に海に陸に山なす力もてこれを拂ひぬ折しも夏の末つ方新大陸のほとりよりのどけき平和の光りさし出て丶遂にポーツマスの條約となりこの光榮ある戰爭は終局を告げぬこれと共に我日の本のほまれも一きり高うなりぬかくもわが國が東洋の覇王と仰がれ世界の强國と競はるゝに至りしはそも誰の力ぞや上、大君の御稜威なることはいふを待たざれども又海陸軍人の二なき其身を犧牲としてつとめられしことと又大なりそが中に東洋のネルソンと稱され恰く世界人民の欽慕しておく能はざるはそも誰ぞやこれなん我等が日々通ひつゝある學校內にて孤々の聲をあげられし東鄕大將にぞあるそも大將が偉功は三才の童も知るこの古今に絕えたる英傑の誕生地を校內に有する我校の名譽や實に極まれりいかでかこのまゝに捨ておくべきされば師の君始め學友相はかりとこしへにつたへんとて去十一月二十三日を卜してその地に綠深き松の樹を植ゑ碑を建て紀念會を催しぬいざやその有樣を記して後のおもいでとせん

午前八時半式は開かれぬ校長の談話屋代先生の祝詞などいとおごそかに終りて一同大將讃美の歌を歌ひそれより庭にいで大將の英姿にも似たる松の枝の前にて再び歌ひぬかくて當日の餘興として談話音樂文藝會は開かれたり見るもの聞くもの一として妙ならざるはなく興より興に入る來賓はじめ拍手の內に終りをつげ午後一時より運動部となる音樂隊の興添ふるものはなけれども準備いとよく整へり見る人ごとに其面もち何れも活氣を含み順を追ふて行はるゝ競爭の一二三を相圖に互に勝を爭ふ狀は日露の戰ひのごとく勝利を得るさまは大將の大捷にさも似たりかくて快はいよ／＼ますのみ、かくていつしか定刻となりてめでたく閉會せしは黃昏近き頃なりきこの樂しかりしけふの日我はたゞこの松が枝の榮え行くとゝもにほまれたかき大將の御健全を祈るのみ

文學士　沼波瓊音先生選

論文

天　○理想の死

府下北豐島郡王子村四三一小泉方　緋百合女史

妾の兄樣のお友達なる方は昨夜遂に藥石の功なくして亡くなられました。

其方は生前非常に御酒を好んで、御酒を呑めば頭腦に何事も考へなされず、常に『酒に醉うて居る時は極樂ぢや』と仰せられて、其れを人世の快樂とも趣味ともして毎日〳〵おあがりになつて居りました。今度の御病氣もそれが元で遂にお亡くなりなすつたのださうです。

『あれも可愛さうな事をした、それぢやから酒などは呑むなと云ふたのぢや』と、斯う禁酒會幹事なる妾の兄樣は申しました。が、然しながら妾はそれと反對な考へをもつて居るのであります。それは如何に酒などをつゝしんで養生をするも、如何に酒などを禁じて衛生に注意するも、人生僅か五十年、長くも百歳を越える人は殆ど無い、其れ故に、平々凡々、朝に起き、晝に働き、夜に寢ね、かくて趣味も快樂もなく、つまらなく黄泉に入るよりは、趣味に生れ快樂に生き、面白く愉快に、酒に趣味を有する人は酒に、文學に趣味を有する人は文學に、美術に趣味を有する人は美術に、音樂に趣味を有して居る人は音樂に死ぬ、これこそ人生の意義を全うしたる理想の死であらうと考へる。

（評）單にこの肉體が世に存在する時間の長短に何の意味かある單にこの肉體をのみ肥え太らしめて何の與かある余は酒を嗜む者にはあらねど深くこの論旨に賛する者なり

地　○かれ落葉

茨城縣稻敷郡莖崎村大字大井二八　石塚靜江

一。人生の歸趣をたづねては悶え、理想よ何よと憧憬れて、あらぬ方ざまにさ迷ひ出でんよりは、父が大事なり、母が大事なり、夫が大事なり。素直に忠實に吾が業に安じ、分を盡して一生を終らん哉。

二。男性の德は太陽の如きか、照々たる其光、衆人の仰視るところとなる。女性の德は大陰の如きか、清麗なる其光。人をして和ぎ懷かしむ。そよ月が太陽の蔭に在て光るが如く、女性は男性の後に在てこそ麗々た

れ。

三。さえ／＼て麗しき月影も、濁り江の水にうつされては、影汚るめり。色眼鏡かけて人の行爲をとやかくと難ずる人ぞうとましき。世にはさる人の多くて、溫き情の淚を灑ぐものは少し。無垢の名をきずつけられ、汚なき身を誤たる。悲しき哉。

四。夫婦共稼ぎこそまたなく樂しかるべけれ。人は何とも笑はゞ笑へ、うき世の風塵を他所にして、片山里の侘住居、鴛鴦の契も深く、春波こまやかに東風やはらかなり。愛の泉の迸りては憂さもつらさもしらま弓、春立ちくれば、霞がくれに百鳥の聲、そは吾等が春の歡樂を謳ふらし。綠にけぶる河柳の下ゆく水も長閑やかにて、菜の花に胡蝶戲はるゝ、朝夕べ、共に南圃の霞に耕し、秋郊實れば又相共に穫る、夏は月影涼しき竹緣に湯上りの肌を吹かせ、冬の夜は凩に荒めども、こゝには溫き和風の流れくるよ。榾火うち焚きてなふ繩三把、つゞれを繕ふ針仕事、長男がすら／＼と書讀む聲には、いそしむ家業の末も賴母し。人生の眞味は、かくてこそ得らるべけれ。金殿玉樓は願にあらず。

（評）これなしも消極の論と笑ふ人はともに情を語るべからず

人

○運動の響

大阪市南區東清水町一　杉　田　孤　泉

○今やスタートを發せんとする撰手に一發の銃聲は、まことに心地よきものなり、忽ち起る拍手の響、そはまた賴しきものなるが中にも可愛らしき男の子の拍手は殊に心賴し。

○ボールのラケットに打たれて心地よく發する響、そは運動界に於ける廿世紀の響なり。アウトサイド、インサイドの聲の廣きグラウンドの片隅より聞ゆるも心地よし。

○綱引きのかけ聲は心强きものなり。綱引きのかけ聲は統一を計るが目的なり、一致を計るが目的なり。人間社會凡ての事業は、綱引きに於るそれの如し、一致協力せし方勝つなり。

○應援の聲はいと心强し。處世の上に於て殊に然り。應援者なくば不可なり、同情の聲なくば不可なり。何事も力强き者のみ勝利者にはあらずして、力强さとともに同情を得る力の又强き者、則ち勝利者たるなり

（評）最終の一節感殊に深し嗚呼故絲雨の如きは十分の力ありつゝも應援の聲を得ざりし爲に不遇に終れり

秀逸

○鏡に向ひて

三河　澤田つま子

母君の遺身ぞと賜はりし手鏡に、われ初めてわが面影を寫せし時、わが面はの色は蒼褪めて光澤を失ひ、眼は曇りて涙を湛へ、髪の零れ毛わな／＼と打顫へて頰に亂れたる、われは餘りにわが面影の悲しく憂はしげなるに驚きしが、そを何故とは知らざりし。

かくてわれ再鏡に向ひたる時、わが眦は釣り、眼血を含み、口元に得言はぬ憤を示して瞳の色も只ならぬ樣、われはわが面影の恐ろしく惡々しきを悲みしが、そを何故とは知らざりき。

三度鏡に對せし時、われは驚くべし悲しむべきわが面影の、いとも愛すべく喜ぶべく打變りて、唯匂やかに笑含めるを見ぬ、眼には希望の色を浮べ、頰には美しき笑凹を湛へ、恰も春の花の綻びたらん如、嬉しさと樂しさの氣は滿ち溢れてあり、されどそを何故とは知らざりき。

田舍「賞外」加賀鶴來町波佐谷碧子



われは今日しも四度鏡に向ひぬ、さあれ憂はしげの影憤れる姿は跡なく消えて、嬉しと笑含めるにあらねど亦悲しと惱めるに非ず、唯心虛しう氣平に、面は清う澄み冴えて一點の曇をも止めざるなり。此所に於てわれは悟りぬ、哀れ鏡は清明公大にして露許りの僞も止めざる物なれば、寫せしわが面影の或は悲しく或は恐ろしく、將樂しくも見えたるこそ、皆心に種々の深き曇の存したればなれ、されば己が心に秘めて人には知られじと思へる事も、いかて面影に現れてやは、さるにても寫れる影の醜きを悲しみて、己が心の曇を忘れぬるわが行ぞ恥しきと、彼の伊勢の大神が古きみ敎も思出されては、胸に怒、悲、恨、悶の想湧き立たん時此の鏡に其の面影を寫して、只管に心を虛うし氣を平にし、かくてわが世を美しう終へんと決心しぬ、決心してさて再鏡に向へば、わが面影はいよ〱清々しう澄み冴えて……。

（評）淺さやうにて實は大なる悟なりこの筆つきともすれば冗長に流れ易き傾あり注意ありたし

○功と賞

茨城縣　小泉濱子

功とは忠勤を國家に抽んでゝ、美果を國家に收めたる美行を揚ぐるの名なり、故に專ら功を立てんが爲めに勤務に服するは、功の爲めに働くものにして、未だ功業の至醇なるものとせず。賞とは功に對する國家の褒美にして、之を受くるものに在りてはむしろ分外の觀あるもの、功を立てんが爲めに勤務に服するすら、既に功業の至醇なるものに非ずとせば、賞を得んが爲めに勤務に服するが如きは功業哲理の上に於て最も下級に屬するもの、況んや功無きに賞を求め、小功に大賞を得んと欲するをや。名利是れ事とするは、唯物實利の俗國に於て之を視る、日東の神國は由來君子の國なり、貞女の國なり。賞を受くる必らず信ならざるべからず。

あゝ、然るに、我等女子の品性を陶汰し、思想を高潔ならしむる本誌上に於て、他人の困苦に成れる詩文を盜み、名を賣り賞を求めんとするものあり。國家の母となるべき女子にして、自ら美しきみ神のみ手を離れて暗黑なる俗界へ入らんとは、さても淺間しき事ならずや。たとへば手には美しき梅花を手折りながら足にはけがらはしき泥土を踏むが如きか。

（評）　同感なり、この度の應募文中余の拙文を盜みたるあり、余の選者たるを知らでのことならむ、斯るは寧ろ無邪氣に肉するか

○孤兒を論ず

香川縣　紫菫女史

あゝ孤兒。これ人生最悲痛の聲にあらずや。彼は愛の神のたなごころより突き落されたる不幸の兒なり、たとへば羽脆き胡蝶の芬芳を失ひて、溟渤の風に彷徨へるにも似たらずや。されど彼れが哀れなる境遇より、尋常詩歌的音響を聽取してのみ止む勿れ。われに熱したる血あり、溢るゝ涙あり、乞ふ吾人をして少しく之れに灑がしめよ。

あゝ孤兒彼も始めは雙親ありしなり。その始めて呱々の聲を揚ぐる時に於て、何ぞ既に運命の走れるものあるを知らむや。その襁褓の裡にあるや、必らずや雙親は夢寐にも吾兒の行末を案じたりしならむ。若し夫れ一朝志を立て榮達せば、金銀財寶、兒の爲めに惜む所にあらず、桂を焚き玉を炊ぎ、燦爛の衣を纏はしめ、深奧の學を修めしめ、一家和合して以てその成長を待たむとす、よしや轗軻淪落、纏ふに衣なく食ふに物なく、母子手を携へて路頭に彷徨ふに至るも、一握の米半碗の水と雖、必らず飮食を倶にし、天を衾にし地を枕にするも、痩せたる腕は兒の頸を擁して離るゝことなからむ。若し不幸にして髑骸を野邊に曝らして、離々たる芳草を肥すことあらば、一蓮托生、莞爾として

倶に來世を悞まむかな。嗚呼これ一般親子の眞情に非ずや。而して今や慈顏また見るべからず、温言また聞くべからず骨肉空しく相離れて、孤影煢々、獨茫々たる原頭に迷ふ。今彼が衣たる縞目も分かぬ破衣、彼が纏へる荒海布の如き敝帶、その初は蝉乳根の心を籠めて織りたまへるものなるべし、春風秋月、恰かも人の惱を解くによしと雖、而かも胸裡に鬱積せる漠々たる愁雲は、遂に散じ盡くす能はざるなり。思うてこゝに至れば誰か一滴同情の涙なからむや。あゝ天下の孤兒、彼はやがて弱者の代表者に非ずや、彼はやがて不幸の權化に非ずや。吾人は小造化翁の語を假りて『弱き者よ、汝の名は孤兒なり』と叫ばむとす。

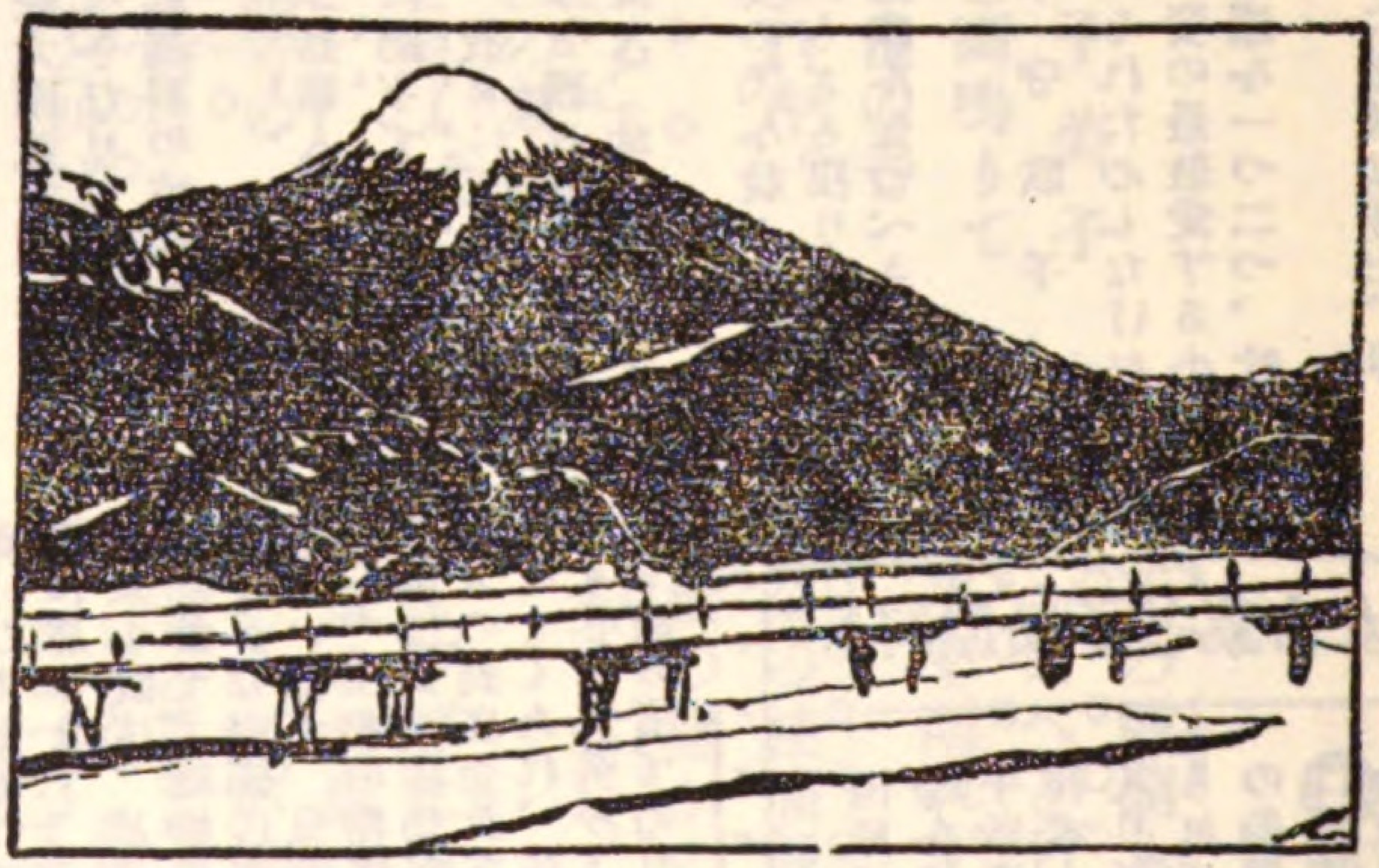
（評）文は可なり意味の不足を惜む

○葛原ヶ岡神社所感

都筑郡　村田たけ子

余生れて史を好む事大方ならず、常に之を繙くごとにわきて思ひ出てらるゝは、俊基卿のふる事にぞある。

玆に一日の閑を得て、鎌倉なる卿が社に詣てけるが、日頃の思ひを目のあたり見る嬉しさにかへ、荒れにし社のさまを見て悲しさのあまり其所感を述べて、世の心ある人に語りきこえてむ。



越前不二（賞外）　福井今立郡　佐野よしな

卿の事蹟につきては更にも云はじ、幸なくも途に謀漏れて、五月雨淋しき頃、鎌倉にぞ送られける、「一夜を明す程だにも旅寢となれば物うきに、恩愛の契り淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行末も知らず思ひおき、年久しくも住みなれし、九重の都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出て給ふ、心の中ぞ哀れなる」其正に斬られ給はむとせし時、都よりはる〴〵來りつる助光と云へる小侍に、辭世の歌を認めて妻子の事を托しおき、遂に此岡のつゆとはかなくなり給ひぬ、あはれ滿腔の經營を水泡に歸して、空しくなり給ふ、卿の心の如何に口惜しかりけむ、辭世の御歌に、

秋を待たで葛原岡に消ゆる身の、
つゆの恨みや世に殘るらん。

今もこゝに社と墓とはあれど、あはれやいとゞ荒れ果てゝ草は華表の半ばを覆ひ、社殿は半ば朽ちはてゝ、見るもいたましき限りなり。

あはれ京阪の地に住む人は、湊川なる楠公の社に詣でざる人はなからん、否東都の人と雖も亦一度び彼地に至りしものは此所に詣でざる人は少からむ。知らず、鎌倉に住する人、否としく此地に來りて、暑を避る人、果して卿の社に詣づるや否や。

それ卿とても、君を思ひ國を憂ふるの心深きに至りては、決して楠公に劣れりとは、いはれじかし。さるに公はいかめしき社に祭られ四季の御幣絶ゆるなく幾千代かけて崇められるゝに代へひとり卿にありては、碑は世ばなれたる畑中に立ち、社は深き藪の中に埋もれて、詣づるものとては、たゞ小鳥のかげのみ。

あはれ郊原のつゆと空しくなり給ひし卿が靈、今なほ此葛原ヶ岡に殘る

なり、げにいたましき、限りならずや。

◎むだがき

讃岐　あやめ子

◎世人よく眼を開きて、現社會即ちこの腐敗せる社會を視よ、各人口にこそ仁義、德道を唱ふるも內面にたち至れば、利己主義の甚だしき、

◎密雲雨らざれば人をして懊惱せしむ、寧ろ霹靂一聲大雨盆を覆へして來るに如かず、然る後靑天仰ぐべきなり、明月觀るべきなり、雷霆の怒りを恐れて、驟雨の傾到するを厭ふ者、何ぞ能く淸風萬斛の凉味を解することを得ん、

◎人あり人爵を求めて得ず、乃ち我に天爵ありといふ是猶人爵に戀々たる所あればなり、天爵の一評、畢竟孟子のへらず口に過ぎず、達者は初めより爵の尊ぶべきを知らず、されば人爵に對して、故らに天爵を云ふ必要もなし、若し夫れ、美人を見て化粧せる飯凝なりと罵る者にして、故らに庭前の花を指して、是を我家の美人なりと云はゞ、此者豈に初めより美人に意なしといふを得んや、

◎家屋を造るは雨露を凌がんが爲めなり、濫りに輪奐の美を競ふ勿れ•衣服を着るは寒暑を防ぐ爲なり、故に暑からず、寒からざる限りは、妄りに修飾華麗なるを要せんや、飲食は饑渴を癒し、健康を保つべきのみ何ぞ美酒佳肴を要せんや、

◎巖谷小波先生

姬路市　水守歌子

妾は文士を月旦するとか、評隲するとか云ふ樣な、大それた心もなければ、又其樣な技能が、第一ありません。只此處には、妾の最敬愛する小波先生の文を愛讀するにあたつて、腦裡に描かれた所感を一つ二つ、吐露して見る丈てあります。

妾は、頭髮を奇麗にわけて、獨逸髭をぴんとねぢ上げた立派な紳士、即ち小波先生の面貌を胸裡に描きますと、其れに隨つて、可愛らしい坊つちやんが直ぐ浮ぶのてす。それは、先生が少年文學の大頭領て、其雷名は天下を振撼せしめて居る、そして、或は一册の書となり、或は少年世界紙上を飾つて居る先生のお伽噺を見て、『僕は小波の叔父さんが一番すきだ、あのお話のうまい事、面白い事、學校の先生だつて誰だつて、かなふものか、ねえ君、』と云ふ樣な談話が、絕えず少年間にくりかへされて居るからて、實に其勢力、即ち「小波の叔父さん」と云ふ固有名辭は、全國數十萬の少年の小さい腦裡に、烙印された樣にくつついて、永刧磨滅する事が出來ないのてありませう。

が、ひるがへつて小說家としての先生はと云ふと、妾は餘りに感心せん樣に思ひます。

由來小說は、どうしても感情をゑがゝればならないのに、先生の筆は大變輕妙て、輕妙の極、何となく調子が輕くて、深刻骨に徹すと云ふ樣な趣きがない樣に思はれます。其故か、此頃は餘り小說界には筆を染められない樣て、只管、筆を呵し辭を壯んにして、飄逸縱橫の才をお伽噺に托し、少年の指導を以て、已が任として居られる樣てあります。

先生は又、俳句が中々うまくて、現に本誌の選もして居られますが實に他人の到底企及すべからざる、垢拔けのした句が多くあります。

何はともあれ、多くの少年少女が、少年世界を聲高々とよみ上げては、嬉々として笑み丁度親の樣に崇めて居る先生の、永久に御健在ならん事を、祈る者てあります。

河原操子と蒙古女子留學生

河原操子は信濃松本の產にして當年三十二歲、幼より學を好み、下田歌子女史に就いて修養する處あり、女子敎育には最も經驗あり。明治三十五年淸國上海なる務本女學校より女敎師を聘め來りしが、操子は其選に入りて上海に渡り、在職中、內蒙古カラチン王に聘せられて家庭敎師となり、王の一族他貴族の女子に日本の學問を授け、大いに好結果を得たり。さる程に操子は此度カラチン王重臣の娘、何慧貞(十五)于保貞(十五)金淑貞(十三)の三女を日本留學の目的を以て伴ひ歸り實踐女學校に入れて勉學せしむる筈なりと云ふ•操子もと一個巾幗の身を以て、遠く異境に渡り、王族の信用を得て女子留學生を伴ひ歸るに到る、誠に女流敎育家の摸範と稱すべし

河井酔茗先生選

新體詩

特別第三賞

○太平洋の春

長野市　安孫子美子

みなみより湧く春潮の
今海底を走せ行けば
唯ゆたゆたと岸をかむ
時こそ來れと高鳴りて
水面にゆるき浪の音
太平洋は春なれや。

「地より美くしき彩あるを、
愁ひて裝ふ女の神の
唯ゆらゆらと空に立つ、
天上胡ぞ寂なる」と
霞と云はじ何の氣の
太平洋の春を見よ。

あゝ大洋の中に浮く
椰子の大葉のかげにして
沖行く船を呼びとめて
諸多の島の島守の
春の潮をきく時は
『彼方の大陸』と叫ばしむ。

偉いなる哉渾圓の
いづこか春の生れきて
それとも分かぬ大洋の
あゝ空青く水藍く
春やいづくに老いて行く
酔へるやうなる潮の音。

明治の髫髮は此女秀才を生みました、願はくば驕らず荒まず、渠が抱ける詩才を伸ばせよ（酔茗）

天

○月宮殿

京橋區　曾村幸子

不死の靈藥も姬なくに、
伴へたべと竹取りが、
下界を離れずみもだえて、
永刧の齡も何にかせん、
願ひ空しう人間なれば、
魂よ小笹にしみ入りぬ。

萬朶の桂爛銀の、
醜世の戀ひの色糸に、
少女さびして黐へす、
聖光に閉ざす月宮殿、
若紫の香こめ、
羽衣長し赫耶姬。

あゝ下界にありし追憶よ、
竹取る翁忍びては、
美し小姬が魂のせて
羽にこもれる移香や、
袖にこぼるゝ御涙
小笹にはしる玉霰。

坪内博士の「赫耶姬」出でゝ、なほさら竹取の詩的價値は高められましたが、此作者「赫耶姬」以外更に一詩境を見出したのは、お手柄と言ふべしです（酔茗）

地

○冬のすみれ

能登輪島町勝田方　池野秋花女史

ほろびぞみつる冬にして、何をもとめてあこがる丶、
何のなさけに咲きいでし、路の芝生に身をしめて、
優しからずや冬すみれ。
ちいさくはしき綠はの、心藏に似るもなつかしく、
春のすみれに較ぶれば、誠にうすきいろなれど
そはうた人にき丶ねかし、こ丶ろのま丶をあらはせる
あせゆく戀の其れにして。
もとよりなれば伶人の　夢にいる可きはえもなく
さびしき冬にあれいでゝ、優し蝴蝶の戀もなく
ひとひを風になぶられて、夕もろくもしほれ行く
あ丶北風よ心して、つよくなふきそこの花に
幸にはぐれしわかき子の、ちひさき夢もこもるらん

北寒の地、冬の葉の花咲くとは珍しい、うた心の動いたのも道理、而かも斯ふ言ふ題には得てこじつけが多いのに、作者は自然に情を寄せてわざとらしくない處が價値（酔茗）

人

○新　光

神奈川縣鶴見五四一　佐久間芳子

我世新たの時來ぬと、金雞告ぐる朝ぼらけ、
見よひんがしに彩雲の、帳か丶げてしろがねや、
こがね光の征矢なげて、ゆらめき登る初日影。
筑波紫富士紅に、被衣姿のおもしろや、
瑞雲四方になびきては、秋津島國新らしき、
光のうちに目さめつ丶、蘇へりつ丶春はよし。
眞珠貝なす南洋の　海遠々しみなぎりて、
艮さしてましぐらに、闇を流る丶黑潮川、
波間はるかに海神の、朝を讃ずる樂の聲。
天馬もろ羽の羽をのして、久方遠く天翔る、
乘るはたが子ぞ金冠の、七つの星のきらめけば、
天地初發の型なりて、もる丶やこれぞにひ光。

新光四射、詩に靈あるもの（酔茗）

秀逸

○木　枯

周防　衣縫ふ子

今日もつとめの小袖縫ふと、針箱出し衣裁てば
木枯の聲すまじく、人の春衣の香は寒し
針に持てる尺も、指先堪へぬ冷たさや、
双手おほへど火桶には、あ丶灰のみぞ白うして

針箱のひきたしに收めて置くやうな詩（酔茗）

○白鳥

播磨　佐野濱子

靈奇の白鳥夕日を浴びて、羽ばたく瑞樹の影草堂に、
慈光世の瞳にそれたる秋か、遍照くすびて佛ぞ立てる。
吁、今巷を此の森に入り、榮ある歡樂手をあげ呼べば、
白鳥高鳴く『神秘の幻境、叩かば靈の門光は燃えめ』と。
うなづく和魂—我が生の夢に。
空の大鐘まろがり來ては、
遷轉倒れし沈の香あふれ、
ふと見し彩影佛をめぐる。
鳥は久遠の靈みちびきて、
聲音も遙に翼をふるよ。

神秘を歌うて自分の詩領を拓かうとする健氣な力ある作家と見ました（選者）

○鶯を放ちやる歌

備後仙養の邊り　幽泉子

雲閉ぢこめし春さめの、　雨はあとなく霽れ行きて
青葉の末に露しげく、　紅梅の花ほゝゑみぬ
われは手にせる詩卷を、　書齋の窓に捨てをいて
日ごろ愛てにし鶯を、　放たんとすればさすがにも
遠き別離を惜みてか、　やさしき翅を振はせて
チ、と慕ふて啼いて寄る、　愛しき姿のしほらしよ
あはれ優しき汝が姿と、　奇しく妙なる汝が聲よ
そは自然のみ園生に、　樂園の譜を調べては
世に容れられぬ悶へ兒を、　慰めんとてのみ使か
さるを過ぎにし春の暮れ、　情は薄き里人の
手に捕はれて吾が宿の、　寂しき窓の朝夕を
辛き運命に過ぐしてし、　あゝその恨みは盡きざらめ
されど優しき汝が聲と、
汝が愛しき姿とは
友の臨終の枕邊に、
無限の慰藉を與へてき
汝が優しき音を聞きて、
「神の秘曲」と讃へてし
其の君永劫に世を逝いて、
今また汝と別れんに
悲哀胸にせまりきて、　送別の歌よみも得ぬ
さらば優しき鶯よ、　寂しき籠を疾く出て、
花の香かほるみ苑生に、　我世樂しく歌へかし。

委曲、情は言盡くした、さらば行け、わが鶯（評者）

たそがれ　（賞外）



伊勢山田　清水政子

○薔薇園

常陸　花香女史

燃ゆる紅あざやかに、　玉を聯ねて一つらに
香を吐く花や日の駒の、　あゆみとゞむる薔薇の園。

可愛ゆき小鳥の忍び音を　葉蔭につゝむあとゝめて
遲々たる姿舞ふ蝶の　翼の風を追ふは誰ぞ。
快樂の極み長春の、　さかりを占めし佐保姬は
今し霞の幕閉ぢて、　眞晝の夢を夢むらし。

こゝの徑よ初戀の、　こゝの芝生よ邂逅の
この亭よ相共に、　この池水よもろともに。

此薔薇の苑には戀の最高潮に乘れる人ならでは入るを許さない（醉茗）

○春の少女　兵庫縣　田中園子

紫雲のとばりひらかれて、　若駒の脊に鞭あぐる
少女は春をいだきつゝ、　しづかに降る若葉の野
想ひの極みはてしなく、　深き自然の香はこもる
空にさへづる野ひばりも、　靜けき野川のせゝらぎも
天地やはぐ愛の曲、　自然に起る淸き歌
少女は春をいだきつゝ、　下りぬ若草もゆる野に

春の下る姿は斯うもあらうかと想ばれます（醉茗）

○野べの花　土佐　濃紫

たが夢の　あとをかかたる、
淺茅原　綠はふかみ、
草ふかく　ゆきゝもみえず。
あはれこの　しげき葉がくれ、
花小さく　名もなけれども、
白妙の　色なつかしき一二輪。
言問はん　やよや其の花、
何せんと　こゝに生ひ出し、
露深く　いふせき野べに、
誰が爲めに　かさる花ぞや、
訪ふ人も　なつぐさがくれ。
何せんか　我身もしらず、
誰が爲めと　我は定めず、
たゞ神の　御手のまに〱。
天地の　露に生ひでゝ
天地の　露にぞかへる。

少し理に落ちさうな處を、終の一節あつて、生氣全幅溢れて居ます（醉茗）

○虹　豐前　すみれ子

海べ山べをゆきめぐり、　柳さくらにあくがれて
塵にましらぬ歌人の、　出入る呼吸の凝りなすか
あかきむらさきはた綠、　七色のいと染かけて
たな機まつる少女子の、　戀の息吹のかよへるか
墨雲まよふたかやまの、　尾上にたかく根をしめて
汐たちさわぐあら海に、　遠くもかゝる虹のはし

棚機まつる少女の戀のいぶきより虹を聯想したるは美し（選者）

○曼珠沙華　　松江　滿　子

月の都にはかなみし、胡蝶の嫉妬精と凝り、
生命の衣「曼珠沙華」、まとひて地球に隕にける。
きのふの榮華色なきも「節」にはさすが興がりて、
綻びにしが世のひとは、醜花、とのみ眼をそらす。
斯くして移る明の日は、　梅　林　（賞外）
牛の犠牲とやなりぬらむ、
石に凭れしものうげの、
色は何をか恐怖たり。

曼珠沙華は殆んど詩題に入らない花でした（選者）

○亡母を憶ふ　　大和　坂上きぬえ子

最早や思は絶えぬるを、
あやしや今も折々に、
夢に入り來る面かげは、しほれぬ前の母にして、
見るはなつかしさりながら、すぎし昔に引きかへて、
今は夢にもなか／＼に、見えずもがなと思ふかな、
覺めても殘る面影に、心の闇をたどられて、
あだの歎は何時までも、去らで身にそふ苦しさよ、

辛うじて思ふ處を歌ひ出でたところに、眞情が溢れて居ます（選者）

○晨の賦

明星は早や薄らきて
彩雲なびく東の
殘月淡くたゆたひて
籠めし黑幕の影もなう
紅の大空、瑠璃の海
愛と快樂と新らしき

周防山口　堀　て　つ　子



○漂　落

晩鐘ゆるく沈む時、
弱き思を運びきて、
風に縺るゝ洗髮、
霑む眼に見上ぐれば、
我の思に似たる哉、
疾く跳れ罪の子と、
戀に破れし終世は、

備後　池　田　雪　子

希望にみちし朝日影
空を眞紅にいろどれば
山の端低う薄れ行き
夜こそ漸に明けて行く。
其の間に出でし光明の御神
生命を下界に垂れまして
「人の子覺めよ活動の
幕はあきぬ」と宣へば
汚にみちし塵の世も
暫し聖ときパラダイス。
今し夢より覺めしごと
薄靄たちし仙岳は
明けのみ空に色榮えて
神秘ほのめく朝の山
靈光を讚美のむら雀
平和の村に啼き立てば
夢現なる懶怠には
心にくゝも聞ゆらん。

下　野　新　井　學　子

朽ちし丹塗の欄に
彳む足の力なく
亂れし胸のやるせなく
雲は薄れて夢のごと
希望の星の閃きに
啓示は淸しかはあれ
只死の榮えを樂まん

○うぐひす　　新潟　小島ゆき子

彩うるはしき花の香に、あくかれ出てゝ春姫が、
かすみ初めにし御空より、羽袖の振もかろやかに。
やさしき蝶の背にのりて、詩の花野に下りますと、
讃美の樂の清らかに、朝野にうたふ若き鶯。

○微吟　　須澤　和久露子

紅、樺、黄、紫の、彩雲迷ふ西の空、
其處に無限の歌謡する、あてなる女神おはさんを。
せめて小鳥と身をなして、翼も輕ろく夕榮の、
輝やく國にゆき得なば、聖なる歌も學ばんに。
人の子罪の多くして、はかなき我を悲しみぬ。

○湖畔の夕暮　　神田　はま子

くれない匂ふ夕ばえの、空ゆく雲をうつし見て、
流もいてず波たたず、とこ平和の湖の面。
朝五彩の花うけて、夕に沈む水の色、
變えぬ劫初の水底に、藏しゝ春は幾何ぞ。
山脈影をたゞよはす、岸べの彩波うすらげば、
涙は音なきれをたてゝ、鐘や湖心の底になる。
夢か、ささやく明星の、啓示の光かゞやけば、
きくは浮世のわれながら、涙に寄しき響あり。
夢よ、現よ、こゝだくの、あとなき霞覆ひては、
水心なく影失せて、殘るはわれと峰の松影。

○をとめ　　小石川　佐川貞子

ゆかしき君を例ふれば、色香けだかく咲き出てゝ、
鹿の子入らぬ岩かげに、かくれて匂ふ白百合か、
葉末にぬけるしら露に、きよき姿をやどしつゝ、
ゆかしき笑をよな／＼に、もらすみ空の星のごと、
聖けき神のそれのごと、君の小さきその胸に、
清く尊くけがれなき、まことの愛ぞこもるなる、
さなり妙なるその胸に、こひの春風そよぐとき、
愛の水枯すさぶ身は、そこに希望の光あり。

○稻積車　　紀伊　森井館枝

垂穗の稻を刈りつみて、小田の細道ひきてゆく、
稻積み車おしがてに、里のわらはの歌ふなる、
ひなびし歌にたそがれて、五日の月の影淡し。

○戀語り　　八王子　小池つれ子

星の薫りを涙に載せ、薄紅なゐを流しつゝ、
朝を讃美の歌高ふ、いさゝ小川の水の面
寫つす姿の美しき　月に憧がれし宮人が
同じ運命の紅花の　散りて漂ふ果敢さを
共に泣かんの心かや　袂の一片引きとめて
眺めつ秘めしふり袖の　羅もの透きて見ゆる哉

○歳月　　信濃　智嘉子

さめたる戀の消ゆるごと、老いたる年は過ぎ去りぬ
歌ふて送る人もなく、別れ悲しむ者もなく
雪のこみちを横ぎりて、老いたる年は過ぎけれど
心にかくる人ぞなき、若き戀路にさも似たる
新らしき年訪れぬ、されども／＼新しき
睦しき年も時の間に、老いたる去年と變るらん

○月の夜に

鳥取 さつき子

もし神の、みゆるしあらば、
後の世は、花と咲かはや、
九のとせ、逢はてとこしへ、
別れにし、友のみ墓辺、
いと小く、葉がくれに。

山はみな、さけて砕けて、
大海の、あせむそれまで、
そと咲きて、そと泣きつ、
そと散りて、あはれとこしへ、
さめやらぬ、み夢守らむ。

かへり來ぬ、まぼろし追ひて、
なげくいま、やさしき光を、
わが袖に、あたふるが如、
後の世も、花のなみだに、
ほの白く、宿れ月かげ。

○君待つ夜

宮城縣 渡邊しげ子

君來ますべく、春じほの、
わきくるおもひ胸にひめ
いけてまちにし寒梅の、
窓をかすめてふる雪に、

冬（中外）

花瓶奇しくくだけたり、
夜はふけぬれど君はきまさて。

○函嶺の歌

徳島 佐藤きん子

息杖の音、駕の揺れ、
越ゆればさらに坂路や
胸突く坂路八丁を
道は函嶺に入りにけり。

樹立々は仄くらく、
松にからめる凌霄花や、
巖岨に咲く白百合の
折らまくほしき風情かな。



○競馬

千葉 若塚みさを子

綠葉茂る鎭守の森の、
躍り嘶く鬼鹿毛、
與三兵衛日頃の手並を示し、
兄弟の前、戀人の前、
傍に長き芝生原、
飛龍勇みに勇む、
晴の競ひに負くな、とりぞ、

○舞姫

徳島 小川なみ子

鈴栄花さき風かをる、
もとより『狂亂』の興なれど、
紙折りなせし揚羽蝶
これにも魂のこもらでや
白銀黄金ちりばめし、
かざしの花の眩耀うも
纖手妙なる舞姫の、
金絲の縫の裾模樣。
睦み番ひに飛びめぐる、
錦の衣、綾の袖
れたしや蝶の戀追へど、
なやみ、つかれに、たゆたひし
あはれや羽袖とめかれて、
花のしとれに微睡し
こゝろは迷ふ春の夢。

○世

播磨赤穂 荒屋康子

小さき珊瑚蟲も集ひつつ
倒捲く海のただ中に
人も心を合せつつ
騒ぐ世なれど永久に
年月經れば大瀛の
峙つ島を築くなり。
敵に當らば仇波の
樂しき社會なば立てつべし。

佐賀 尾保かめ

○揚翅蝶

王子 朴蝶子

詩に嬌樂の奥庭に
花片天宮の姫君の
金絲銀絲の彩翅得て
淋しう散りし連翹の
籬に入りしと召されては
ゆろう鋭るか揚翅蝶。

燕脂皿おきて朝の窓　奥ゆかしき姫君が
見よ歌の譜の『彩絹の　優羽微風得たへじを
窓に入りな』と心ある　花より花と縺り行く

◎巖頭に立ちて

東京　黒ゆり

そはうらぶれの少女子が、　戀の懊惱の忍び音か、
あらず、淋しき荒磯に、　闇を私語く涙の音。
ゆくては遠き限路のはて、　闇にや迷ふ白銀の、
かぼそき光なまじひに、　戀のゆくへを思ふかな。
白きひかりの漂れては、　いたましいかな涙の色、
見よ遠海の闇の上は、　暗きに落つる幕なるを。
見ずや消えゆく夕づゝ、　そのゆくすゑを思ふ間に、
淋しの磯よ露罩めて、　涙は靜けき夜となりぬ。
蝶の羽袖を纖しては、　晨の花にいこふごと、
秘めて彩ある星くづの、　人を咒ふか紅に。
風や千里の涙に鳴る、　闇に私語く音をきけば、
涙のしぶきのしく/\と、　忍ばるゝかな戀の行くすゑ。

◎深山の深潭

滋賀　辰井季瑶女史

宿世は金鱗銀鱗の、　彩美はしき天の龍。
月宮殿の北面に、　舞樂の御宴守護しが、
おぞや惡魔に誘惑はれて、　紫帳の奥の嫦娥姫の、
御座狙ひし御咎めや。　奈落の底に落さるゝ、
罪の牛をゆるされて、　萬里を地界に放逐たれし、
惡龍來り棲しより、　四邊妖氣立ち罩めて、
深をかこめる數萬の、　幹に此世の斧は絶え、
拗戻紆曲れる濃綠の、　荊棘毒草櫟檜、
重疊り合ふて空掩ひ、　魍魎生みては睥睨す。
日の神放つ萬條の、　黄金の征矢も透り得ず。
路に迷ひし旅人も、　妖氣に打たれ至り得ず。

◎水汲む小女

芝　木村とれ

かざらぬ衣に光もれ、　むれ安らけき小女子の
たまの腕をさしのべて、　汲むや小川の眞清水を
ほそきお指にちからこめ、　重さにたへぬやさ腰の
あゆむ姿もなよやかに、　前髮わづかゆらぐなり、
いそぐ家路を辿りかれ、　夕日かげさす土手の上
にほふ薔薇の花かげに、　小桶をおきて憩ふなり
鬢のほつれ毛かひ撫てつ、　顔ふりあげてほゝゑめる
頬のおもはに紅さして、　燃ゆるか花のこき色に

◎聖　水

熊本　湖畔

大木のかげのやすらひに
結びし水の甘きかな
愁なやみも世の幸も
のかれ出たり神の水

◎里　川

佐賀　白すみれ女

翠しゝたる柳かげ　ゆるく流るゝ里川の
底に見えすく麗はしの　小石のかげを止めむとて
少女はたてり橋の上　行方はやがてわかれども
吹きて流せし草笛の　少女が影のうつりては
鏡のごときあさき瀬に
水も靜かにうたふなり。

◎曙

鹿児島　秀子

峯明めど山裾は、　霧の衣に包まれて
明けぬと告ぐる鷄の、　聲もほがらに神々し

◎曉

筑前　水子

金の烏、空をはなれぬ
燦然と、彩ある氣息
四邊にひろごる。

雲のとばり、左右に開らけ
黄金の矢、地に降りそゝぐ
世は『曉』。
井戸端に、米とぐ女の
姿まで眞紅に染めて
榮ある『曉』や

○亡き友

香川靜江

互にちかひつゝ　まなびの山路たとり分け
桂を手折かざゝむと　共にたのしく語りしは
昨日の夢と早やなりて　あゝなつかしの我友は
桐の一葉ともろともに　我をのこして一人たゞ
死出の山をば指し行きぬ　あはれ何方に君は今
定めなき世と知りつれど　春のあしたの花のかげ
月さへ渡る秋の夜も　これより後はたれと見む
あゝしたはしのなき友よ

○落日

台灣　波江野紫子

行きよき老僧の、　寂びたる禪に入る如く、
靜かにきしろ落日の、　殘る光の白きかな。
闇に咎を望むごと、　森は黑くも聳へたり、
礎なせる下草は、　風吹くなべに靡きつゝ。
羊追ふ子のそびらより、　夕の色はせまり來て、
ゆくてを急ぐ旅人の、　笠より暮るゝ野べの色。
あゝ風荒ぶ野に立ちて、　沈む光を仰ぎ見ば、
愁は森の眞清水の、　ひとりたぎつに似たる哉。
夕べの星よとく出てゝ、　この寂寥をすくへかし。
落ちゆく光荒ぶ風、　わが世は餘り淋しきに。

○春のうた

京都　吉川花愛

運命悲しき世なればや、　にほへる顏の紅に、
堅れるたからあらじかし、　友よつめかし花すみれ、
浮べる雲にいつまでか、　寂寥の春のわれらぞや。

○曉の歌

下総　天風女史

雲井の宮の欄干に、　焰の男神たちよりて、
輝くみ手をあぐるとき、　千條の線は海に垂れ、
磯馴松が枝風立ちて、　呼ぶは樂しき曉の歌、
其曙の夢にさめ、　玉の宮居のまどあけて、
龍の宮姫ゆるやかに、　かきなす琴の一曲に、
闇もさ霧も消えゆきて、　あけてぞ渡れ浪の上、

○馬子

佐渡　中山訓子

雨のふる日も風の日も、　星まだのこる朝ぼらけ、
栗毛の駒のくちとりて、　曳くや磯邊に小松ばら、
都は春の花さきて、　柳は岸にけぶれども、
人には遠き山里の、　馬子が軒端は雪深く、
月はさゆれど心なく、　紅葉は照れど知らぬ顏、
峯の松風谷の水、　六里の道を我世とて、
荷鞍の上に夕榮の、　落ちて消えゆくたそがれは、
かへさよろこぶ我駒の、　ひづめに拍子あはせては、
歌ふ馬子唄ゆるやかに、　ふしおもしろのながれ聲、

○蝴蝶

福井白臺女史

風靜かに　ちる花慕ひ
舞ふてくだり　梢を慕ひ
またまふてのぼる
樂しきかな夢　はかなしとは何
理想の命　消えんは願ひ
董の下に

○夕趣

千葉　矢代つる

山茶花の叉もくづれて、　日いつかに西に沈みぬ。
竹椽のいや冷たきに、　目盲ひの法師琵琶にふけるよ。

文學士
招波瓊音先生選

叙事文

天

○お葬式

三河西鴨郡石ヶ瀬村
澤田つま子

『何の誰！』と高らかに呼ぶ聲に應じて、高燈籠や、燭臺や、造花は殘りなく捧げもたれ、會衆は庭にみち〳〵た、位牌は姪の綾子、棺は山田の叔父樣と從兄の滋樣とに導かれながら、靜々と運び出されたのである、吁もう妹は是で見納めかと思へば、悲しさ可憐らしさに胸は張裂けるやう、零り落つる涙を半巾で止めながら、阿母樣と緣に並んで、咽上ぐる泣聲を、白無垢の袖に嚙みしめたのである。

空は彌生の薄曇で、西へ〳〵と矢を射るやうに流れ行く灰色の雲は、重々しう雨氣を帶んださま、思出したやうに時折音訪る、風に、庭の櫻は浪のしぶきと渦巻いて、會衆は時ならぬ落花の雪を浴びて居る。

鐘が一つ鳴つた。

もう棺は出るのであらう、緋の衣に金襴の袈裟眩き淨專寺の方丈樣は、霜おく眉の何となく德高い面に深い憂の色を湛へながら、迴々と覺束なげの歩みもて、道導べの人にお續きなさると、香箱をさゝげた役僧と、鐘をもつた番僧とは、同じ木蘭地の法衣を連ねて、其の後に從ふのである。

棺は味氣なき白い物づくめて、頂に飾られた作鳥の、うら淋しう搖いで居る其の下は、長のいたつきに痩せ衰へて、唯昔ながらの黑髮も恨多い妹の亡骸が、種々の心づくしと夜晝なしの介抱とを空しうして、靜に眠つて居るのであつた。

位牌、柄香爐、造花、高燈籠、棺……と順次に繰出されて、男は無紋の水裃、女は無垢に角隱、其が長い列をつくりながら、話聲一つもなく徐々と門を外へ練り行くのである。庭の櫻は一しほこぼれて、其の幾片は棺の上にも止まつた、哀れ櫻の花が咲く頃にもなつたらばと賴みにした甲斐もなう、空しう散り行く人を送るかのやう。

散る花、逝く人、其所に何らか深い意味があるやうに思はれた。

門には御手傳の近所隣の娘達が、紅い襷に白手拭を腰にしながら、ひそ〳〵と囁いて……悲しげな念佛の聲も交るのである。

『ああ妹！』と思はず阿母樣のお衣に顏押し當てて咽入ると、柔い衣の袖が妾の背に加へられたかと思ふ間もなう、熱い涙が頸から頰に亂れ散つたのであつた。棺はもう畷を廻つたのてあらう鐘の音が淋しう聞える。

（評）きら〳〵しくて沈みたる葬の光景まことに見るが如し警筆々々結末の力なきが惜しき心地す

㊞地

○朝の一時間

鳥取市鍛冶町五七 上山千重子

よべのばんの燒方より、はしなくも攻擊を受けて、今朝は兄樣みづから、模範を示してやるとそれは大氣焰。しかはあれど自炊する身の、何事も經濟が第一若しや仕損じたまはゞ如何にせん、お臺所の粉まびれになり給ふも心苦し、それよりは私がとおもへど、言行一致を以て任ぜらるゝ兄樣なれば、今更申上ぐるも詮なからん、さはれ慣れぬ私の今の苦心を、實驗遊ばすのもなか〳〵に面白からずやと、居間に退いた。扨久しく覗いても見ぬ鏡の塵を拂つて、蓬の髮をかいなて、心ばかりのよそほひに口紅を含んだが、さすがに心とめきてうらはづかしい心地がする。勝手の方を覗ると、兄樣をかしき手振りして、見ては不可と仰せられる、さらばと其まゝ庭に下りてしまつた、「柴のあみ戸のあけぼのに、なほ山陰は小暗らくて、おぼろ月夜の影ながら、霞にくもる―花のいろ―」。小聲に唱歌しつゝ、霜白き庭石ふみて、やれしとぼそをおしいづれば、そこは山添ひの街路である。誠や春まだ寒むき睦月の末、霞の奥に花はなけれど、有明月が傾むく彼方、まるで夢みるやうな氣持である。淡れゆく月に拙き一句得たるとき、東の空奇しくも光りて、下界は全く夜の死から蘇生した。鳥うたひ、犬はしり、人さわだち、木さへ朝風にゆらめく、あゝ兄樣のお調理もはや整つたらう。

（評）無邪氣にして樂しきホームよ文よくその趣を寫す、

水くみ（賞外）



芝車町 難波田歌子

㊞人

○春の小川

上越千代田村 岩山臺秋擧樓 紅雨女史

珠をといたる水を集め、激しては忽ち奔湍となり、騷

りては急に品態をかく、青碧藍を湛へ、皎皓雪を飛ばす、山を出て、林を貫き、時ありて花の思を映し、時ありて蝶の情を載せつ。果は渺々たる平野に漂うて、ほの白う流れ行く。

水は平野を出で、再び林に入る。河柳あり、斜に枝をかざして、自然のテントを形ち造る。一角、河流倏ち迫りて、幅圓僅に二間ばかり。更に迂回して一大澱をなすや、水静にして凝脂の如し。

汀には菫あり、石竹あり百合あり、薔薇あり、白に、黄に、紅に紫に、兩岸に簇生して自然の花氈の如く、水に映じて天女の羽衣の如し。

水に春の花あり、香あり、凝つて流れず、宛として神の御園に似たり。疑ふ、之れ果して人の世の物なりや。

酔はしむるが如き光を放ちし春の日は、や丶、西に傾きぬ。「夕暮」は既に世を掩ひぬ。日は落ち、斷雲漂ひ、物と物と互に融け、恍として我なく物無し。只、蒼々たり、茫々たり。静かなる夕や。

倏忽、もの在り、水にあり、人か、之れ。あらじ、物か、之れあらじ、神ならざらんや。お温き春の氣に酔ひて、静かなる水に睡り給へる神ならざらんや。

身は白し、さなり、顔も、體も、黒かる髪も、白き色に洗はれて、白からんとするに似たり。

美しき女神におはせり、ほ丶笑を湛へさせ給へる御口、ゆるく閉ぢませるお目、遠山の如き眉、温き情を包み給へる顔、噫これ女神ならざらんや。

秋の神のなやめる態なし、冬の神の烈しき樣なし、温き情の凝りて成れるにも似たる御姿、噫之れ春の神ならざらんや。

闇は迫り來ぬ「夕暮」は早や去りて「夜」は既に此の世を掩ひつ。さても春の宵の静けさよ、立ちて耳を傾くるに、地に聲なく、天に音なし。只、かすかなるせゝらぎのみ「平和」の樂をうたうて、闇黒より更に闇黒に傳はるを覺ゆ、肉融けて、靈ひとり、地をはなれて神の宮居へ赴かんとするが如し、闇にもしるく、神のほの白き姿、花の心地よき匂、皆、融けて流れて、凝らんとするに似たり。

哀れ、静かなる春の宵や。

（評）全體の趣よく春夜の神韻を傳ふるには足らむ但し神を描く今少し逸げにありたし

秀逸

○奥殿の春

三重縣　奥瀬かすみ子

朝

糸の如き春雨、しと〳〵降りて、姫が御部屋の丸窓のほとり、ほゝ笑みし梅二三輪、のどけき花の階の、ほの〴〵白む一の殿、二の殿、未だ降ろされし御簾深うして、殘燈いとほの暗し、雨、やみぬ。

うらゝかに朝日はのぼりぬ。金鷄高う歌ひ初めて、奧庭の岡、うすく〳〵霞流れて、色紫の美くしう、床しや春告鳥の、小さき口開けて、ほがらかの初音。只、長き〳〵おばしまの、朱ぬりの色、紅の朝日にてらされて、庭に眞白き眞砂の、銀と淸う、男松、女松姫小松、皆とり〳〵の綠に、優しくそよぐ春風、さら〳〵と春の歌、春を賛美の、節面白うひゞきぬ、かくてとゞろと御車の音、主人なる大臣の今參内の門出ならむ。

晝

春のひねもす、永き日影のつれ〴〵に、歌や雙六や、興盡き果てゝは狂ほしう、眉若き上﨟三四人、そと庭におりましつ、

淸き泉水のほとり、水もぬるみし暖かさ、まいて春の光、のどけき日影背に受けて、面白や蹴鞠の、白き顏せ涼しき眼元、あざやかに血潮の、色うす紅の優しう、柔風にひるがへる、紫はかま、綠の髮、實に繪の眺めとこそ云はめ。

一の王子、そと蹴りませし鞠ほろ〳〵とそれて、藤の花ほろ〳〵と散りぬ。

池の眞鯉緋鯉、麩に集ふ爭ひを、窓邊に立ち見給へる、姫が御目には、如何に面白う映りけむ、鳩と可愛の眼見張りつ、ほゝ笑み給ふ御聲の、いと艶やなる。

夜

琴の音止みぬ。

衣ずれの音、さら〳〵と床しう、永き緋の袴、丈より永き黑髮、眞白なる上衣、實に可愛きうなゐの、二人三人、右左に從へて、二八の姫、庭に降りましぬ、八重櫻爛漫として、木の間見上ぐればおぼろ〳〵の月影、實に靜けき春の宵、右なる從者のそと差し出せし、雪洞風にさとゆれて、白き花びら、はら〳〵と散りかゝりぬ。御簾もる光、いと〳〵淡し。

（評）絢爛土佐畫の如し

○『彼女』に送る

筑前　沖　水　子

あゝ處女『女子文壇』！

予は御身を戀す、御身が初めて予を訪づれし時、御身はその玉の如き手を差しのべて予に握手を求めたまひき。予は餘りの羞しさと嬉しさに、霎時は言をも得云

はず。やをら勇を皷さゞるを得ざりき。暖かりき、實に温かりき、御身が愛は予が全身に傳はり、予が心の凝結は、恰も雪の如く溶け去つて春の水流れぬ。

あゝ處女『女子文壇』！

予は御身を戀す。御身は予が知れる處女『雜誌』の中の最と美はしき者なり。その髮は、ふさやかに、その目は、ヘシボンのバテラビムの門の邊にある池のごと、その頰は馨はしき花の床のごと、その口は美蜜の香含みて、睡れる者の口も動かしむ御身はことく〳〵くうるはしう、御身は罪の淵を辿らず、善聖しき途を歩む、御身は。。。。。世の人は、皆、手に『刀劍（つるぎ）』『黃金（こがね）』を持ちしとき、。。。。。。。。。。は優しき慰藉と希望の光とを持ちて。

あゝ處女『女子文壇』

予は御身を戀す。予は御身と運命を共にせん、御身東せんとならば予も從はん、西せんとならば又行かん、あゝ美はしき者よ、御身は實に予が佳偶なり、予が愛する者は御身のほかにあるなし。

あゝ處女『女子文壇』！

予は御身を戀す。御身は園に生ゆる花卉の如し、東風よ起れ、わが園を吹いてその香氣『名』を揚げよ。

あゝ處女『女子文壇』！

予は御身を戀す。御身は蒼穹の星のごとし。御身は暗黑を照らして光を與ふ。あゝ、輝けよ、照らせよ、知らせよ、その美しきみ手あげて。

（評）西詩のひびきあり本誌のよき贊辭たらむ
但しこれを叙事文といふはふさはず

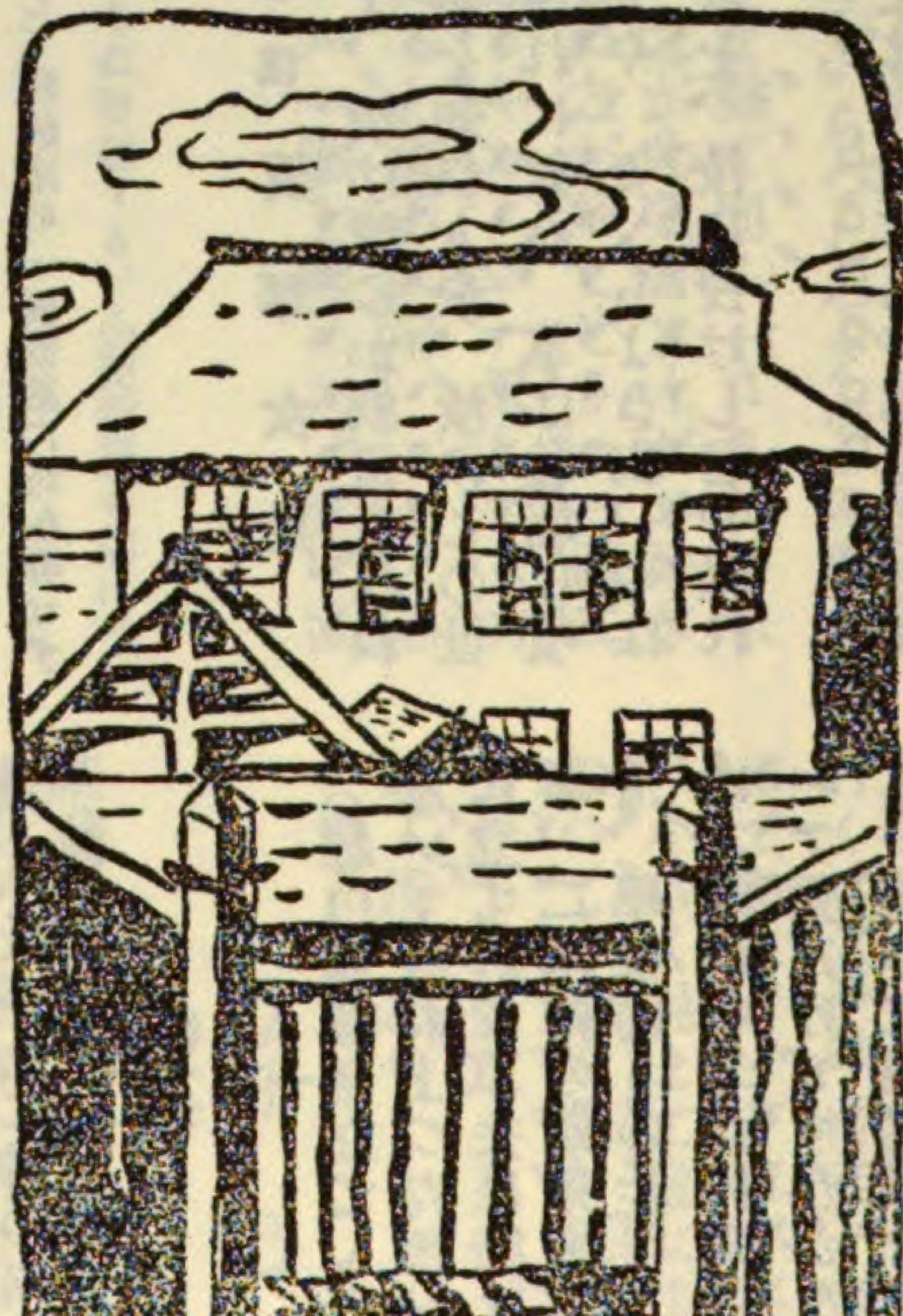
○冬休み（立ちぎゝ三）

福岡　鶴子

「意外だ、實に意外だ、こんなに早く君に逢はうとは思はなかつた、いつ歸つた？、今日、さうか、まあくつろぎ給へ、どうだ廣島は面白いか、君の眼に映じた廣島さゝたいものだね」

「廣島、何あにちつとも面白くも珍らしくもない、人口が十萬だの、絲瓜だのと世間じや大したやうに言ふけれども、いやもう無趣味、殺風景極まつたものだ……殊に、許岳君に別れて、何愉快なことがあるか、僕形骸は廣島にゐても、心はいつも故山……にだ……毎夜毎夜、夢路では伊崎浦わを往きつもどりつ辿つてゐたよ、君、比治山がなんだ、二葉公園がなんだ、懷かしい博多灣頭、西公園に較べると、ものの數かはだ……宇品？、宇品はもう俗の俗で、話にやならぬ、どうしても白砂青松の袖の海でなくちや……それに君、夏休みには歸られなかつたしね、冬休みの待ち長かつたこと一日千秋の思……さ」

「そりやその筈さ、〇〇學校の生徒樣だもの……徽草が……光る……」
「なあに、そんな事あないけれども……」
「ないけれども……ノー、大にありさ、鳥なき里の……」
「おだてるね、そりや君、嬉しくないでもないさ、而しそれよりも歸りたくて仕方のなかつたのは……」
「のは、」
「國を去つて三巴遠し、家に老母あり吾を待つか」
「まあそんな事だらうよ、この年をして、そんな事いへたものかと笑ふだらうが、實のところ只もう歸りたかつた……、何故?、といはれると、ちつと說明にこまるわけだが、而し君、田舍でも故里、茅屋でも我家ほど居心のよいところはないじやないか、なにも、いとしい坊ちやんで育てられたといふのでもないけれども、ね」
「じや試驗がすむとすぐ飛び出したのか、」
「勿論さ……」「道理で早いと思つた」
「君、二十三日に試驗がすむ、午後は爲す事なしだ、こんな時に限つて日の長さ、運動場の二三度も往きもどりして、やう〱五時、「え〻まゝよ、何處で待つも同じ」といふので停車塲に向つた、汽車は來ぬ、折から雨は降る、驛夫は欠伸してる、癪にさはるじやないか待ちくたびれてゐたところへやつと着いた、汽車にのる、汽笛が耳もとにひゞく、出る、腰を下すともう心の弛みと數日の試驗くたびれとで、うと〱と「夢路」辿るといふ風なんだ、目が醒めると馬關だ……日も出てる、一葦帶水の彼方から、淡く夢のやうな故山を眺めやつた時の心地、何ともいへなかつた、門司に着いて下り一番て……以下君の想像に任せよう……」
「など〻、これが文雄君の歸鄉物語か、時に君今夜は泊つて行け、二人で寢ようじやないか、久しぶりに、寢て思ふ存分話がしてみたいよ」
「だが歸鄉早々家人も待つてゐようじやないか」
「さうか、それじや又來るとして今日はゆつくり話し給へ」



小學校（賞外）

陸中一關　坂本きよ子

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

（兄さんと文雄樣二人なら、いつもこれだけれども、お母さんなり、私なりが居ると、それは〱あらたまつたものです）

私ばかりと思つて居たら、誰にもこんなに、休暇は嬉しいものか知ら‥‥

（評）會話平淡なれども甚自然にして輕妙末の一段故更に巧を弄せずして却て力あり

○小羊

信濃　眞琴女史

あゝやさしき小さなる羊よ、汝は誰にか創造られぬる。あゝ汝、汝をつくりし君を知れりや、汝にこの世の生命を授け、水は小川の流れに飲み、草は牧場に喰めと、汝に敎へし君を知れりや、こゝちよき衣、やはらかき衣、光りある羢毛の衣を、汝に授けし君や誰れなる。

反響にひゞけば谷々よろこぶ、世にもやさしき汝が鳴く音を、授けにし君や誰なる。小さなる羊よ、汝は誰にかつくられぬる、あゝ汝、汝をつくりし君を知れりや、

小さなる羊よ、われ其を汝に告げなまし、小さなる羊よ、われ其を汝に告げなまし。その君みづから『神の小羊』と呼びなしたまへば、その君の御名は汝が名によりてぞ呼ばる。その君、ものやさしくおだやかにおはします。その君、『神の幼見』となりたまひぬ。われも亦神の幼兒よ、汝もまた神の小羊よ。あなや、われらは「神の子」の御名によりてぞ呼ばる、少さなる羊よ、汝が上に神の幸あれ、紳の幸あれ。とこしへに。」

（評）文聖書の筆つきに倣へるか

○暮

麴町　壽美江

一

紅白の幟を立てゝ行く廣告の樂隊が急に始めたので驚いてはね上つた馬、憐れや好き客もがなと此の四辻に立て居た車夫は蹄にかけられた、物見高い東京の事、二本棒の餓鬼大將、腰の曲つたお婆樣、魚やの小僧、學校歸りの生徒、さては立派な紳士に至る迄あらゆる階級の者が何事と寄り集つた。「何處か痛みますかハア腰だけですかかういふのは後から方々が痛むもので」大きな風呂敷を負つた旅商らしい呉服やが氣の毒さうに云ふ「さうですかねエ」腰を抑へつゝ呉服やを見上げた車夫の眼は涙が一ぱい。時は暮、業は車夫、家賃は如何？米はどう？、あはれ老母は悲むであらう。妻は罵るであらうを。とぼ〱と車を曳て行くあの後姿

二

つと這入ると入方から起る聲「いらつしやアい」瓦斯燈の晃々と光つて居る氣持のいゝ店。「ハイ此リボンと此お櫛とへエ八十五錢戴き升」「八十五錢お代澄み」瓦斯燈の下にてかへした頭を据ゑて居る番頭の前へ高い音を立てゝ置く。「その外に御用は」今し何處かの令孃が二人這入つて來られたゝめ「いらつしやアい」の聲が盛んに起つたので殊更に大きな聲で問ふ「さうね香水を下さいな、あつて」「へエ、エ之が此頃皆さんがお好きなされますんですが」「いゝ香ね之が好でせう」「一圓二十錢戴き升へエ有難う」「有難うやおーい」又しても方々からの快い聲に送られて出ると流石に寒、ビユーと吹いて來る風に思はずショールへ頸を埋めた。仰げば空にははや星が冴えて居る。

(評) 簡なる寫生の中意味多し新來の客に對しての見えにいらぬ散財する、小間物屋の店にてはありさうなるとなり、

○春光

陸前　尾形千代子

○春の野趣

緋桃の花に埋もれて、水車は頗る單調な音を繰返してゐると、姉さん被りの白手拭が來た、其流を引いた川下の田の畔には、頑丈な赭ら顏の爺が、鍬の柄に火の用心の煙草入を預けて、畦へ烟管で紫の煙を吐きながら、青んだ苗代を見てゐると、鳥追小屋の側には何鳥か知らず、頻に椿の花を啄いては落すと、小川の水がさらへと面白さうに流してゆく。

○春の夕ぐれ

草笛の餘韻おかしく、夕日の丘に影長う曳いて歸つて行く牧童の後姿、畵にでもありさうな景色だと見つめてゐると、それが麥の畑にかくれて、又菜の花の末に小さく見えて遂に消えた、野川が一筋、緩く南にうねつて、椿の花を更に赤く見せてる村長樣の白壁に割られて見えなくなる、と、思つて頭をあげて見れば、それ丁度！あの……『菜の花や月は東に日は西に』

(評) 詩趣横溢

○日記 (一月七日)

神戸　さち子

晴れ。私は、教會を休んで、御友達の家へ遊びに行きました、其かへり道可愛らしい少女の話を聞くと「愛子さん私ね、早く御父樣や御母樣が、信者になられるといゝと思ふのよ、そしていつも神樣に御祈りするの」、「ほんとに惠子さん私もさう思つてゐるのよ、だけど今日の御話はよかつたのねエほんとに傳導は急なものだわねエ、」かう云つて、一人の方はひどく考へて居たが、急に「惠子さん私もう高等女學校へはいる事

はやめて、神學校にはいつて傳導師になるよ、そしてたくさんの御友達や、偶像の信者を導くよ、」「ほんとに愛子さんさうおしなさいよ私も傳導師になりたいわだけど御父樣がおゆるしになるかしらん、」二人の少女は日曜學校の歸りなのであらう、いたく感じたやうに、互に話合つて居るのである、あゝ私は人を導くべき大なる責任あるクリスト信者でありながら、今日しも教會を休んで友の家にかるた遊びをしたのである、今日可憐なる二人の少女の談話を聞いていたく良心に耻ぢたのである、其夜は大變寒い夜であつたが私は更くるまで靜に神の前にひざまづいて彼の二孃の上に祝福あらん事を祈つたのである。

（評）リーダーを讀むこゝちす

○春の野

津市　松尾はな子

いつ見ても厭かぬ眺めは春の野である。

瑠璃色に澄み渡つた空には一羽の鳶が、いとも長閑に輪を描き乍ら飛び回つて居て、太陽は薄霞を透してぽか〳〵と暖かい光を下界に投げかけてゐる。

見渡す限り廣々とした野は一面に青に黄に扨は紫に佐保姫の裳を彩つて恰度毛氈を敷き詰めた樣で、折から渡る嫋々たる春風に黄なる波青き波を漲らすのである。

眼前に逶迤として連る山々は紫色を呈し其麓には雲かと違ふ櫻花が咲き滿ちて居る、あゝ何時に變らぬ眺めのうるはしさよ。

彼方なる土堤には萌え出でた計りの若草を褥に、牧童が休らひ、其傍に繋がれた牛はをり〳〵もうと長閑に吠えるのであつた。

ふと足下なる神の秘みつを囁く小川の水に浮きつ、沈みつ、流れ來た花の一束が目に入つたので、つと取り上げた時、正午の滊笛が、すさまじう鳴りひゞいたからさらば家に待つ妹の爲にと其花束を手にし乍ら足をかへすと、何處からか翩々と一羽の蝶が飛むで來て、其花束に幾度か接吻するのであつた。

（評）温かき文なり

○歸省

靜岡縣　不可汚みがく子

私は今、冬休みで、なつかしくこひしい故郷へかへつて來たので、こよい、隣家のぢいと老婆とは、わがためにとて、わざ〳〵、風呂わかしてくれたのである。

『靜岡のやうな町にゐなさりや、こんな山家は、えらく汚ない樣にお思ひなさるてやせうのう。』と察しがほに。

『いゝえそれでもね、私はたゞなつかしくてなつかしくて、休暇が間近くなると、もうねてもさめても家の事ばつかり思つて、久しぶりに歸る嬉しさといつたら

ありませんよ。』と笑めば、老婆は爐に薪くべながら、『ほんにのう。お父さんお母さんが居らつしやるだての。』と、私をつくづくみて、『あゝお前さんも大さういかくならしつただ、はいお母さんよりも高いてやせうなあ。』といへば、爺は心地よげに笑みながら、『そりや婆さん、今時の衆は昔とは違つて、運動ちう事をするださうなもの、なか〳〵今では女衆もえらくなるだよ』。と。

私はいつも、歸省しては、この老いた質朴な夫婦と、いろ〳〵な話をするのが實に此上ない樂しみなのである。この夫婦はまた私がかへるといつも大さう喜んて、まるて孫の世話てもするやうに親切にしてくれるのて。

冬の月

（評）老夫婦の言聞くが如し　（外賞）



○試驗

筑後　小野春子

試驗！試驗！汝は如何なる魔力をかもてる、智者も才子も汝が前には頭うなだれ、日頃元氣みち〳〵たる活潑子も汝が前には元氣沮喪、意氣銷沈し、顏蒼白くなり終るなり、一度汝が前に呼び出だされたる者は恰も處女の如く、寧居所の羊の如く觳觫として見るもあはれなり

島根縣松江市　寺澤みつ子

試驗！試驗汝は如何なれば、しかく人の子を苦しむるぞ、飢ゑに飢ゑたる虎狼の如く、血を啜り肉を喰ひ、「たすけよ」と叫びもがく神の子を無慈悲にも那落の底につき落さむとす

汝は如何なれば、かく愛に乏しきぞ、人は樂しめるに苦しみ、人は天國を夢みつゝあるに夜の目も合はず勵めるを、無慈悲とやいはん、殘酷とやいはん、すげなくふり放して顧みもせず

一度汝に見放されんか、この身は、不名譽、煩悶、失望、落膽、不幸、腑甲斐なさ

汝は、さくもいまはしき病、死刑の宣告をさへ辭せざるよ

秦廷の酷吏もよも汝には及ばざらむ

あゝ無慈悲なる酷吏!!!、されど妾は汝を愛す、汝が背後には洋々たる春の野、平和、幸福、名譽の花さきみてり、汝は公平正直、汝が前には富もなく、力もなし、妾はこの點を殊に愛するなり、

（評）學校に在る者在りし者誰しも同感ならむ

○かるた會

越後國　宮島新星子

（上）芳江さんの部屋の奥の四疊半。

床には一幅の極彩色の花鳥畫。前に遠州流に活けた寒梅が靜かに薫じて

居る。右の隅に掩布をした琴と。手風琴。左の隅に隷書て「春錦」と記した本箱。上に金文字入の新刊書と。小形の置時計がのせてある。其前部屋の中央に。飴塗りの火鉢。五徳にかけた鉄瓶が音を立てゝ湯氣を吹いて居る。側に肉細の筆て「歌加留多芳江主」と記した桐の箱が。金縁の寫眞帖の上にのせてある。火鉢を中に紫地のふつくらとした絹座蒲團が八つ。整然と並べられてある。

次の間に何か大聲て噺す武夫さんの聲と。ホヽヽヽと笑ふ滿子樣の笑ひ聲が聞え次いて「さあ皆樣御入り下さい」と言ふ芳江さんの聲と共に障子を開けて入つて來たのは主客八人。滿子樣に房江樣に花子さんに浜子さんに三郎さんに次郎さんに武夫さんに芳江さん。

(中)さあ皆樣。かう圓く御座り下さい。さあ滿子さん貴女此所へ。房江さん貴女彼方へ。花子さん浜子さんはも少し前へ御出なすつてはどうてす。次郎さん。三郎さん火鉢を上げましよか、日本男子だから火鉢などいりませんと、えらい元氣てすれホヽヽヽ。じや讀み始めますよ。山河に風のかけたるしがらみは。はいありました。夏の夜はまだ宵ながら。はい雲のいづこに月やどるらん。天智天皇秋の田の。あつたよ。久方の光のどけき春の日に。今度は僕が見附けるぞ。あら痛いよ武さん妾の手をつめつて、ほんとに武さんの亂暴な事。八重葎。はいいゝてす、忍ぶれど色に出にけり我が戀は。あらしまつた。物や思ふとてすよ、さあ御手附二枚。阿部仲麿あ。はい三笠の山。まあ次郎さんの御上手な事。瀧の音は。はい。明ぬれば暮るゝものとは知りながら。こつちだ。朝ぼらけうぢの川霧たえ〳〵に。はい。歎けとて月やは。いゝてす。

(下)やあ僕が一番うまいや、ても武さんはずるいもの、人のをひつたくるんだもの。

チン〳〵〳〵本箱の上の置時計が三時を打つた。

おや今鳴つたのは三時れ、それては芳江さん妾等はこれて失禮いたします。いゝじやありませんか御緩りなすつて。又上りますから。何もありませんが御飯ても召上つて、じや明日又御出て下さい、武夫さん左樣なら。今迄戯つて居つた日が此時庭に面した障子の中程迄下を照して室内をパツと明くした。それに驚いてかの樣に床の寒梅が四片五片ほろ〳〵とこぼれた。

かゝかゝ
審査の力に鐵の聲。

○春雨

播磨　佐野秀子

一

今しがたまで喧しかりし豆腐屋の聲も靜まり春雨今ぞふりしきる、晝餉も了へて早や一時過ぎなり。兄樣は讀みかけし小說を枕に、うち臥び給ひ、臺所にあるお梅が、後仕舞を爲して是も居睡り居るならん、ゴトともいはず、字かく筆を投じて、嚔三つ四つ續けさまにすれば、學校に行きし花ちやんはまだ歸らず、母樣は裁物などなし給ふにや、隣座敷にてきぬ裂き給ふ音きこゆ。

二

餘り早かりしため、學校はまだ門も開かれず、少時とて春雨の中に逍遙す、蔦かづら纏ふ白鷺城の松の枝に、鴉二三羽とまり居れどカアとも啼かず、彼方雨にけむる一ッ橋を行きかふ傘も見ゆ、汀に寄せし荷船四五艘、蘆の間より朝餉たく烟の細々と、立ちもあえぬに消え行くも、哀は如何で秋のみかは。

○凱　凱

福岡市　ちくし女史

今日は我廿四聯隊の凱旋日てある、朝より霙交りの時雨は晴れんともせて早黄昏近くなりぬ、軍隊歡迎者は路傍につめよせて人々のかざす小旗櫻花は道もせに美はしく紅のトンチルを呈しぬ、やがて打上げし數發の烟火の合圖にまつ間程なく喇叭の音勇ましく步調正しく徐々と凱旋兵士は進行し來りぬ、一時に起る萬歲の聲は玄洋の水もくつがへらんばかり兵士の喜びは其面にあらはれぬ、あゝ彼等萬歲聲裡に送られて勇ましくも出征せしより茲に二年、雨に風に幾多の辛酸をなめて今勇ましくも凱歌をあげて歸り來る健兒、おゝさても嬉々たる其俤、おゝさても勇壯なる馬上の人、

時に一人の老翁の一兵士にすがりつゝ進み行くは彼の兵士の父にもあらんか老翁は嬉し涙に暮れながら其子の壯健なる面に接するを得て物をも得言はずしたがひ行く、あゝ彼等二人の心中や果して如何ならん、

萬歲の聲はくりかへされぬ、時に一際高き喇叭の音に進み來りしは之ぞ廿四聯隊旗なりき、破れはてたる其俤、殘るは只まはりの糸と日色もあせたる一部分のみ、あゝ我等の頭は自から下りぬ、萬歲の聲は一入高くなりぬ、

出征二年の圍遼陽にヘモタンに其他幾多の難戰を過ぎ來たりて他軍に比なき名譽を博したるなり。

幾多の歡迎者は當時の如何に激戰なりしかを思はざる者やあるべき。

＊　＊　＊　＊　＊

いたくも降りし今朝の雪に野も池も氷りぬ、いとゞ書齋の淋しさに思ふとしもなき空想にふけりつゝ窓によりかゝりぬ、

時に二人連なる小學生徒の過ぎ行く時折しも一陣の風颯と吹き忽ち一人なる帽子をうばひて彼方に飛ばしぬ、今一人は下駄の尾をきらしてそをうらめし氣に眺めながら早涙ぐみぬ。

あゝさても意氣地なき少年なる哉、彼等は昨日破れし聯隊旗の凱旋するを歡迎せざりしか。

◎なんだ！

長野　小林梧枝

驚破火事ッ!!

俄かに起る半鐘の音、人々の叫く聲、起きつ轉びつ、漸く庭前に驅出して、ほつと一息、胸撫で下す隙もあらばこそ。直西隣の家は、半燒けの有樣、それは、それは實に、上を下への大混雜、折節此南風!!

こは如何に、妾の家の屋根へも、最う火が移つて居るのだ。素破大變と家へ飛びこんで、頭を強く柱に打ち付けたが、斯計の事にと、夢中て廚に驅け付けて、手當り次第に、持ち出さうとした途端、床板が落ちて、妾の左足は、確と裂隙へ咬へられた。

あつと、叫んだ我が聲に、目醒むれば。なんだ!!

夜着の綻へ、片足を突込んで居た。

◎初冬

香川縣　串田綾子

吁。寂寥の冬の夕かな。

散り殘りし、櫻の葉の、赤くなりたるが、風にゆられて、こぼれし梢に、百舌の止りて、キチキチと、鳴く邊り、夜の暮は、漸次、襲ひ來て、鎮守の森を、隱しつ。行き通ふ、人も、たえて、殘るは、我れと夕靄の中より、頭を、あらはし居る、禿山とのみ。

時しも颯と吹きそよぐ、寒き風に、アレアレ櫻の葉、一つ又一つ。遠くかなたより、寂寞を、破りて、聞ゆるものは、歸り行く、牛の吼る聲。

ほのめくは、新星の影。

草葉枯れたる、野邊に、咲き殘りたる、野菊の花、二ッ三ッ、あはれを啣ちつゝ、面をあげて、我れを、見まもる樣の、云ひ知らず、我心を、悲しましむる。

前途の歩みに、惱みしわれ。あはれなる此の花。此の菊の如く、寒風に、もまれ、霜に惱まされつゝ、咲き出てたるが如く、屈せず、撓まず、勉めば、望の峯に、達するにや。

以何に、菊に問へども、答あらず、嗚呼。情け無き、我が心よ、哀れにも、寂しき冬の夕よ。

◎冬のながめ

日本橋　畠島たまゑ

冬となりぬれば諸々の木は一葉々々と落ち行き皆骨のやう見るからに冬枯れてたゞ山茶花の二つ三つ咲きのこれるこそうらさびしく秋にもましてあはれに覺ゆなり我が庭のかたすみに落葉のうづもれたる中より寒菊の二三輪咲けるいと愛らしやう／＼朝な／＼霜の見えそめて道には破わらじの上に霜のおきたる、しも夜に車夫のからぐるま引き行く音などいづれ冬らしからぬはなく深うなるまゝに通る人々は肩掛コートに身をまとひ小走りがちにあゆみ行くなどいと寒げなり。あるは書生の下駄音高く大聲はり上げて詩を吟じ行く聲の寒空に冴えて遠く餘韻を引くあるはよひどれの身をきるばかりの風も知らで俗歌うたひつゝ行くなど世の中の冬の眺めこそいと／＼樣々なれ。一日ふすまの風のたへがたきに朝まだきに起き出て見れば家々も木も皆眞白に雪の降りつもりて恰も白布をおきたらんやうなり庭に出て見れば父君は盆栽の雪を拂ひ居給ひ弟等は笑ましげに雪よ／＼と走り回る不二(犬の名)は弟と同じく嬉しげに雪の中を飛びありきて梅の花をとめて行く。音のするにそなたへ目をうつせば雀の飛びて小徑の雪をちらすなど面白く南天の實を小鳥のつゝきて落ちたる音に驚ける樣繪にもかゝまほしく覺ゆ、外はと見れば電線は恰も白き糸をたばれたらんやうにていと美しくつめたげに行く人見えそめて遂には美しき道もけがされにきげに雪の一日こそうれしきはなし。やうやう冬も花さく頃となりぬれば老梅紅梅の寒氣をしのぎて二ッ三つほゝ笑みそむる頃なり。春の光やう／＼ほのめき梅一輪、一輪つゝのあたゝかさ實にこれなり

◎春の月夜

茨城縣　小泉はま子

古井桁つゝみて萠ゆる若草に、美しき胡蝶眠れるうす月夜、妾は詩集くりながら、せゝらぎ清き岡部川の堤上にたゝずみぬ。あふげば、水の樣に澄みきつた青空には幾萬の星が夢の樣に瞬たいて、匂ふやうな、ほゝゑむやうな、諭すやうな、希みを示すやうなのが空一ぱいにきらめいてゐる。あゝ何と平和に美しい夜であらう。今し薄衣てつゝまれた樣な朧月は、鎮守の森の杉の梢を離れんとしてゐる。

何人であらう、彼方の柳の下に長い影法師を地に落しながら手風琴を奏してゐる、譜はたしかに春の夜の月……。水の流れは美妙の樂譜を聽いて嬉しいと思うたのか、層一層やさしい調で手風琴に合せてゐる。その下手の方には、いづれ十二三を頭に九ツ位の少女が五六人、若草の上に圓く輪を畫いて立つたまゝ無心に月を眺めてゐる。

『お月さんいくつ、十三、七ツ……ほゝゝゝ。』

『あのれ、君ちやん、お月さまのお側には可愛ゆい兎が居るつて、ほんとでせうか。』

『妾どうか知らない……が、いつか繪て見ましたつけ、あれ、兎が餅搗いてゐるところ、時ちやんも見ましたれえ。』

『ほんに綺麗でしたれ、照ちやん、妾し、彼繪見てからお月樣の御宮へ行きたくなつたわ。』

『さう、それなら時ちやんと二人てゆきませうれえ、いつか。時ちやんの姉さんも、妾のお母さんも、あのお月さんの處へ行つてるんだつて、書生さんが言はれましたれ。』

一座はてはうちしをれてしまつた。手風琴の音はいつか止み、月は餘程傾いてゐた。

◎三日日記

德島市　住友登喜子

元旦

百八の鐘の音のさやけさに、よびさまされて起きたのは三時、さすが年の始だけて空もいと快晴である。寒さに縮み上る姿もけさはさすがに元氣よく、顔を洗つて先神棚に燈明をあげ、若水をくんだ其時一句なる

若水や星潔くうつるなり

一家むつまじく雜煮を祝つた時はもう東天は美しう紅になつてゐた。妾は友に送る年賀狀をかいてゐたとき金色の征矢をまばゆう射て、妾は希望をあたふるが如く初日はゆら／＼と山端に登つた。

妾は新調の袴に、靴をはいて登校すべく家を出た、がはや年禮者は皆笑をうかべて右往左往してゐる門毎の緣の松は君が千歲を祝ふが如く、日の丸の旗はひら／＼和き風になびき、木々の梢になく小雀のこゑも殊に面白いのである。

妾は學校の式も終へてかへり、笑みそめし庭の紅梅一枝折りて瓶にさしぬ。

年賀狀來る、佐藤似呆樣より、美代子さまより。夜に入りて約束の友來りて歌骨牌の遊びにふける。

二日　晴天

嬉しきたのしき祝を終へて年禮に出づ。途中蕗美子さまに逢ひ後日の面會を約す、歸後机に向ふ、窓前の水仙今を我世と咲きほこるさま、またなく睒かに、露を含める姿のやさしくも愛らしさに一本手折りて机に上しぬ。

午後女子文壇手に入る、されど賴みに賴んてゐた文が殘念ながら沒書となつたので、一時は非常に失望したが、後日といふはかないたよりを賴として漸く心をとりなほした。

されど諸孃が熱誠なる文の紙上いと面白く夜更くる迄見る。

三日　晴

露子、豊子、春代の君の玉章とどく

秀子の君音づれ給ふ、二人、琴ヴァイオリンにて老松の曲を合奏す、興きはまりなし。

とりまとめなき談話の末、欄干によりて和歌をつくるなりしもの十餘首、別紙「和歌の栞」に記入す。

夕、一人芳山社頭を逍遙ふ、月はゆかしき梅が香に、かすみて光淡く……梅の木の影、うすく地上に横たはる。折から彼方の石燈籠の山道よりかすかになる笛の音起る、いとど妙なる音にしばし耳を傾く。就床十一時。

○雪の朝

東讃　あやめ子

園生の竹の下折れの音あやしう聞えてことのほかけさは窓早く白みぬとおぼえて臥床を出て雨戸押しひらけば、まばゆきばかりに大雪降りつらゝゐて谷の小川の音もせず、峰の嵐吹き氷り、瀧の白絲氷柱となりて皆白砂とおしなべ時ならぬ雪の白銀堆し、庭のとしふりたる松の樹の枝もたわゝにつもりて緑の色をかくしたる梅もどきの實のいさゝか雪間より現れたる薔も及ばぬ風情なり、かしこの梅が枝に淡く濃くかゝれるいみじき花かとうたがはれ築山の石燈籠に綿きせたらんやうに降りかゝれるも亦をかし、今日は寒竹の維も悉く地に臥しければ、あちこちのけしき一つに見え渡り田の面にとり殘されし案山子に雪のいと積りたるいと哀なり、裏のかたには里の子の、打ち騒ぎて雪合戰するものありかしこのたかどのはたが別莊にや雪の解けぬ間にとて、雪見のうたげ開くもあり、かゝるたのしき日にも雪をうれたく思ふは、軒端の雀の餌に飢ゑたるのみかは賤が伏屋に飢寒を叫ぶものもあるなり。

○郊外だより

大分縣　篠山錦子

七草の色衰へて虫の音も亦絶々になりぬれど、これを序幕として秋の色香は今より次第に深からむとす。試みに野邊に出づれば先づ心を動すは至る所に鼻をうつ此頃の木犀なり。高みに登れば見渡す田面の早稲は既に跡なく刈られ、中稲晩稲も早や色づきて黄金の海の眺めをなせり。雀は群をなして飛び賤が引く鳴子の音も長閑に響きて、鎌取らぬ身も出來秋は物豐かなる心地して好し。黄金の海の中に浮べる掌はどの村にても彼方此方と鎭守の森に大鼓の音聞ゆ。近寄れば皆豐年を喜びて村乙女の顏雪の如く白きを見る。家毎に又賑はしう酒宴して太平の氣充ち滿ちたり。山邊に至れば栗こぼれ柿色づきて百舌の聲また聞つべし。暴風このかた森すつかりと透渡りて、彼方に水の流るゝも見ゆ。其處に畫師あり。野菊咲きたる畦に一基のイーゼル据えてブラッシュ片手に夕榮の天を仰ぐ。日暮れむとして暮鐘音緩く田面を渡り、晩鴉塒に急ぐと見れば其處彼處の茅が軒より炊烟上り、牛犢の塒に吠ゆるを聞く。見る間に暮色天地に立渡れば燈火點々として螢の亂れ飛ぶに似たり。仰げば一面藍色なしたる秋の天には星爛々と輝きて五位鷺の一羽南に向ふ。露深き野路を我家へと辿れば、打弱りたる虫の音殘りてその聲恰も秋の名殘を惜むが如し。路の邊の萱、玉穂など風に動きてさわ〲と鳴る音いと淋し。

○夕　星

山梨縣　田草川とみ子

空は鏡の如く暮れたり、さ枝動かす風もなし、姿は今沈まむとする夕陽を全身にあびて、遠く微かに聞ゆる欵乃に耳聳てつゝ、波靜かなる入江の磯馴松の邊りに立てるなり。今しも一日の行程に勞れはてたる森羅萬象は、眠りに入らむとする物の如く、金光を放てる濱邊一帶、石も砂も船も人も松も、赧焉燃えむ計りの姿漸れ行きて、日は分又寸、悠々世と別れむとして、果ては忽然水に落ちぬ、海士の苫家に藻鹽燒く夕烟、重げに棚曳き、オレンヂの大空夜の幕を張らむとせる時、勞れし者には家、飢ゑたる者には飯、稚き鳥には鷄鳥の羽根、勞れし牛にはよき小やれ、やさしき乳兒をば母の胸に抱かせやらむと、微笑を漏しつゝ、夕星は二ッ三ッ四ッ、又六ッ七ッ見る〲數別かぬ迄現れ出てぬ、磯草の葉末に、涙の油斷を結べる露を鏡に。

◀長尾文子君の名譽▶

長尾布美子は去る二月七日宮中の御歌會始の節御選に預つた七人の中の名譽の一人で父を豐穂氏といつて卅餘年間續いて警吏を勤めて居る程の謹直な人で布美子はその長女で高等小學校を卒業してからは家に居て專ら家事を扶け弟妹の世話を引受けその傍暇を竊んで獨習に餘念なく又念ひを敷島の道に懸けて撓まなかつたので父も其志に感じて三年前から斯道の大家鐵田正夫氏に就いて教を乞ふことを免されしが熱誠空しからず遂に今回の榮譽を得たのです今回詠進の歌も御題が新聞に出た朝勝手許を手傳ひながら築地の川口に船の輻湊する樣を見て不計詠み出でたとのことで之れにも平素の心行がよく知られます本誌の和歌欄に掲げてある寫眞は最近の撮影で短冊は特に本誌の爲めに揮毫されたものです布美子目下京橋區南小田原町三丁目九番地の自宅から毎日遞信省に通ふ傍勉强して居つて我が女子文壇の愛讀者の一人ですから心ある諸孃はヱハかきなり何なりて今回のことを祝つて上げるのも同胞の好みとして善い事と思ひます。

［次の和歌の部五〇、五一の頁に肖像及眞筆參照あれ］

和歌

佐々木信綱先生選

天 ◎ 播磨飾磨郡英賀村　佐野秀子

下京や小雨のあとの月おぼろ
遠音のつゞみきくによろしき

〔評〕下句饒なるひゞきを共にきくらん心地す。

地 ◎ 下總佐原町篠原大崎館一方　大崎文江子

小屏風に桃の灯ふけて春の夜を
ほゝ笑みませる女夫雛君

〔評〕幼きあるじ、幼き客人の笑顔も、さこそと思ひうかべられて。

人 ◎ 備前御津郡石井村島田　松本おちば女

菜の花のつゞく野末に寺見えて
鐘の音ひくゝ雨ふり出てぬ

〔評〕上句のけしきを採る。

秀逸

◎ 出雲　じん子

とま舟のともし火細く夜は更けて
月も眠れる川口のさと

桐　豊前　すみれ子

うれしくも吾妹が琴となりにけり
昔うゑつる桐の一もと

◎ 群馬　千翠子

白鳩をみおくる人の面は痩せぬ
さくら花ちる春のゆふぐれ

◎ 徳島　荒井秋子

白桃の花散る宿に道きゝて
五とせぶりに乳母が里訪ふ

◎ 下野　木村みしろ

朗詠の聲はかすかになりにけり
朱雀大路のたそがれの月

◎ 播磨　常深子

羊よぶ笛の音たえて日は暮れて
牧場に淡し春の夜のつき

◎ 茨城　秋山隆子

船はいてぬ君をのせたる船はいてぬ

さむさ波止場に我をのこして　下野　やを子

○

夕暮を被衣の人の眉若し
　梅の花咲く下嵯峨の里　石見　武田武馨

○

糸車ひくてやめたるたらちねと
　霰さく夜の淋しくもあるか　讃岐　香川みさを

○

高殿に琴の音たえて一しきり
　櫻みだるゝ春のおぼろ夜　岐阜　山田はぎ子

○

吹く風に草の香ゆらぐ野の春や
　蕨つむ子の歌おもしろき　福岡　雑賀蝶衣

○

行く春を軒端に雨の細うして
　夕さびしき葉ざくらの宿　豊後　花山琴子

○

花の靈のそとぬけいでし薄月夜
　君が御歌を低く誦し見る　廣島　白百合

○

夜もすがら詩に腦める人の子に
　花の香おくる春のあさ風

新年の河　信濃　宮川千鳥子

君が代は千曲の川のさゞれ波よどむ瀬もなく年立ちに鳧

賤乙女　上野　大塚ふく子

○ いとせめて我身野末の草ならば競はん花の百千年まで　尾張　井口登代子

○ もの思ふ窓にさし入る冬の月都の君はいかに見るらん　千葉　田村瀾子

○ 紅梅の枝に納言が鬣鞴それて直衣の袖に花散りかゝる　上總　森静緒子

○ 筒井つゝゐ筒にかゝる青柳の振わけ髪もなつかしきかな　失名

○ 亡き人の墓石きざむ鑿の音に山茶花ちりて夕日冷き　秋田　大越幹子

○ 世の中の富も位も何かせん文机やきて山にかくれん　尾張　野菊女史

○ 乞食が吾子いたはる江のほとり氷にうつる冬の夜の月　府下　小池つれ子

○ 梅小路蛇の目の傘をさして行く人うら若し春の村雨

雪　下谷　辻なほ子

斯くてしも寒さ身にしむ雪の日の覿召せてふこゑの聞ゆる

ひな遊　上總　高山静子

○ いもうとのひいなを見ても戀しきはふりわけかみの昔なりけり　上毛　好月

○ 身に錦かざりしとてもなにかせん笑み來迎ふる親もなき身は　宮城　渡邊しげ子

○ 出陣のうたげはやみてくりからの峰おろしは雪になりゆく　越後　松岡金帆

○ 一としきり筮の音冴えて鏡光が鎧の袖に紅葉散るなり　小石川　高橋たか子

○ 世におごる罪の子蠶の子からん爲め神の御劔をわれ請ぜんか　新潟　田村さく子

○ 笠一つ夕野ふゞきに消えゆきて妹があたりは燈火さむき　金澤　村山芳子

○ 賤なる桃の小村のひろたけてなさの音かるうには鳥の鳴く

和歌

○花實の低き語りに夜はあけて鴨川づたい風寒うふく　芝區 八太邦子

○破れはてし書齋の窓に霜をきて今朝咲きそめぬ寒菊の花　福岡 秋郊女

○わが心
年ふれどかはらぬ松と我が心深き思ひを誰かしるらん　能登 牧野鹿子

○たらちねのいたづき重き窓ちかく春雨細う日は暮んとす　群馬 萩原數江

○若菜つむ側へに來にし蝶一つなれはた何を語らむとする　札幌 杉山淑子

○末枯し木立に鳩のはらみえて墓原つゞき日はうすれゆく　松江 みつ子

○背公
咲き匂ふ梅を見つゝもあはれ君都の春やわすれかれけん　神戸 木田しげ子

○信濃川渚の葦に霜見えてすみ渡りたる月の寒けさ　新潟 小菅けい子

○羽子の音の絶えし夕の靜けさを近に守る富士の高嶺や　麴町 赤城すみえ

○白梅
こなたより向ふの山を見渡せば霞と見しは白梅の花　熊本 津野田しき子

○ひなまつる子はうせけれど庭隅に去年のまゝなる桃さかりなり　茨城 諸岡梅子

○わが里は松風淸く水淸し月冴ゆる夜に當もちて訪へ　紀伊 中西重女史

○寫眞
文机の中より出しうつしゑにしばし昔のわれにかへりつ　東京 墨ゆり



名譽の長尾文子君近影

○拍子木に歌舞伎ふれゆく夕暮やぬか雨烟る春の浪花津　能登 池野秋花

○何となくあくがれ出し朧月夜淸けく匂ふ白梅の花　志摩 淸水波子

○折にふれて
朝に夕に目には飽けども亡き妹を偲のぶ垣根の破日傘かな　大阪 直田輝子

○他郷にて婚禮せる姉に
心あはぬ人とかたらふ其折はうすき氷をふむ心地する　岩代 杉原たかやす
姉君の丸髷ゆひしみ姿を夢に見し朝ひとりほゝえむ　伊豫 筒井廣子

○田舍の朝
竹山をかまどの烟立ちこめて椽のほとりに鷄の鳴く　熊本 財津ますえ

○うちいでむ心の駒もたじろぎぬあまりつみなき君がえがほに　金澤 たちばな

○立春
東雲の空見渡せば霞たつ山の端よりぞ春は來にける　播磨 西村むら

○友待ちてえんの小端にたゝずめば椎の實こぼれて秋風の吹く　島根 三明糸子

○ふくろふなく鎭守府の森に日は落ちて獨り淋しき月を見るかな　島根 佐々田陵子

○忘れにな君と二人て汲みてける大橋川の淸き流を　島根 大谷瞻子

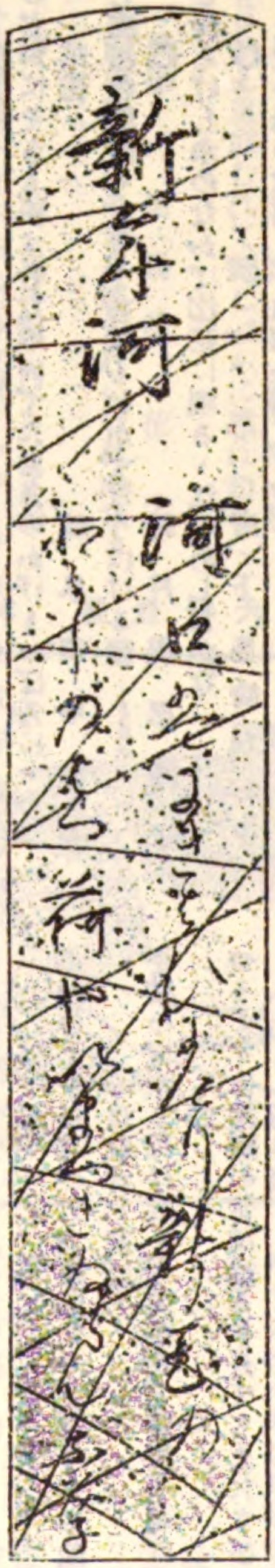
○雨ふくむ峰の白くも紋見せてふもと十里はたゞ水ひゞき　幽琴里 花津子
姫路 水守歌子

梅咲きていもせすまへる一つ屋は中も春なり外も春なり
○　大阪　杉田孤泉
道とへば京へは三里くれの道また降りかけぬ夕暮の雪
早梅　姫路　松下つゆ子
ほゝ笑みし梅のかた枝手折り來て茶の湯の床にさして見るかな
○　相模　山本久代
木枯の落葉を拂ふ音も止みて月影寒う夜靜かなり
○　周防　岡部澄子
ちぎれ飛ぶ雲路かすかに眺めつゝ欄干による人の瘠せたる
羽子　安藝　董花
梅が香をしたひて行きしやり羽子の吹く春風に主を忘れて
雪の日によめる　鳥取　さつき子

たゞ清き雪よ汚れし世を埋めよそこにのぞみの國を建つべく
新年河　京都　岩淵國子
がいせんのアーチのさくら影うつりながれにぎあふ新年のかわ
初春　兵庫　ふじ子
雪つもる垣根の梅のほゝゑめりくさ木も春をさとりたりけむ
丙午新年　大阪　花すみれ
ためしなき年を迎へし國民の心の駒もなほいさむらむ
○　德島　木戸玉緒
君を思ふ心も消えし雪の朝朝日輝く空を仰ぎて
折にふれて　大阪　永田かすみ子
櫻花ちりにし跡はさしまれど面やつれたる人うらわかき

○　津市　新めぐみ
夕風に冬の木立の影ゆれてお城の堀の小鴨の群よ
○　函館　小野ゆき
夜もすがら袖に月ある秋の野を虫の聲聞く一人旅かな
春　常陸　川島かく子
梅はさき鳥はうたへど此春をなどてかくしも思ひみだるゝ
○　信濃　成澤とき子
小雨降りて梨の花かをる春の夕若き姫君琴調べます
折にふれて　麴町　堀江すみれ
つれ／＼に綴く文をくり返し光うすらぐ燈火のかげ
野の梅　備後　白はぎ
佐保姫のかすみの衣ほころびてにほひこぼるゝ梅の下風

○　川越　山田松子
初雪に小窓押し開け打見れば一人ポチのみ樂しさうなり
○　高知　竹村みき子
さきくあれ錦きませと別れにし友垣こひし夕ぐれの窓
梅花　兵庫　中西ゑみ子
今日咲くか明日は咲くかと待ちわびし垣根の梅のほころびてけり
○　佐世保　汎愛子
たのしかる少女二人は人つまとなりてかなしきみだれくる髮
○　四日市　廣瀬ため子
なき母と語ふ夜半の夢さめて軒のしのぶに露ぞしぐるゝ
○　北豐島　緋百合女史



長尾文子氏筆

人どちの秋に花の香りして四月の風の心地よき哉
宇都宮　金澤保子

初霜
さよふけて霜やおきけむ丸木ばし通ひし人の足あとの見ゆ
愛媛　天野八重子

○
何事もたゞ夢の間のしばしだにうれしき事の數多きかな
京都　秋月清子

○
宵ながら琴の音さゆる柴の戸を靜かにまはる木枯の風
茨城　さつき子

○
すや〳〵と破れし襖に熟睡せる愛兒なに笑む木枯の宵
久留米　とみ子

○
なつかしきひとの面影ふときえて愛のゑまひに春の夜醒めぬ
鳥羽　佐藤清枝子

春月
春風ののどかにそらもかすむなりいでにし月のかげもおぼろに
岐阜　田中悦子

落花
雲と見し高嶺の櫻散りしきて苔路もわかずなりにける哉
神戸　梶原靜子

○
炊がんと汲あげし水のなかば迄花に埋るゝ江のあしたかな
府下　島崎なか子

○
夕日かげ入佐の峰の雲間より山郭公鳴てすぎけり
新潟　中林ひで

春の川
まこも生ふる信濃川波長閑にて水上遠くかすむころかな
淺草　紅の花

○
靜けさや空には白き星かげのまばらに庭の梅ちりかゝる
横濱　船串よれ子

○
新玉の年の始めにほゝゑみて雲井に匂ふ御園生の梅
田川　田中秀穗女

○
梅が枝になく鶯の聲聞て樂しき春と人も知るなれ
新潟　逢坂木曾野

○
定めなき身は冬枯の野の末をさまよふ蝶の行衛ながむる
上毛　田中恭子

○
なやみある胸をいだきておばしまに月待つ夕ほとゝぎすなく
秋田　里人

○
枯れすさび殘る小笹のそが中にしのゝすゝきの打ち殘さるゝ
安藝　水野菊子

○
筑紫潟沖行く雲の行く方や戀君在すダルニーの空
德島　川和良佐子

梅
さかりにはまたしけれとも梅の花かたなりは庭に餘りぬるかな
紀伊　中西蓮

○
沖千里ほかに遮ぎるものもなし目に入るものは只雲と水
常陸　酒葉良子

わが里
筑波へ五里霞が浦へ一里半夕雲赤く花咲ける里
筑後　大島菊子

○
山里に逝きにし人を思ひれの夢と流るゝ人世果敢なき
高松　八千代子

○
木枯のふきはらひたる雲間より月影うつる池の面かな
福島　高松文子

自棄せし友に
冬枯の老木も花は咲くものをなど若梅の匂はざらめや
伊勢　獄本靜子

○
やう〳〵に按摩の笛は遠くきえてちまたさびしく春の雨降る
大阪　富永才子

新年河
やすらかに年を迎へぬ宮川のながれつきせぬ御代にあひつゝ
環子

折にふれて
この春は片山里の梅が岡我つれ〳〵をぞひろの鶯
德島　佐藤きん子

○
木犀のよき香にまじる琴の音や君が小窓の灯はうすくして
京都　重谷淵子

○
むらさきの彩雲ひけば詩園のあらはに見えて微笑むか月
松江　おぼろ月

○
春たちてまたも思ひにしつみけり小雨そぼふる丸まどのもと
宮城　太濤きみ

○
雲ひくき八甲田山は吹雪してずゝろかなしきこの夕べかな
鹿兒島　福留たつ子

春の夕ぐれ

雨やみて橋の袂の苫船の烟床しき春の夕ぐれ

霜　　安房　栗原よし子

文學ぶ窓を照しゝ月落ちて朝霜白し菊のそひ竹

○　　長野　田村あい子

妻に子に遠く別れしますら夫も今は故郷にかへるうれしさ

○　　津市　橋はな子

平和の光あまれく野に充ちて春の女神の幸よみがへる

○　　津市　松尾花子

鼓おきてしばしまどろむ梅の宿淡き小窓の月うすれゆく

○　　千葉　石渡春枝

霞立つ春日やま里庭むれて鏡しづかに暮れ初めにけり

偶感　　但馬　螢花子

湧きかへる胸の血しほの涸ればかれいづれ冷たき人の情よ

○　　群馬　河内とめ子

雛ひとく冬の野路に入見えて葦の波間に夕づゝの影

○　　上毛　河内千代子

またきにも春の心なしろものは野邊の雪間の若菜なりけり

初雪　　津市　六田なをの

まだ淺き冬野の原に初雪の朝日にもろく消えうせにけり

白梅　　尾張　淵子

白梅のかほりも高き一枝を折りて手むけん友のおくつき

松　　千葉　雲塚みさを

生立ちし姿くづさておのづから年をふる木の松ぞゆかしき

雪のけ（賞外）　大分豊後　林きく子



○　　東京　露木きく

友去りて埋火白う更くる夜半君がうつしゑだきしめて泣く

○　　福岡　圭枝子

村長が垣もる桃の花ゆれて梭の音さゆる五十軒の春

初春　　佐賀　佐々木菊子

梅の花音もしづけくほころびて一ひらごとに春はふけゆく

○　　越後　本多紫子

空に舞ふ雲雀は高く野はみどり夕日斜めに牧童いそぐ

○　　播磨　津根美花

そゞろ行くあした磯邊の逍遙やなみ新しき譜をぞかなづる

○　　淡路　岡田貞子

幾百の衆生つどひて聖ひとり教説くなり菩提樹のかげ

○　　新潟　大崎秋子

笛の音のひゞきほのかにこぼれきて神降るらしき花の宵月

○　　上毛　赤心子

きよらかにながるゝ春のさゝれ川芹つむ里の少女の一とむれ

梅花　　矢名

なつかしき君凱旋て歸られて庭なる梅も香を放ちけり

○　　備中　佐藤芳子

明日よりは移りも行かん色みえて今日こそ花のさかりなりけり

新年　　千葉　秀子

新玉の年をむかへし目出たさを學びて庭に祝ふたのしさ

○　茨城　板橋愛子
五年の春を布哇のわびすまゐ故郷戀し鶯の聲

○　茨城　秋山きみ子
おぼろ夜を泣きて別れし君が門柳の風に小袖かざしぬ

○　岩代　丹治はるみ
空青く草緑なる春の野に笛吹きてくる牛飼童

○　大阪　池田霞翠
萩窓にそとよりそひて眺めやる空に淋しき雁がれの聲

○　愛知　春野夏子
はしなくも道を說かれて戀ふる君にあゝはかなさの戀にあらずや

○　能登　千田美英子
もずの鳴く鎭守の杜は黄昏れて鈴の音幽か馬子唄の聞こゆ

○　松山　山脇幸子
琴斷ちて君と誓ひし其夜より風すさぶ窓のくれ竹

窓前梅　千葉　壽子女史
あれはてし學びのまどににほふまでさかりになりぬ庭の梅が枝

新年　新潟　中林ひて
萬代も千代もゆるぎはあらなみの音せぬ御代の年たちにけり

友の許へ　安房　忍足藤子
御園生に琴奏でてます調べ低し紅梅匂ふ春の夕ぐれ

○　大阪　江上かほる
若眉の匂へる女春の野に歌を尋れて詩となりける

○　近江　勝山天園
紫の雨やふるらむ春の海珊瑚の島の夕ぐれの雲

春日　近江　竹村たけを
うす霞梅が林にたちこめて聲うら若し鶯の歌

たそがれ　陸前　高橋みよし
たそがれてけぶりか霞かひろごりぬ馬子は唄へり追分節を

冬の曉　茨城　豐崎喜美子
月かくる杉の梢をはなれ行く鳥の聲の寒く聞ゆる

○　伊豆　山田もん子
一ひらのちるだにほしき梅の花風のまにまになりぬべきかな

春の野　三州　白すみれ
少女子が野邊の摘草餘念なう日はほがらかに花の香かをる

みなし子　府下　永瀬らく
ありてさへわけてこひしきたらちれのなき身の上ぞいかにかなしき

○　名古屋　原田こと
うらやみてわれにもかくとせかむ子の心をくめばたゞ涙かな

新年を迎へて　相模　山口春子
門松の緣にそへて旭のみ旗國のみいづの輝きにけり

○　和歌山　津村美智子
流れゆく笹の小舟につむ花を抱いて胡蝶夢を結べる

孝養　靜岡　鈴木はな
居ます日は何か思はむ父母を悔ゆる朝ぞ長の旅なる

○　福生　森田喜代子
みをとぞと誓ひし事もうたかたの思ひて多き花鳥の春

○　姫路　萬代つれし子
ゆくりなくめぐりあいたる我友としのび語や寄宿寮

鶯　備後　口なし女
雪ふかき垣根の梅に今日もまたなくうぐひすや春を告ぐらん

夕月　堺市　竹曳文子
白梅の扉に彳ずみて若僧の物思ふらし夕月の嵯峨

凱旋　長野　飯塚ぎな
涙にておくりやりたる我がせこをうれしなみだにけふは迎ふる

看護婦に代りて　丹波　柳原ゑつ子
世の人のとかくのそしり何かせんいざはげまなむ己が天職

○　美濃　宇野しづゑ
軍ふみひもとき居れば夜はふけて軒の竹むら雪をれのこゑ

○　下野　新井琴子
まゐらせし櫻かざして君が舟籬に入江の夕淋しき

折にふれて　牛込　林安律子
いさ彈きれ我歌はむとのたまいしみ聲は今も耳に殘れり

○　大阪　幽絃女史

ふる里のたらちれ呼びて夢さめて窓の戸押せば雁なきわたる

○　京橋　尼女

小夜更けて幸なき身をばかこつ時かすかに響く木魚の音

○　石狩　齋藤鶯子

東雲の庭に白露置きつめて匂ひ冷たき黄菊白菊

鶯　滋賀　平安秀枝

咲きつゞく花のみ山路わけ行けば霞がくれに鶯のなく

折にふれて　小石川　町菊

床なつにやどれる露は姉君の病める
をいたむ涙なるらむ

新年遊戯　神戸　足立淺子

梅もまだかをり初れど年立てまづ春
めける糸竹の聲

女友等との約にて　大和　羽田由紀子

いづら時ゆし出てむ樂の音なれやと
行方しまきて夜嵐の聲

新年河　三河　草涯女史

初日影さすがに清よくにほいつゝす
み田の川に年立にけり

○　徳島　住友登喜子

身の幸もなきつぶしたる盲目のみ顔
も見ずに別れてむとは

○　凱旋の夫を待ちて　能登　花菫女史

わが織りてわが縫ひし衣着せまつる待ちにまちたる日は近づきぬ

○　長門　梅田染子

旅にやんで獨りもだゆる夕暮を青葉わか葉に雨細う降る

○　伊賀山　百合

さやまめに摘まれつゝも咲きにけん賤がまがきの朝がほの花

○　和歌山　保田愛子

ゆくりなく別れし友にあひにけり月も朧のすみだのほとり

○　下谷　太田樂子

梅月夜またゝく星の影寒う花の香冷たし身にしみ渡る

○　新潟　波江野紫子

鶯のなくかと聞けば深山路の木玉に響く杣人の聲

○　姫路　船戸ゆき子

月見ればたらちれ戀し古郷の友なつかしきたびころも哉

○　山口　河津秋月

打拂ふ砲音高く日の本の國の名こそは世に響くなれ

弔なき友　尾道　樋野須賀子

哀なり常なき風にさそわれてまた逢
ふ事のなきと思へば

○　田中　嵐城

餌に集ふま鯉ひ鯉に花なげてほゝ笑
む乙女の卵美しき

うれしきもの　名古屋　須磨子

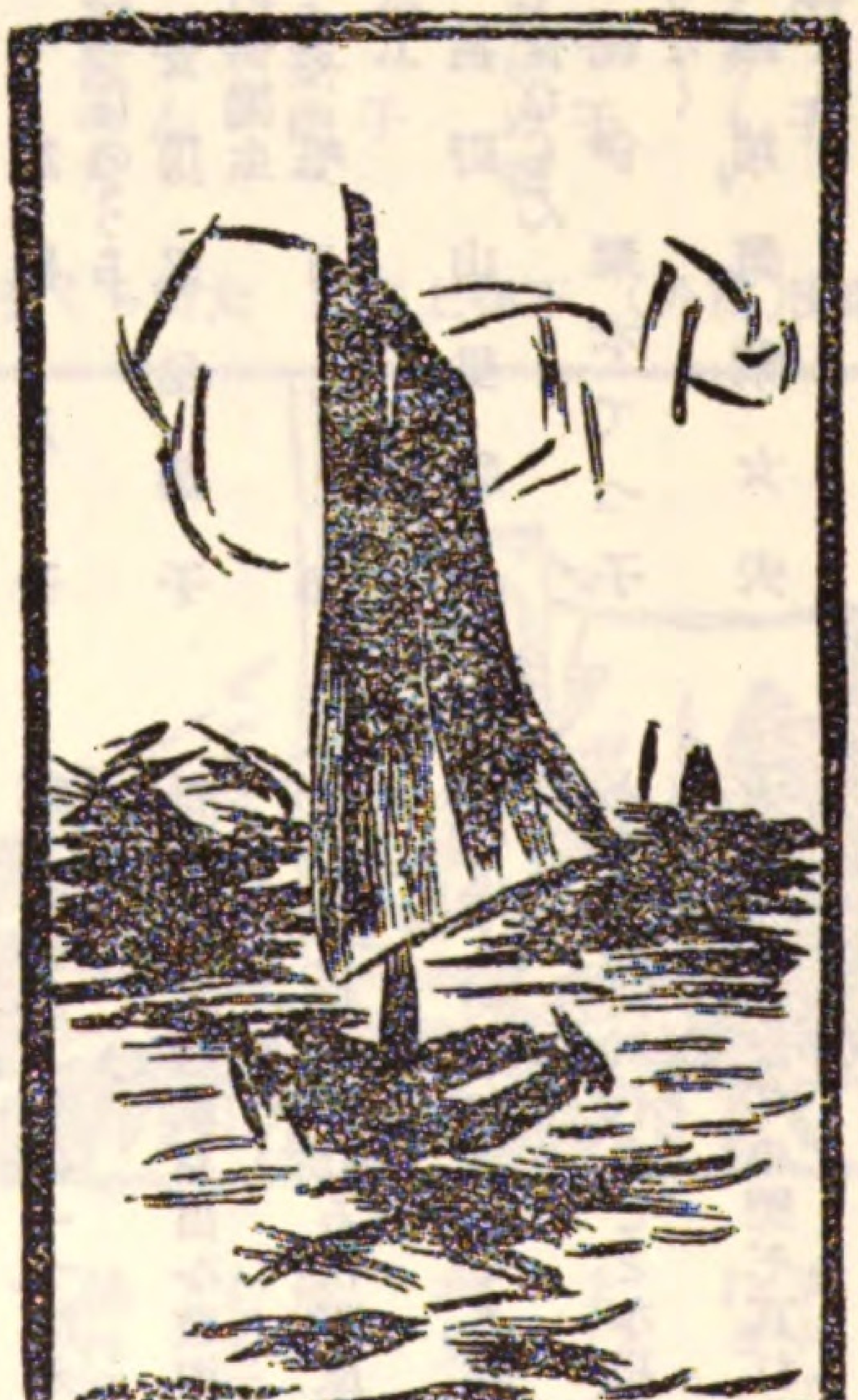
たまあへるむかしの友とかたる哉な
りもこそあれ年の始めに

○　美濃　長尾文子

この頃は谷間の梅の花さかり下行く
水も香ににほひけり

○　福岡　高松ひでよ

海（賞外）



陸中一關　阿部とみ子

尼寺の裏戸に殘る一本の白菊霜に夜をほゝゑみぬ

宮島に詣でゝ　本郷　町山枯草子

安藝の海や波のたちゐものどかにてかすみに浮ぶ春のみやじま

海邊春風　山城　月子

ひろがひろ海女が衣のうら風ものどけき春になりにけるかな

鎌倉を懐ひて　都筑　村田たけ子

いつきても相もかわらぬ故郷に戀かまくらの懐はるゝかな

○　岩代　白女菊史

奥庭に二八の姫の袖かけて羽子板を見て獨り微笑む　下野　前澤きく子

○

新墾の三戸の村のはれつるべきしり響きて夜は明けにけり　下野　木村みしろ

○

昨夜の夢ふと思ひ出て微笑みぬ君と二人の花野の朝　茨城　石崎秀子

新年河

新玉の年の始めの御光りにアリナレ河のこほりとくかな　東京　貞子

○

うれしさを袖につゝみて人しれずあすの日和を祈りぬるかな　千葉　嶺月子

うめつぼ

月かなる花園の笛の音冴えて夢さながらの梅つぼのうち　安房　忍足藤子

○

姉君の琴のみそてに月澄みて紅梅かをる春の御園生　上毛　月光

○

涙もて送りし我子涙もて迎ふの老の心をぞ思ふ　長野　山里彩子

○

月に雲花に嵐のれたみあり世は何事もかくて世ならん　紀伊　栗本てつ子

○

弟と昨日造りし雪駒の何地ゆきけん影もあらなく　福岡　筑紫女夫

○

山寺の鐘の音細く黄昏れて筑紫の峯の雲流れよる　愛知　平野とし子

○

佐保姫が讃美の曲や舞給ふ渚の松に霞こむる夕　下野　清子

○

とも〳〵に學びし去年の親しみは何時の世までも忘れざらまし　越後　苅萱女史

○

姉君のかたみの御衣身に着けて追憶多き春の雲見る　香川　紫蘭女史

冬朝

雪わけて冬菜あされる小女子のほつれし髪に朝風のふく　周防　蘆の江子

渡守

吹きすさぶ新風寒し親の子の今日もひれもす河渡すらん　上野　江原勝子

○

ひと群れの鴈金すぎしさむき夜に思ひにいたむ詩人やたれ　千葉　高山静子

水鶏

よもすがらなに水鶏のたゝくらん柴の庵りはとさしせぬよを　陸中　蟲森子

○

枯野千里傳騎の影の今消えて寒月高し滿州の原　能登　千田美芙子

○

朝霞はれ行くまゝに琵琶の湖沖に白帆の三ツ四ツ浮き見ぬ　播磨　佐野浪子

○

霧こめし星の光の一つ消え二つ消えつゝ夜は明けにけり　京都　吉川花愛

○

母と別れこの朝戸出を破垣に残る白菊見るにえたへぬ　奈良　柴山昌子

○

吹く毎に狐なくなる枯野原淋しく照らす冬の夜の月　相州　長谷川ます子

○

我背にもいませは斯くと傘の下にも時雨降らせけるかな　下總　伊藤道子

○

ともすれば神代のことを思ふ哉此の世汚れと思ふものから　廣島　きみ枝

○

子を思ふきゞすの聲ぞ哀れなる枯野に寒し冬の夜の月　宮城　しらゆき

○

千代と飛び八千代と唱ふ新雀軒にも立てよ日の丸の旗　因幡　ふる里女史

○

門松を輕くなびけてこちふけば雲井の上にたこまひあがる　山口　江東秋子

○

病める母にかはりやあらん疑ひに夢をどろくよ手習かぬ胸の　香川　松永あやめ子

○

道とはむ家だに見えぬ深山路に淋びしく咲ける山櫻花　淡路　伊藤綾子

○

美しき冠いだきて學ぶ子のいやましましに榮たのしき　和泉　辻林みどり子

○

青柳のみどりに染めし絲ごとに白玉ぬきて春雨ぞふる　岐阜　悦子

花

見渡せば雲か雪かとまがふまで高嶺の櫻今盛なり　酒田　常子

○

吾とても皇御國の民なればふゞきくらゐになとか恐れん　横濱　青木　松江

○

大君の惠みの露のいとふかく今年も榮ふ谷川の末　三河　澤田　つま子

○

散る花に流るゝ水も彩ろひて棹さしまとふすだの川舟　ひとは子

○

老いし身のふじにのぼりしいさをしは此山よりもいよゝたかけれ　兵庫　田中　その子

○

春はきぬほゝえみの戸はゆら／＼と自然にあけぬ谷川の氷　遠江　蜂　仙子

○

幽韻の男波女波のさゝやきにねむりさめたる湖添への宿　羽後　鈴木しゆん

○

やみふせる身ともなりては今年の秋うせにし母のなほぞこひしき

雲中來春　福井　梅田　菊枝

降る雪に野路も山路も埋れて春とは見えぬ春は來にけり

月夜雪　茨城　栗原　きよ

有明の月さす庭の白雪は今一入のながめなりけり

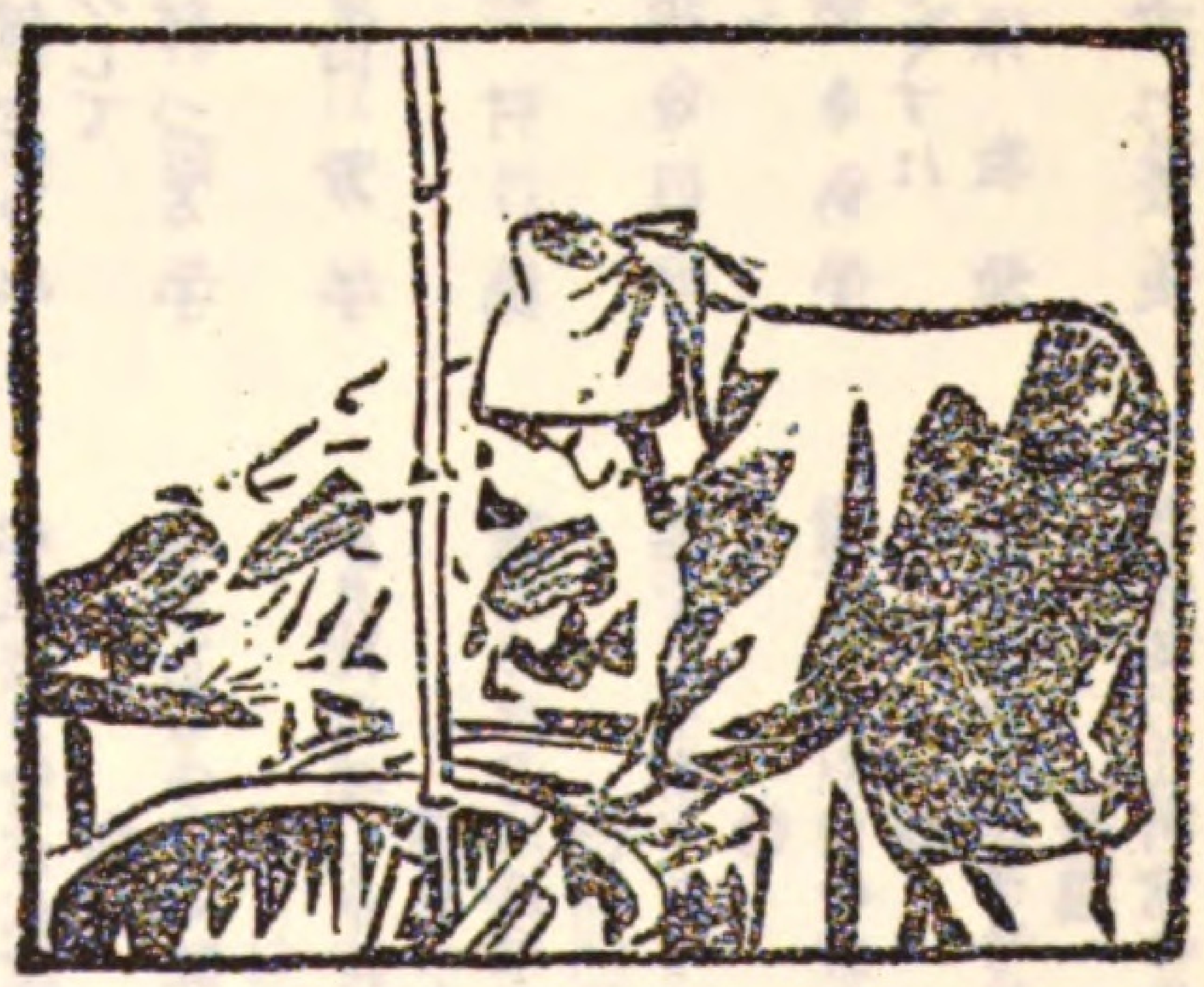
○　福井　白藍女史

やがてその夕の雲はとざしけり冷くなりし人の片頰

○　愛知　品子

雁がれの鳴き行く夕一しほに胸の思のいと亂れけり

濱菜洗（賞外）　下谷上根岸　太田くら子



紀元節　岐阜　梅村いく子

かど毎に旭の御旗なびかせて都も鄙も祝ふ今日かな

○　茨城　秋月子

何人か吾より先きに渡りけり醒く板橋の霜に跡して

○　福岡　浜の華

居そらば亡き母偲ぶよしもがな似たりと人に聞きし我面

○　牛込　遠藤　義子

願はくばわれ白百合と身をなして戀しき人の宿に咲ばや

○　奈良　松原千代子

青丹よし奈良の都の八重櫻咲きつるもとに鹿ぞれむれる

○　新潟　岩瀨　政子

またと見る君が寫眞胸に秘し眞白衾のうるはしき髮

○　新潟　立花　波子

我立ちし大巖ゆりて乙姬の舞の音のせて春の潮くる

池塘楊柳　紀伊　阪上いさ子

池のへの柳のみどりうちなびきなみのかなたにかすむ春風

巡禮　香川　串田　綾子

枯れ草をふみわけて行く巡禮の菅笠の上に夕日かがやく

○　千葉　良方　女史

遠山に夕日薄るゝ巒のそと泣子をすかす人の聲あはれ

○　愛知　小島　品子

年月は小車の如くめぐれども立てし望は其まゝにして

○　麻布　水野　淑子

夜業をへて歸る女工がさま／＼のうきよ話の面白きかな

○　茨城　荒井　柳枝

血ににじむ胸かいだきて戰死友のつめたき頰に接吻するかな

筑前　水子
あまの子の船歌低う日はくれて岬の森に鐘鳴り渡る
○伊勢　乙部田鶴子
一色に春を織りなす野辺にしてむつがたりするうなゐ子の群
○伊勢　米山靜代子
脊の君の歸るときゝしこのあしたうれし一枝早咲きの梅
○伊勢　板倉もと子
細く長く欸乃やがて黄昏れぬけふも終日繪はならずして
○伊勢　中村せき子
うつら〳〵物くろほしきこのゆふべ君すむ里はうすがすみして
○伊勢　行村つる子
わがおもひ磯馴の松に黄昏れて島かくれ行く君が船かな
明月　加賀　濟田芳子
唯ひとり酒酌む夜半の杯に宿れる月を友とこそ見れ
梅花　伊勢　竹村操
白き赤き何れを友にまゐらせむ垣根に咲ける二本の梅
○秋田　松田せい子
靄にこもる淵うすく暮れそめて霙ふりきぬ黄昏の頃
○大阪　四部きめ子
ぬばたまのわがくろかみもみだれては鏡にはづるこゝちこそすれ
○羽前・鈴木紅葉
波場の燈火一つほの見えてかすかに聞ゆ蜑の舟唄
○上毛　すみれ女史
打よする波も霞みて磯やまの松影くらし春の夜のつき
○新潟　岩瀬紅波
草なびく夏の流に影圖して柴舟ながす京の詩人
○豐後　秦　泉子
雁が音のあへなく胸に消えしより夕べ煩悶を鐘の音に聞く
春宵　神戸　勝田かつ子
金屏に丸行燈のほかげゆれ持つ杯に夜櫻の散る
○茨城　小泉濱子

春がすみ鶯の音にそとゆれて桃の香なびく川添の村
○周防　櫻隨里之
あら玉の嬉しき内にかなしくも身の行くすゑぞ思はるゝ哉
○紀州　壽美子
父君の逝きしときゝてふるさとの汽車まつ小夜を雪ふりしきる
梅花　長野　小林栢枝
賤の女が織る梭の音の床しげに聞ゆる過梅の花さく
○山梨　近藤すみ子
年かはり君が代歌ふ凱旋の兵士迎ふる日の出ゆかしき
○新潟　小菅まさ子
小ましらのなく聲もして山松の梢にすめる冬の夜の月
○越後　宮島新星子
夕月に眉美しき狩衣の笛ならし行く白萩小道
修學中の弟に　岩代　紫羽子
願はくは月の桂を折りかざせ老たる親の待ちてゐませば
○京都　無頁中久子
遠くとも君がこゝろのかはらずば近きにまさる文の音づれ
○京都　花蝶女史
霜ばしら立田の紅葉うつろひて錦の筏まなく流るゝ
○筑前　田島道子
脊なる子をゆすり起して亡き父の御墓をしめすうらわかき母
杜鵑　香川　松永あやめ子
さ夜ふけて古宮のあたり逍遙へば雨しと〳〵と杜鵑なく
○小石川　佐川良子
都にはいつかにほはんわか山の梅の林の春の朝風
○和泉　天堀蝶雨
詠め歌をきぬに寫して流しけり沖の小島は君住むところ
○岡垣幾重
亡き父の厚きなさけをしみ〴〵と思ひうかぶる春の夕ぐれ
○京都　たれ子
千里ゆく馬も車に交りて凱旋せるぞ目出たかりける

○新年の河　越後　渡邊きん子
開け行く御代の初春静かにて小川の波も和ぎにけり

○　神戸　春浦女史
梅の花今年も咲けと過ぎし春めでにし人は居まさゞりけり

○　茨城　ゆり子
亡き姉の新妻姿そゞろ偲ばれぬ床しき友の嫁ぐ其の宵

○　下総　川奈部よし子
はぢらひて小走り去りし少女子の袂をまろび出でぬ小手毬

○　陸奥　三宅嶺子
野の小路菫の花はあこがるゝあげはの蝶よ何をさゝやく

○　横濱　寺田光子
三年君都にいでゝかへりませず花はさけども君かへりまさず

○　紀伊　阪中とみ子
待ちに待つ君は歸らで文はこず今日もむなしく日は暮んとす

○　陸前　横迺舎照子
花は紅水紫の春の野や小草ねよげに風暖かき

○　常陸　酒葉つれ子
姉君の病癒えなば雪の日を薬買ふ身のなにうくあらむ

○　深川　西尾はる子
黒雲の低うみだるゝ晩秋の枯野に迷ふ白き蝶哉

○　新潟　小林國子
朝一里山寺とへば僧はあらず窓のばせをに歌かきて見る

○　信濃　佐藤安子
冬枯の夕の園に佇みて冷たき月を仰ぎ見し哉

○　因幡　みどり子
病む父が薬求めに出しやりし妹遅く冬の日暮るゝ

○若菜　澁谷　牧遙
いさや子等雪のふるみちかきわけて澤邊の根ぜりつみてかへらん

○　信濃　櫻井みさを
何となくたれかよぶらん心地してそと窓をせばもみぢさゝやく

○　上毛　眞砂壽子
にぎはしき歌留多遊びに夜は更けて門の戸叩く木枯の聲

○　上毛　眞砂須惠
霜しろきあしたの庭におりたてば冷たき風に水仙薫る

○　上毛　和田すゑ子
大君のみ代の榮や謳ふらんとしたつ今朝のうぐひすの聲

○　上毛　磯貝すみれ
み手とりて語り逢ひしと見し夢のさめて嬉しく君のきませる

○　千葉　木内春子
のり捨てし岸の小舟に霜置きて有明寒く水鳥のなく

○吹雪　備後　眞野さよ子
酒買ひに行ける孝子に出合ひけり吹雪の夜半を河沿の道

○　伯耆　榊原松子
園ちやんに今年いくつと問いたるにあけて六つてつめては五つ

○　下総　向井とし子
雪のころ梢もさびし梅さくや寒さながらも春の心地す

○學窓聞鶯　長野　小林稲枝
書にあきて窓の戸おせば鶯のなぐさめ顔にいと高う啼く

○　豊前　秋満香子
ゆく君のをしくもあれどからにしきたゝずば衣とならじと思へば

○折りにふれて　三河　彦坂兼女
あえぐとも能はじものを弱き子のなほゆく人を追はんとすらん

○梅　やゑむぐら
春風のまづしきやどに匂へれば雪とや見らむ白梅のはな

○　廣島　池田都子
海棠に雨やはらかき窓の外子家鴨三羽なきて寄り來る

○　京都　露子
嵯峨野なる千鳥がふちに來て見ればこがらし寒くふきすさむなり

○新年河　京都　生咲みどり
濁りなき御代に拓けし石狩の河邊に高く初鷄ぞ啼く

○　山形　幸子
まがき破れ軒傾きし柴の戸に白梅ひとり薫りほのめく

抒情文

文學士　沼波瓊音先生選

天　○凱旋し給へる兵士を見て

麹町區三番町五十番地　赤城嘉美江

樂しと言ふも可ならず嬉しと云ふも足らず快と言ふも樂と謂ふも何れかこの心地を盡し得べき、心は常軌を逸して殆狂せるなり。思へば只涙潜々としてたぎり滂沱として盡きざるもの當に卿等が心なるべし。寒風に鍛へし梅の香芳ばしき時、大君のため情を矯めて滿洲に赴かれしより苦鬪勇戰、一年有半一日の如く、しかも梅が香よりも香ばしき功榮を負ふて凱旋さるゝ卿等、人誰か情なからん、况して大和武士は情深きものぞ。去年涙を呑みて卿を送り給ひし老母の君、今は喜びの涙溢れし眼もて君が歸らん空を打ち眺め給ふを。あゝ大君のための務は終りぬ。卿の身體は此處に卿のものとなりぬ。いざ牢たる意の絆解きて、慕しき君が古郷に老いたる母上と共々、思ふ存分泣き給へや。あはれ一年有餘歲の奮鬪に如何につかれし、滿洲の風は如何に寒かりしや。同胞の死、露營の夢、堪ふべからざるの寒さ、堪ふべからざるの暑さ、觀じ來れば、泣かむとしも思はねど涙潜々としてたぎるを如何せむや。大君のため國のための卿等が辛苦に、五千萬の同胞が一年有半の間、最强國と兵を交へつゝも各その職に安ぜられしを思へば涙滂沱として盡きざるを如何せむや。妾は卿等に對する感謝の辭なきを恨む。見給へや大日本の名は世界何地の人と雖、口にせざる者なきに到りぬ。吾國威の斯くの如く大に、斯くの如く熾んになりし所以のもの偏に卿等が勞苦に因れるなり。卿等が苦、卿等が勞に因つて結びし實に外ならざるなり。今や君が、大君に對する務は終りぬ。老いの身も厭はず朝な夕な、鎭守の神に君が戰功を祈りし母上は在さんを、君に後顧の患なからしめんと、一意業を勵みし健氣の妻は有らんを、あはれ他の兒が父と戯るゝを羨み、吾父上も夙く歸りまして吾を懷いてよと待ち憧憬れし愛し兒も有らんを、いざ行きて共に團欒の樂を味ひ給へや。あゝ吾軍は勝ちぬ。吾國威は揚りぬ。

（評）公務を終へしを謝し私情を鼓吹する所美しき同情の溢るゝを見る

地　○ひと夜

福岡縣三池郡大牟田榮町　浪の華

新春(賞外)　京都瓶原村　中西浪子

霜夜の鐘が空に凍ると、寒さうに鳴く鴉の聲の淋しさ、落つくした梢に、宵からの星樣が輝々と冴えてゐる、踏めば音ある、霜の落葉をしだいて、椎の古木を右に折れて、鎭守樣の凄い森へ出た、いつもながら藥取りての歸るさを、お母さんの病氣が治るやうに、お祈りしようと。

町の方で按摩の笛が、凍る街を流して行く。

噫！、氣づかはしいのは、お母さんの此頃の容體、咳が出るのが氣がゝりのみか、時折は咳に混つた紅いもの、それにどうやら醫者も疎くなつた樣子、「薔へとては一文もなし、來てくれないのも無理はない。

妾がかよわい腕に精一ぱい稼いだからとて、やつと二人がその日の糧を得る許り、藥禮も滯り勝、家賃はつかへる、それやこれやで、定めしお母さんも氣苦勞せられることとであらう、お母さんに勿躰ない、氣苦勞をかけるのも、皆な妾の働きが足りないから……容して下さい、お母さん。



木枯が古いみ堂の戸をゆすつて、み手洗の手拭が一時にはためいたあとは紳寂びた夜の、ひつそりとして、たゞ落葉の霜に風の戰ぎ。

歸りが遲いので、定めし待こがれて居られることとであらう、それにしてもお母さんへ差上げる藥は?!『今日からは現金てなくては……。』と、すげなく云はれた時の妾が胸の切なさ、こんな時にせめてお父樣ても、生きて居て下さつたらと、返らぬ事を思ひ出さぬでもない『それはもう、お禮も支へて居ますので、さう被仰るのは御尤てございますが、どうか、お慈悲にめぐんでやつて下さいませんか、母さへ復りましたら其時は身を粉に碎いてもお返し申します。』と涙ながらに、何度も〳〵願つては見たが、『よくなる見込はありませんからッ。』と、玄關口で書生にどなられた言葉、よもや其言葉がと思つて茲までは歸つたものゝ、命の綱と頼んでゐた藥はなし、吁、それを思へば足の運びも、遲れ勝である。

晴れて歌へぬ爪びきの、幽に遊廓の方から流れて來る

……いつそ此の身を……いや〳〵其のやうな淺間しいことが、其のやうな淺間しいことがと、襦袢の袖で涙を拭いた。

野寺の鐘が十一點。寂然として夜は更けた。影碧き星一つ、辰巳の方へすうつと、長く〳〵尾を引いた。

（評）戯曲の景趣あり

人

○愛の心

京都市上京古川町仁王門下ル東門前町佐野方　竹下季子

草葉の霜眞白に北風荒るゝ朝を浦の畦道さしり去りし母上の御車切り下げし御髪は昔に變らねど御肩の邊り暫見ぬ間にいたうやせ給ひしが如き心地のせられて、御後姿のやがて山の手に隠るゝ迄は見送りまゐらせし、只あとはあやしうほろ〳〵と熱き涙の流れいて、、嗚呼赦しませ母上よ、年老いし母上が遙々五里近き此の里へ……子を思ふ親の御情より、そを知らぬ妾にてはなけれど只々赦しませ不孝の子を、我が儘の罪を、されどあーされど母上よ妾を十年近くも敎へ導き給ひてし師の君は妾が此の家松田の家に嫁ぐ折にも良人に別れなば他へ嫁げよとは決して〳〵敎へ給はざりしよ、あゝ此の世界に美しく星の輝く下清き水の湧く地上にかりにも良人と呼び妻と呼ばれなばよしや一日の間なりしといへども妾は恨み侍らず、まして三歳の春秋、あー如何て君が愛を忘れ情を捨てゝ去るを得可き、其れもなほ言ふ迄もなき事ながら母上よ母上も知ります如く口にするさへ涙こぼるゝ彼の世にも哀れなる不幸不運の義妹を如何にす可き少女十七の今春まで盲目のまゝに人となりてさらぬだにたより無き彼女が今又、唯一人の妾にも見捨てられなばさて此の辛き浮世に彼女は誰れの膝に取りすがりてつらき運命をさゝふべき——母上よ妾は如何に心を鬼にしても義妹を思へばとても〳〵此の家を踏み出す事は……、母上が子としての妾を思ひ給ふ厚き御情も妾が義妹を思ふの情も愛の心は皆同じ事なれば、最早何も申まじ只々不孝の子を赦し給ひてよ妾はあく迄松田の妻亡き夫の靈に仕へまつりつゝ可憐の義妹をいつくしみ慰めて此の世を送る事は此の上なき幸とのみ思へば、

（評）一篇の家庭小說。

秀逸

○地下の妹より

松山市　山脇幸子

アヽ姉上よ、今手向け給ひし洗米を妾は父母ともに嬉しく受け候ふよ、アヽ姉上よ、君が手向給ひし其萩を、妾は此下げ髪束ねてさし申さん程に

妾は今父上母上に双の手引かれて、そゞろあるきしつゝあるを、姉上にはなど見給はざる、アヽ姉上よ、父上が今呼び給へるに、母上が今招き給へるに、など應へ給はざる、

アヽ姉上よ、妾もかくも呼ぶものを、かくも招くものを、など應へ給はざる、妾は今姉上が涙ぐまるゝ其目の前を落葉の掠めて散りしをも見候を、ホッと吐かれし悲しの息の妾が耳には響き候を

露にしめれる裳甲斐／＼しう朝な／＼來給ひて此の妹を迄拜ませ給ふ御心のうれしく候かな、父上も母上もいとゞ悦給ひて「可愛さうに彼の子を一人塵の世に殘して」とていつも招き給ひ、呼び給ふなるに、姉上には應へ給はでやがては見返り勝に歸り給ふにはおはさずや

アヽ姉上よ、早く慕はしき戀しき父母が許に來ませよや

あはれ姉上が手向の花を、妾はうれしく束ねし髪にさし候へど、姉上の袖を顔におしあて給ふ時は父上母上諸共にはりさけむ許りの胸を押へてそゞろ涙にくれ候ぞ。

あはれ姉上、など御身は一人殘らせ給ふぞや。かつて二人が詫び住みし時は、互に父母を慕ひ申せしが、姉上を殘して此處に來りしより、塵の世に風をいたみし野百合の如く凋れていますす只一人の姉上のいとゞ戀しうて待ちはべり候ぞ。

あはれ姉上よ早く來ませよや。

（評）口寄巫女を聽くが如くいと／＼氣味惡き文なり、この氣味惡しく思はするがこの文の力あるにか

○手向草

横濱　山崎京子

きのふの雨に初櫻大かた散りて、春ここにやうやく盛んならんとする此夕、今宵はわが亡き妹の忌日にあたれり。わが爲には此世の中に、いとしかりし唯ひとりの妹なりしを、古郷遠き旅のやどりにかり寢の身は、まつりの事も思ふにまかせず、年たけし、爺やをたよりに、かたばかりの佛壇を書齋の床に飾りて、近きみ寺より招きし僧の讀經を、せめてもの手向草、亡き人の靈やすかれと祈りしも、僧歸りての後は一しほ心細く、香烟ゆるうたちのぼりて、椿の花一輪、風なきにばさ／＼と落ちてけり。そともは雨となりけむ、眠りを誘ふ軒の玉水、音しめやかなり。くりや女は晝の勞に眠るらし。八重葎いたく繁れる宿ながら、かたみにいたはりつ、慰められつゝ妹と共にありける間は、こ

ゝにも春はおとづれしを、おもへば、はかなしや、去年彌生の今日と云ふ日、あはれは梢の花ばかりかは。つれなき夜半の嵐に、愛の光りの忽ちに消えうせてより、我心はとこしへに闇となりぬ。いぢらしき妹よ、なれが小さき胸の中に秘め置きけむ怨みの數數を、骸とひとつに櫃の中におさめし後は、誰れ知る人もあらじとこそ思ひけめ、おなじ血汐を分て生し兄が身に、など其なやみの通はざるべき。われは知れり、なれに戀しきひとりの人ありし事を。又知れり、その戀へりし人は、わが親しき友の兄上なりし事までも。いとしき妹よ、われに許せ、なれがやるかたなき心のなやみを、とくよりそれとさとりながら、兄の身として、そを慰むる事能はざりし罪を。まことわれは、なれがなやみを解くべき言葉を知らざりしなり。忍ぶに餘る胸の思ひを、あくまでなれは包まむとせしものを。戀と恨とは垣一重の隣どし、戀をたのしきものと思へりしは、なれがあやまりぞ、うつろひやすきは花ばかりかは、かはりやすきは雲の色ばかりかは、世に眞ある人はいと少きに。戀になく人こそあはれ、恨は限なきものを、深きなやみを胸にのこして、とこしへにもだえ苦しまむより、うきつらきうきつらきうつし世をのがれ出てて、神のみ園にやすらけき眠りのとこをもとめけむこそ、なかなかに、これが爲めには幸ひなりしが、さもあらばあれ、此世にいとしき唯一人の妹にわかれて、ひとり寂しくのこれるわが身の悲しさ。ゆく末かけて深くもなれと契りけむ。わが友の兄上とかは大學の業ををはると間なく、さる貴き方の婿がねとなれりとぞ。さすがに心とがむる所のありてにや、このひと歳はわが家にもおとづれ來ず。神のみそのに眠りたまへるなれなれば、今は怨みもなやみもなからむ、われも又、人をばうらまじ、にくまじ。夜はやや更けぬ、點滴の音もいつしか絶えたり。窓おして打仰げば、雨晴て雲はなほのこれる空に、二十日ばかりの月ほのかにかゝれり。それよ、妹がおくつきは遠くもあらぬに、いづれ眠らで明かすべき夜なり。そと庭に下りて、木戸を開きて出でむとするとき、小猫なつかしげに我があとを慕ひきて、足もとにまつはりぬ。嗚呼、なれも亡き人の愛者なりしを。物商ふ家とては一つもあらぬ閑寂のちまた。門早くとざして大かた夢の最中なるに、誰が家の玉琴ぞ、かすかにもるる十三絃のしらべ妙に、曲はかねて妹が好めりし心づくし、爪音さへいたく似かよひたるに、さては亡き人のこの世に生れかへれるにかと、思ふもはかなき心のまよひなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

春の夜なれど、更ては寺の庭寂として聲なく、碑と碑の間をたどりて、なつかしき妹が墳墓に來て見れば、

吾よりさきに、跪きて拜せる人あり。さては、夜目の惑ひにやと。踵をかへして、あなたこなたと尋ねたれど、それかと覺しき墓もあらず、めぐりめぐりて、再もとの處に出て來て見れば人すでにあらず、裏より卒都婆の文字見れば、まがふ方なき妹がおくつき、さるにても、この墓を拜せし人は……身を細めてひそかに耳をすます時、足音かすかにきこえぬ。霞を通じて其方うかがへば、朧に消えゆくそのこの姿、たしかに似し人あるやうに覺えしが……空はかきくもりぬ。またもや雨となるらし。散る花のうさを思へや。

（評）趣新しとにはあられど筆に落着あるを愛す

○歌の主

彦根　藤田ふく

悠々たる我等が樂園の一日も、今や晩霞の裡に暮行かうとして、村の暮鐘が一時に起つて、深紅て燃ゆるやうであつた山嶺の彩雲も、次第に淡らいで、白く、青く、遂には黒くなる、恰度迴かの麥生の方に、百姓の黒い影が二つ三つ宛歸つて行く、



千代の松原（賞外）　福岡縣飯塚樹山圭枝

柴のとぼそに父母が、
今や吾等を待ちまさん、
清けき小川青き山、
思へば容姿目にも見ゆ。

はつきり澄み渡つて、草村に鳴く鈴虫の聲よりもなほ涼しい唱歌の聲が聞える、恰度行手の松原續き、其の些し右に寄つた藪影の農家から出て來た一人の少年、武雄といつて今年漸と九つ、歌の主はそれてある。

夕暮、煙が家々から颺るとき、いつもあの清い歌の聲を聞かぬことはない、それは決して悲しい調子ではなく極活潑に歌ふのであるがそれを聞く度に自分は非常に悲しい、泣きたいやうな何とも知れぬ感慨に沈むのである、がそれは自分の境遇上からでなくて、其の歌の主に對する一片の同情とでも言つてよからうか、彼のやさしい容姿と、心ばへには、實に哀れな歴史を持つて居る、武雄の實家は此處から彼の佐和山を越えて其先の村で、今は父母も兄弟もない、便りない孤兒て、今はお祖父さんの處に養はれてゐるのである。

今や我等を待ちまさん、

無意識に繰返すのであるが、武雄は待たる〻父母を失なつてゐるので……あ〻其歌を聞く時、お祖父さんの耳にはそれがどんなに響くであらうか。
あ〻、自分は最早其先を聞くに堪へぬのである。
稻葉そよぎて秋風の、
あ〻、又哀れの一句が……。
(評) 意思悽々

○趣味

京都　山本ちか

明くれば明治三十九年一月一日、朝は未だ暗いのに居殘りの寄宿生はもう目を覺ました、今朝は手水のつかひ方から何も角も殊更に改まつて居る、先づ誠心とめて先生への挨拶、親愛あふれて友達への御祝ひも濟み、樂しく忙しく笑ひ興ずる中、早や通學生の友達は美しく着飾りて校門を入り來る、九時のベル鳴れば、祝賀式が始まるとて一同校堂に集まる、君が代の唱歌諸先生の訓話いとも樂しく嚴に終りを告げたり、是よりは妾等の自由の遊び、飛ぶが如く皆々裏の運動場に出て、思ひ々々の遊びさも樂しげなり、されど吾は如何せむ、此場所と此時間とを妾は如何ともする能はず運動場の群を放れて寄宿舍に歸り、只机にもたれ心に新年を祝ひ居たるのみ、忽ち一人の友歸り「あなたはなぜ裏へ行かないの」と「だつて遊ばれないんですもの—」と妾は覺えず涙含まずには居られなかつた、あ〻故郷の父母は如何に此新年を祝つ〻、又、遠き都にある我が身の上を思ひおはすらむ、誠や我が父母は百里を隔つる山陽の田舍にありて、吾に對する愛は如何にあふれ居らむ、然るにあはれ我身は如何なる不幸の不具者！左足の短い！あ〻吾が幼少の時代は、小學校へも通ひ得ず、父母の膝下にて普通教育を受け、貧しき中よりも父母の慈にて今は都に上せてもらひ、此學校にありて師の君より情深き中等の教育を受くること二とせ、不自由な足に休まず、たゆまず、教へを受くること如何に趣味多きや、吾は此趣味の中に生活せむやと思ふなり。

野外に樂しむ友に加はる事も得ない、ローンテニスの面白き群に交る事も得ない、一人侘しく裁縫のテスリにより、遊歩の時間を費しかねて居るは吾のみ、一年中朝に、夕に、日曜に啻室内にのみありて秋の紅葉狩り、春の花見、唯一人寄宿舍に殘され淋しく感ぜしこと幾度なるかを知らず、あ〻我が苦しみも、悲しみも天の神は知りおはすならむか、

さりながら此テニス此散歩以外に、神のしろしめす一つの樂しみを得て居る、あ〻そは趣味なり、趣味の向上を樂みて一生を終へむとすなり。

(評) 文また生硬なりと雖眞情の吐露せるを取る。

○はした女

三重縣　山田ひさ子

今宵妾は此の寂き六疊のいぶせきはしための部屋にひとり袖うるほしぬ。

障子の破れもれくる月は、霜夜に氷り、すごきまで冴え渡れり。更けぬれば人は皆夢路を辿りて、塵の世の聲聞かん樣もなく、茲には妾たゞ獨りなれば、思ふさま泣きて、哀れなる妾が半世の歷史を語らばや。あはれ、はしための妾のいかに幸うすき事よ。母も弟もありながら、母とも弟とも云ひ得ざる妾の身、あゝ不運なる妾の身の上の、悲しとも悲しきよ。

父！妾の父上は如何なるお姿にておはしけむ。妾がひとつの時、妾の微笑むさへ御覽なくあの世の人となりましぬと、あゝさても戀し父の上よ！。されば母は妾を携へて生家に歸り玉ひしが、まだ年若き身の此まゝ深山の埋木たらむも惜しき事なればとて、緣家のすゝめにより、さる家に涙をのむで嫁ぎましぬ。――かくて妾は伯父に預けられしが。あゝ其後の事は語るまじな。妾が幸うすき運命を……。

あゝ思へば身の毛もよだつ樣なり。幼な心にも亡き父上の跡追はんとて、お墓地のほとりに、幾度となく、嘗したゆたひては、手を合せつ……あゝそも幾度なりしか。

かくて妾は伯父の家に養はれて人となりぬ。さるに十五歲の春、あはれ其のたよりともすべき伯父にさへ死に訣れて、今は如何ともなすすべもなく、明日を待ちて餓死すべき身とはなれりき。さるに無慈悲なる伯母は我れを賣らんとは爲すなりき。聞くもいたましき浮き川竹に身を沈めよとのたまふなりき。あゝ其時の妾の心やいかなりしか、永く御厄介になりし御恩は返へさればなられどさる事のいかでうけがひ得べき。妾は決然業成りて後御恩は返す事として、ある夜ひそかに一封の書狀を遺して家をぬけ出てしが、思へばそは一時の夢なりき。女としてあるまじき雄々しの擧動もそは一時の空想にてありき。

思ふ事皆心と違ひ、失敗に失敗重なりて、遠き望もうたかたと消え、高き志も臻しほたく煙と失せ、限りなき恨と果しなき憂と、云ふべからざる艱苦とを負ふ身となりて此處松井樣の上女中として使はるゝ身となりぬ。あだし浪にうらぶれの身となりぬ。あゝ亡き父上の聞きましたらんには如何ばかり歎かせ玉ふらん。あゝさても不運の兒よ。さても今よひは如何なる夢路を辿り玉ふらん。聞く生母には、一人の男子と二人の女子ありと、さても今よひは如何なる夢路を辿り玉ふらん。

涙はそゞろにわき出てゝ、又止むべくもあらず、月はいつしか西に傾きて、夜はいたく更けぬ。いざさらばと明日の日を思ひて、床に入れば、胸は千々に亂れて寢れらん樣もなし。

折りしも空かけり行く五位鷺、一聲高う西に鳴きぬ。

○海老茶袴

筑前　田島淚舟子

自慢にはあらざれど、我は劍とりもちて、白刃の間を侵し、雨霰と降りくる、彈丸の中に男みて、君の爲に花々しく跳れたる、勇ましの武士にも似たる哉。噫、懷かしきは孃樣、風の日雪の日蚊田と志賀見の一里半を、共に通ひて師の君の敎を受け、日每孃樣の學びの道は進み行けど、かなしや、我身は麗しかりし、海老茶の色はあせ、月日と共に弱り行くのみなりき。思へば四年の星霜は夢の如く、荒津山上の爛漫たる、櫻花の下にたゞずみて、畫の如き福岡市中を眺めつゝ親友靜帆の君と詩を合せ給ひ、あるは雜草もえ出づる春の野に蓬摘み、或るは博多停車場のプラットホームに立ちて、青春の高き理想を抱きつゝ上京せんとする車窓の友、春江の君と別れんと、白きハンカチーフを高く高く、打振り給ひし時、あゝ其度々我は一度も孃樣を離れざりき。吁、忘れじな、松ヶ岡の遊戲會孃樣は小高き芝生の丘よりずるくとすべり給ふ其刹那我はかたへの木の枝にかゝりて大負傷をなしぬ。あゝされど慈悲深き孃樣は我を捨て給はずして、手厚き治療を加へられき。かくして二年あまりを過ぎぬる頃より、我身は日一日と弱り行きて、昔の面影をもとゞめずなりぬれば、孃樣は學びの庭に友のそしりをうけ給へど、たゞ微笑みて心にかけ給はざりき。吁されど、其微笑の裏には、得たへぬ悲しさの含まれてありしか、人知れず我を涼しき御目にあてゝ、忍び泣きせられし事もありき。孃樣は涙をのみても我を愛し給ひしなり。富貴の孃樣に仕へし、海老茶袴に比ぶれば、我は如何に幸多き事よ。校中にても第一の秀才と賞められ、其上にかゝるやさしき女德を備へ給へる孃樣と、四年の春秋、

共に學び共に遊びて、今此に身は破れ、色變り我赤心をささげ盡して雖れぬれど、姫樣は他日昔の苦學を忍ばんとてか、見る影もなき我をちりあくたと共にし給はずして、此處なる長持の底に秘め給へは、我は幾年の後と雖、折々はやさしき姫樣の御手に、抱かるゝならん。噫、我は流き跡を以て、數ある同名の海老茶袴の中にても、我歷史を語りつゝ、ひたすら姫樣に幸あれかしと祈りてあるけり。

○斷腸

香川縣　紫霊女史

君がかんばせは春のしのゝめの如く、君がゑまひは旭に匂ふ山櫻花のごとかりき。我が心は君あるがため樂しさ言はん方なく、常に春の思ひありき。然れどもそは實にはかなき現の夢なりき。あゝ胸にのこれる面影はとはに變らねど、復再、君が美はしき姿を見るべしやは。我が心は暮れゆく秋の思ひしてあはれ悲しさたとへんにものなし。

花は薫る春の山路に、君と遊びし時、いかでか知らん今日この頃一人斷腸の涙をそゝがんとは。月は清き秋の野道に、君と歩みし時、あはれ思ひやかけし今日この悲しき對面なさんとは。

いゝいゝ露しげき墓前に伏して、得踊らで空を仰げば、星一つ梢に見えて、夕風に木の葉散ること雨の如し。

○我望

四谷　しらぎく

富貴はうかべるくもの如しとは、むかしの人のいひし言葉、ほんにそれにちがひない、地位や財産がいくらあッたッて、心からのたのしみがなく、人目を忍ふ涙に、袖やたもとのかわく間が、なかッたらそれこそほんとうに、つまらないだらうとおもふ、

だから私は、神樣の作ッて下すッた運命に、滿足して決して〳〵、身分不相應な、希望は持たない積り、只あのお年よッた母ア樣、わたしの事ばかし思ッて下さる大事の〳〵、母ア樣に一日もはやく、らくなたのしい月日を、送るやうにしてあげたい、それがわたしの終生ののぞみ、……

吁、金殿玉樓に住んで、錦の着物を着、大勢の腰元にかしづかれてくらすよりか、たとひ月のもれるあばらやでもいゝから、眞の〳〵、家庭の幸福といふ事を、味はッて見たい

○よしなし言

岩代國　若草子

妾は世に便りない一人でありますが、また誠に幸福な身の上だと信じて居ります。今朝もふとこんな事を思ひ浮べたのです。

目覺の鐘がまだ鳴らぬに、いつもよりか障子が白くなりましたので、床を出ましたが大層冷えますから、外を覗いて見たらオヤ〳〵珍らしく雪が眞白に降つて居ました。妹の顔を見ましたら、誠に心地よくすやすやと睡つて居ます。そつと時計の鎖手をとめて、勝手に朝餐の仕度を始めました。間もなく、與て、と申した所がホンの障子一重の隣のお母樣がお目覺になりましたようですから、お湯をとつて上げてうがひをお進めなどして居るうちに、夜は全く明けはなれて、朝餐の用意も出來、妹も心地よく起き出て、まだやう〳〵十才ですけれども、掃除、踏立などのお手傳をしてくれます。夫から妾は軒先の雪を拂はうとして、庭の方へ出ましたら、ふと目に止まつた物がありました。

何所も彼所も奇麗に眞白になつた中に、南天の一株が雪の中から美しい眞紅の珠を列ねて居ります。其所に一羽の雀が實をつまうとしてか止まつて居ります。可愛相に連がないのですもの。しかし便りがない、助けのない一人ぼつちは、何でも人手にかゝらず自分でやらなければならぬといふ堅い決心が起るものだ。所謂獨立自營といふ世の中の生きた學問‼經驗が得られるもので、之が他日の大成といふもをこがましいが、美しい結果を得られるだらうと思ふのです。妾は便りのない病母と幼妹との間にあつて、苦い辛いそして末樂しい學問をして居るのだと思ふと、何となく心が生々して來るやうに思はれるのです。が、せめて唯一目お父樣に……と思ふとツイほろりとなります。

オヤもう御飯時になるんでしたに……

○光!!

芝區　吉田かつ子

東の雲が刻一刻と變じて、白となり、黄となり、はては紅色となつて、忽ち數千の金線がパッと空に擴がつたと思ふ間もなく、ギラ々々と、日光が東の山の端に現れて、今まで暗黑の幕に鎖されて居つた下界を徐々に射初めた、其光!!げに崇嚴の光である。

霜凍れる夜半、三五の月の皎々として、窓下の小石も數へ得るまでに、

殘る隈なく照し込める、其光‼實に平和の光である。旅順海戰に於ける、彼我交錯のサーチライトの光りは、勇ましくも又、淒き光である。黑白も分かぬ、眞のやみ夜、逆卷く波上に漂ひて、船路を失うた航海者が、遙かにうち見たる燈明臺の光は、あゝ、そは其れ希望の光ではあるまいか……然り、そは希望の光である、何故？他なし、他なし、航海者の運命、行方、皆之に依つて定まるからである。迯べ來り、書き來つて、此處に及べば、あゝ。實になげかざるを得ない。此の身が古鄕を去つてからは徒らに老て。已に、四度の暦をくり返したのである、されど依然！暗黑中に漂ひつゝあつて、求むる船路は見當らないのである。年は待たぬ、年は待たぬ、明治三十八年は最早、過去のものとなつてしまつた、あゝ。それにしても、我が燈明臺の光を望むの時期は、何時？如何なる處であらうか。

○名殘の一夜

神奈川縣　中村紫翠女史

都へ旅立の日もいよ〳〵明日と云へる今日、色々の用意などしつる折柄、父上の來給ひて明日はまだきに出立つべきを、いぎたなく寐過しては汽車に後れん、とく床につけよと宣ひければ、さらばと急ぎ支度整へて床に入りしものから、あたら眼さえて、得寢ぬべうもあらで、又今更のこと、こし方行末さては、別れの悲しさなど思ひ出だされつ、愈眠のさへ行くこそせむすべなけれ。思へば悲しきかも、十あまり六とせの間、姿をいつくしみ姿をめて給ひし、慈深く情厚き父母の君に別れて、やさしき御顏も、なさけこもれる溫き御音の葉も、しばしは拜まむよしなく、聞くすべなからんなど思はれて、あはれ別れざらましかばと打かこたるゝも、子を思ふ親の心を思ふ子の、一しほつらき心かな。さるを父母の君のみならで、なつかしき我弟と愛らしき我妹にはなれ、親しき我友と袂を分ちて、獨り寂しき旅衣、遠き都路に出て立つべき姿が身上思へば糸ゆふゆらぐ春の朝、暖かき春風にあくがれ出てともに蝶を追ひ蝶に追はれ、花をあさりし我弟妹と明日は別るべきか。月かげあかき秋の夕べ、蟲の音にあはれをとゞめて、共に影にしたがひ影にしたがはれ、野邊にそゞろありきせし我友と明日は袂を別つべきか。別れは逢ふの始めぞと、言ひけんことを思へば、少しは心ゆくものから、あはれなつかしき我弟妹の顏を見、親しき我友の聲を聞かむ折は、そも何日なるらん、行末の事まで思ひ出だされて、胸かいむしらるゝ心地こそすれ。

おのれ生れて學びの道にうとく、なべての藝につたなきに、都に出てなば、身を謹しみて業ないそしみ、やがては名をあらはし身を立てよと、我行末を思ひはづらひ給ふ、父母の君の深き惠みよ、あつき情よ、何にかはたとへむ、何にかはくらべん。君が世に時めく折を今より待たむと喜ぶ友の、血あり淚ある言の葉を聞くも、はづかしく嬉し。哀れ錦を着て古泉に歸るてふ古の物語を、おのが身にもてはやされん時はいつならむ。思へば血湧き骨なる心地して、空はいとよく晴れたるに、我袖は、かわくべうもあらず。

備後　口　な　し　子

わ　ら　う　ち　（賞外）



近江愛知郡　響　菊　千　代

○出京の前後

「さあ、露ちやん早くお寢みよ明日は早いのだから」と、母樣の仰、早速床に入つたけれど目がさえてどうしても寢付かれない、そして何やと胸に浮て來て、まるで、走馬燈を見る樣だわ。仲好の春子さんや芳子さんに、明日からはお目に懸る事は出來ない、と思へば戀しくなる。明日からは戀しい姉さんと連立て學校へ行くのだ、と思へば又なく嬉しい。

春子さんは家が貧しくつて弟妹が多いから、仲々修學等思ひもよらない、小學校も無理で終へたとの事、芳子さんはお父樣がなくなられて、母樣はほんとのでなく、後妻で醫者だつたとか、女は學問はいらない小學校で澤山だつて。

明日朝停車場へ、父樣も母樣も送て下さる、春子さんも芳子さんも、そして「夏休暇には早く歸て頂戴な」と、おつしやる、私何と日はうか知ら、キツト悲しくなるだらう、けれど泣ては汽車中の人に笑はれるだらう、そうだと私恥しいわ。

等いろんな事を思つて居ると、三時を打た。

出發には四時間しかない、嬉しい樣な、悲しい樣な、あゝ、どうしても寢付かれない。

○あゝ兄樣　　芳子

今日は戰死遊ばした兄樣の御命日ですから、御佛前に御花をそなへやうと、木鋏片手に、庭におりたちましたけれども、もう秋の末で、此間まて咲きほこつて居つた花畑の秋草も、皆な枯れてしまひました、ああ人もうか／＼して居る間にこのやうな秋がくるのでせうか、さうして兄樣は、もう秋になりておしまいなすつたてせうか、まだ／＼人生の春、前途有望てしたその兄樣が、もう此の世の中に入らしやらないとは、どうしても思へない。思ひ出せば、去年の春、庭の櫻の咲ほこつて居た頃、軍籍に身をおく兄樣は、毎日召集令のくるのを、今日かあすかと、まちくらして、おぼろ夜のそゞろあるきに、十八番の人生五十年功なきを耻づと吟じては、櫻の下に腰かけて、そばに立つて居る私に、ひでさん、僕も早くこの櫻のやうに、滿洲の野で花をさかせて、そうしていさぎよく散りたいね、とよく仰せ遊ばした、程なく櫻も散り初めた頃、兄樣は召集されて、今出立遊ばさうといふその時、あの櫻の木の下で、あゝ實に愉快だ、僕もおまへのやうに、いさぎよく散る時が來た、しかしおまへは今年散つても來年又咲いてくれよ、僕はもう滿洲で散つたなら、二度と歸らないが、とおつしやりながら、まだ咲き殘つて居た小枝をポケツトにさして勇ましく御出立になつた、あゝその櫻は今年もかはらず咲きました、さうして兄樣もまだ御丈夫てした、私が二三輪御送り申上げた御返事に、あの時の櫻はまだ僕のポツケツトにある、程なくこの櫻とともに散るつもりだ、との御手紙てしたが、兄樣の御言葉はむなしからて、さみだれ降る六月なかば、常にもさびしき夕まぐれ電報一の聲におどろかされて、初めて知つた兄樣の御戰死、あゝ兄樣は櫻のやうにいさぎよく散つておしまひなすつた、あゝ庭の櫻は、兄樣の仰せの通り又來年もその來年も咲くてあらうに、

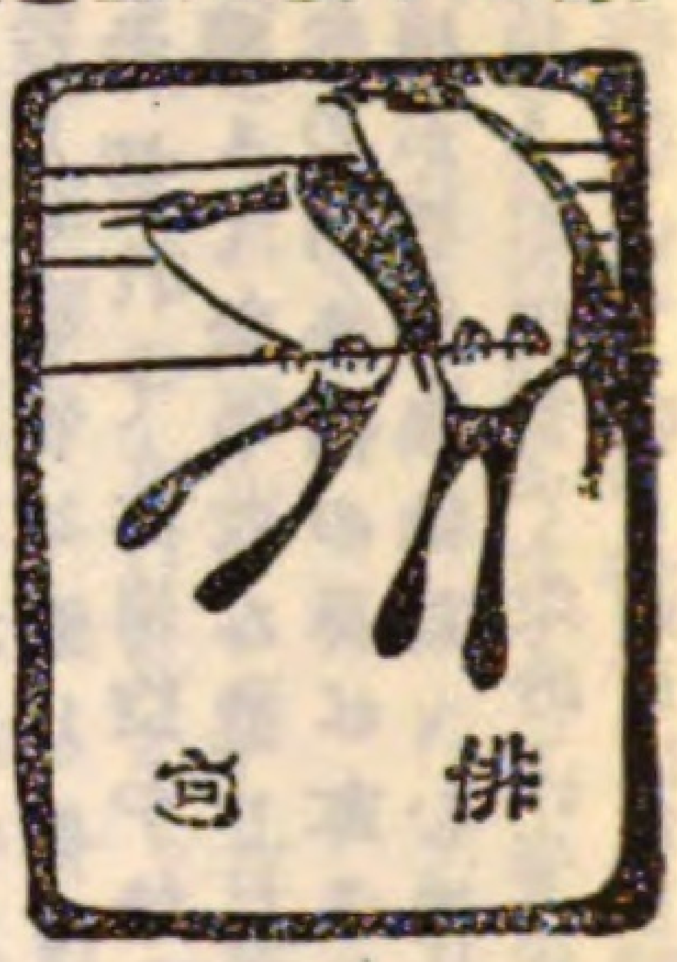
今日も今日とて、兄樣の中隊は凱旋の當日、あゝ兄樣はもう何年たつたとて御歸りにはならない、

わづかに咲き殘つた菊の花二三本、手折つて立ちあがつた、折しも若な知らせる花火の音、かすかに聞こゆる萬歳の聲、あゝこの盛んな歡迎を兄樣は何處で御受けになるのであらうか、

○お土産　　伊勢　守岡みちを子

『姉樣。追々寒くなりましたが、冬休が近くなりましたので、私はうれしうございます。姉樣のお歸り、お正月の遊び、私ほんとに待兼てよ。姉樣また色々のお話して下さい。そしてお正月には歌がるたなれ。私にもお話がたんとあるのよ。』明けて十二になる妹の玉ちやんが寄こしたお手紙。廻らぬ筆にも眞心がこもつてある。海老茶袴を裾短に着けて、ストツキンクに下肢を蔽ひ、油氣の無いなげ髮に紅のリボンを施した姿までが、今明々と眼先に散らつく樣て。自分の妹ながら玉ちやんは信實に優しい子だわ。妾の歸省を夫程迄に待つて居て呉れる。それも其筈だわ。天にも地にもたつた二人限の姉妹中、其姉の妾が此年月を、懷しい故郷、戀しい父母の膝下を離れて、遠い／＼此學び舍に文の山路を辿つて居るのだから。それは雨の夜、雪の朝、さぞ玉ちやんは淋しいだらう過ぎし夏の休に自家の裏の泉水の端で、二人がハンモツクに乘つて遊んで居た時も、『姉樣は何時卒業なさるの』とさも待遠しさうに尋ねた程だもの。それて妾はかうして居る中にもいつも玉ちやんの事を思はなんだ事はない。決して／＼只の片時も。その優しい、懷しい玉ちやんに逢はれるのも、もう四五日だと思ふと心もいそ／＼嬉しくなるので、お土産には何が好からうなどと、只々樂しい想像に包まれて、自修も殆ど手に着かん程なのです。

妾は、今短檠の下に玉ちやんへのお土産にすべき肩掛（ショール）を編いて居るので、模樣は明年の御題に因んだ新年の河。見れば見る程美しい。玉ちやんにはよく似合ふてせう。



巖谷小波先生選

特別第一賞

三重縣阿山郡上野町農人町　奥瀬かすみ子

春雨に京の土産をぬらしけり

【評】着想先以て新しく而も中七に無限の妙味あり老手々々

特別第二賞

府下北豊島郡王子村四三一小泉方　朴　蓼子

春蘭に曾我物語り讀む灯哉

【評】春蘭の易からぬ題と曾我物語とはよくも讀み合はせたるもの哉

特別第三賞

福井縣立福井高等女學校　高柴小靜

梶が宿若狭萬歳訪づるゝ

【評】梶が宿とよく見付けて若狭萬歳とはさてもよく取り合はせたりな

天　横濱市西戸部九九九　吉川英子

歌占のわろきを流す春の水

【評】詩趣溢るゝばかり

地　越後新發田町上田所町吉田方　交野なほ子

獺の砂をまくてふ柳かな

【評】奇想々々

人　武藏　琴子

春雨や琴も娘も借りにくる

【評】人事俳句中の粋

秀逸

石に踞して寒き枯野の夕日哉　陸中　黒澤美津子
梅一輪春をうごかす微風哉　上總　木内春子
白梂のほろ〳〵散るや鑿の音　小樽　岩谷綠子
梅咲くや色紙もとむる假名詩人　仝
寒牡丹曾我の小家は靜なり　仝
野に低し雪となるべき雲の脚　下野　木村しずゐ
毛絲干す山茶花日和つゞきけり　越後　橘芳子

遺羽子の二人となりし日暮かな　越後　藤原黑子
白椿小高き塚に香りけり　下總　小泉つや子
御國生や梅ちりかゝる籠の鶴　豐前　波多江よしみ
痩馬の石につまづく枯野哉　信濃　きく子
厭きれて夕日は海に落ちにけり　越後　藤原直子
銀屛に獨り侘む餘寒かな　越後　渡邊まさを
蜻蛉や夕日に高きはれつるべ　上總　小川志奘子
晩鳥一羽啼かで過ぎ行く枯野哉　石狩　大澤八重子
焚く飯の煙や餘寒の臺所　相摸　伊藤ふく子
鶯に琴爪外すをんな哉　深川　山下みの子
青樓の畫靜かなりいと柳　千葉　森久子
見てあれば白帆生だす霞かな　群馬　千翠子
春寒や炭のつきたる猫の顔　東京　黑ゆり
柳けぶる江南の村の入日哉　京都　吉川花愛
金にした娘見送る枯野かな　下總　春溪女史
鐵駒百馬の足から霞みけり　千葉　伊藤道子
うら枯や野寺に通ふ道細き　福井　白靈女史
梅生けて歌なかりけり乳母が宿　淡路　伊藤綾子
梅白し月の丸さも十五日　山口　奥田窓月
梅咲や名のありさうな野の流　四日市　石垣ひで子
馬屋から馬も顔出す初日かな　石川　大鐘菊枝子
月浴びて叩くものあり梅の宿　相摸　名木山水聲
人よりて河原につくるどんど哉　靜岡　野崎道子
紅梅の艶に過ぎたり寺の庭　熊本　宗なを子
淀川や初荷の船に吹き流し　岩代　丹治はるみ
糸切れて本來空や逆磨凧　橫濱　田中幸子
簪もて鶯の餌を盛りにけり　赤間關　宗竹
松の内小猫の鼻に紅さゝん　豐前　勝間田すま子
梅が香や振袖たゝむ奧座敷　下總　春鶯女史
仙人が折焚く柴のけぶりかな　筑後　白仁しげ子
梅咲いて鳴らぬ日はなし神の鈴　栃木　松本玉仙女

青柳白帆の並ぶ日和かな　下總　芹澤文
磨ぎへらす斧にも見ゆる日永かな　伊勢　廣瀨爲子
緞纈や紅ほの見ゆる袖の裏　橫濱　出壽子
鐘聞て足早になる枯野かな　麹町　小島みづゑみ
迷ふても櫻の中や春の月　上野　江原芳子
春の水平和の里を流れけり　備後　池田都子
郵便の聲にはなるゝこたつ哉　信濃　佐藤安子
餘寒かな髪剃りかれし大江丸　尾張　渡邊霞石
朝月に梅折る女うら若し　越後　春江子
春の水香も有りさうに流れけり　志摩　清水波子
跋魚つりの竿斜めなる夕日かな　淺草　天流かつ子
梅の庭人の名を呼ぶ鸚鵡かな　備後　本多豊子
小春日や暮るれば寒き松の風　栃木　松本千代子
春いまだ詩集に寒き夕日なか　豐後　花山琴子
夕月や琵琶盗み聴く小柴垣　紀伊　中西臺女史
未だ水の奥齒にしみる二月かな　下野　池澤湖春
輪飾や厩に近き釣瓶井戸　越後　金藤ふみ
測量の旗上りけり春の山　豐後　平山瓦子
鐘樓に夕日さすなり冬木立　大和　利子
散る花を懐紙にうけぬ歌使ひ　もしほ子
病癒て庭の石踏む春の風　上總　幸子
梅さいて貸家の札を除きけり　鳥取　上山千重子
朝寒や水をはなるゝ鷺の脚　熊本　鶴の聲
梅が香に圍うす暗き灯哉　福岡　雜賀蝶衣女
春たつや京の紅屋の店びらき　大阪　季子
身一つや田螺の蓋も明けの春　下野　吟花女史
花片を其まゝ晴衣疊みけり　北豐島　緋百合女史
春雨や茶園につゞく桑畠　札幌　杉山よし子
山里やきこりの聲に水車　常陸　川島かく子
小蛇まで椽に上りし小春かな　津市　橋はな子
木枯や石にからびし蕊　松江　みつ子

一座皆落花に秩つられけり　長崎　松岡鉛子
夢の如白帆かすみて春の川　栃木　木村みしろ
大男ひろれの顔に夕日哉　廣島　すゝき
きゞすなく燒野の月や夜半の松　廣島　兒玉靜子
犬ころが土間かりに來し夜寒哉　きよ子
冬木立門のかけ札あらはなり　加賀　松原みつえ
囀や閼伽井に殘る冬の月　廣島　白梅
野施行に狐喜ぶ枯野かな　奈良　松島鐵子
陽炎や草紙ほしたる梅の枝　福岡　關ちくし女
暖たかに巡禮の群通りけり　京都　安田はつ子
廢兵に雛貰やしなふ媼かな　本郷　町山枯草
靜かなる雪の降る日や藥をうつ　和泉　天堀紅梅
泡ふいて蟹の行方や春の風　信州　清水りん
白梅に微風薫ずる社殿哉　兵庫　柳田のぶ子
梅が香や下ゆく水に星のかげ　下總　野々宮せい子
大紋のうしろ姿や松の門　上毛　眞砂惠子
古鍋のなかに若水若菜哉　上毛　和田すゑ子
花見舟花見る人に見られけり　常陸　酒葉つれ子
庵寺に女御物申す時雨哉　新潟　鞠子
何處やらに水くむ音の霞哉　下總　小島芳子
若水に釣瓶古びし恨かな　遠州　伊藤花子
藪入や阿察等县下に語るらく　京都　生咲みどり
歌人の嵯峨野に暮れぬ春の月　小石川　飯田ちか子
白梅や春の夜ひとり歌机　小石川　田中芳子
若水をくんで雀を起しけり　下總　長谷川しん子
眉白き牧師も來たりクリスマス　陸中　黑澤美江子
船の灯のまたゝく宵や朧月　備前　松本おちば子
燈籠の笠に落ちつむ椿かな　廣島　森川道子
若水や星こぼれたる井の中　出雲　紅子
筑波根の表は月の時雨哉　下總　武田たき子
遠退けば霞の中や山の坊　下總　渡邊きわ子

外套のショールいたはる吹雪哉　千葉　大塚よし子
草の戸や蝶の來る日は客もくる　横濱　花舟子
秋の夜やほつきりたれし櫛の音　横濱　安田桂子
土筆つむ籠の小さきうらみ哉　南總　小川幸子
紅裏の袖より落ちし手鞠哉　上毛　すみれ女史
元旦や釜千代よぶ朝ぼらけ　熊本　岩本すゑを
落葉ちりし池に小春の日和かな　岡山　おちば子
凩や野狐鳴きて月細し　津市　吊花女史
飛石は草にかくれて虫の聲　筑前　副島吟風
失戀の寂しき秋や虫の聲　廣島　白露
らちも無く撞き終りたり除夜の鐘　靜岡　早苗女史
飛こんで時雨をふろう舟の猫　新潟　小島花子
桐落ちて虫の音サッとやみにけり　大和　榮山利子
面白くをかしく暮る睦月かな　神奈川　落花一片
暮れやすき夕かゝへて秋の鐘　神田　白鷗女史
霧はれて見れば山なり田なりけり　上毛　河内汀柳子
睦まじき一家五人のこたつ哉　上總　小川さち子
時雨ろゝや晴るゝを待て虹の影　秋國　瓢聲
立ち開くや門に乞食の夕時雨　安藝　豈子
緋鯉眞鯉春の小池に靜なり　豐後　平山紫泉子
薄氷や水仙の水淺くして　豐後　平山艮子
はなれては居れど遠らし門涼み　東京　矢部えい子
名月の庭に藁うつ男かな　美濃　白井安子
秋雨や杉に五軒の貸長家　熊本　平岡敏子
溫泉の宿や板びさしうつ村時雨　神田　小磯君江
から溪を風に落葉の流れけり　神戸　むらさき女
虫なくや荻に流るゝいさゝ川　福島　大島きみ子
名月や庭木にとまる鳥の影　播摩　雲外女史
初霜のおくや死んだる虫の籠　湘南　白荻女
鹿なくやぼたりと落つる樹の雫　東京　萩野雅子
入る月を惜みて招く尾花哉　長野　四條むめ子
笛の音の間を牛の吼る花野哉　大分　甲斐かず子
庭へ手のとゞきさうなり秋の河　神田　平田俊子

文學士沼波瓊音先生選

消息文

天

○月明の夜ふるさと人に

神奈川縣鶴見五四一番地　佐久間芳子

何となく心誘はれ候まゝ、立ちて窓おし候に十日許の月は美しう、今庭の松が枝を弓丈ばかりはなれ居り候、さし入る光の心地よきまゝ讀みさしの卷伏せて端近う水と流るゝ光を浴びて思ひをしばし遠き御あたりに馳せ候ひぬ、強き事云ひて別れまつりし身乍らも流石に人の懷かしきは。物とはなしに秋の香の我心を誘ふにや候はん。今宵をいかに過ぐさせ給ふ、月明き夜彼橋畔にさらばと放ちし我手君が手、やがて來ん五つとせの後に又取りまつるべきみ手ぞとは知りつゝも、弱き心には其夜限りの別れのやうにも覺え候て、さ霧夕霧にまぎれ行きます君がみ姿、夢かの樣に見送りては我も得知らぬ淋しき影の此胸のうちにひろごるやう覺えて、何とはなしに涙ぐまれ候ひしか。斯てひとゝせは過ぎ候ひぬ、有りし其夜の影に似たる今宵の月にも候かな。強き事云ひて別れまつりし身の今更に、其方の空の戀しうてとは云はじ、さりとも人なき欄の柱に袖まきてはる〳〵に眺めやる雲の流れも、そよ我思ひの影ならじかと。有りしに似たる月影の今宵をいかに眺め給ふ、君よ。虫の音近う、木犀の香懷かしく候。

（評）月の光に虫の音に木犀の香に亂れ亂るゝ情緒さながらに寫し得たり知らずこの宵信を得て燈下に泣かむ人の誰なるかを

地

○鄙の里より

熊本市外九品寺官舍　湖畔

零落の影になけとや此秋は師なき友なき筑海に日々をさすらふ身とはなり申候

あはれなつかしきは都にいます師の君心隔てぬ友垣の御倶にても候ふかな、露重き叢にすだく虫の音はみやこ戀しの歌となり夕に響く鐘の音は都忍べの譜となりて幽居の宵のわびしさやるかたなく候。

さて南州の片里は鎮守の山の萩かれて秋は我身と諸共に老いゆく今日を東路に希望の光浴みてたゞ笑みつゝぞ暮させ給ふ君々の御羨しさにたへず候、あはれ榮なき我運命いまはたゞ月明のおばしまに曉起の路に雲井

のかりの一聲の情に秋をゑみ居り候のみ
あゝ師よ友よ默想の其折思し召してもたまへな
失意の人の子に訪なふ秋の夕風のいかなる音にかさ
さやくと……。

（評）境遇に克つ能はずして空しく僻陬の寂寥に泣く最同情すべし余亦嘗て經驗せし所この文を讀んで感殊に深し

○かるた會に招きし友の待ちわたりても來給はねは一たび文にて

陸奧　しらゆき

如何に、御支度は出來させ給ひ候はずや。
厚板のみ帶、あまりにあたらしうて「やの字」結ぶに時のかゝり給ひてか、はた、例の御母人が御心ぞへ、花月巻のみだれ毛、一筋ごとになでつけ給ひてか。何色の袖えらみ給ひしぞなど、初春の調度美しき、君が御化粧の室の御にぎはひ、すゞろ思ひ浮ばれて候が…:門邊に待ちくたぶるゝ、車夫やいかに倦みはてつらん。おゝ、御ちぎりの時刻よりおくれたまふと、一時間近くにも候ぞよ。君、いそがせ給へや戰場今や、光あざやかなる燈火の下、二十餘りのつはものどもは、西と東に打ちわかれ、互ひに勇氣をねり合ひて、ひたすらに、勇ましき女將軍の君が、出陣をのみ、まち參らせ候。まづは、とりいそぎ候まゝあらくかしく



贈物（〻外）　仙臺小郡山みきえ

（評）からかひありおだてあり恨あり簡單なる一文豊の猶躍なも與へざる力あり

秀逸

○僻寒の地より

神戸　勝田かつ子

雪に明けて雪に暮るゝ新墾の村の物淋しさ、今迄はよき友達なりし狐さへいて來らずなり申候。たくはへの木の實はみながらの冬籠り、すさまじき雪なだれの響、窓打つ吹雪の音に、結び兼ねたる夜半の夢をさまされ、つめたき床の上に起きなほりて、昔思ふもいく度に候ひしか。最早や御地などにては、風輕き軒端に紅梅の花の笑ひ初むる頃に候はんも、二階の窓より出入して頭より足先まで熊の皮にて覆へ

る姿が姿、見せらるゝものならば一目御覧に入れて御笑はせ申度候。
さは申せたゞ一つの樂しみとも申すべき事は、父等始め近隣の人々數人、毎日曜日には必ず兎狩りに行きて、レミントン銃の筒先に、見事しとめ申せし獵物を汁にいたし、あたゝかなる内に食するうまさ實に百日の苦勞もこれ一度にて忘れ申候。硯の水も早や凍り、筆持つ手も意の如く廻りかねれば、こゝにて惜しき筆とめ申候。かしこ。

（評）そゞろ寒きを覺ゆ偉筆

○都の友に

周防　楓子

君、一つ家にこそ生ひ立たね、交りこそ僅か一とせの短かき間にはあれ。入とせを共に睦み學びし友にもまして君とわが交りは近く親しく、他の友をして姉妹にや在すと打興じ笑はれたりし事もありしが。げに傍目にはをかしき程にも候ひつらむ。學び舍の行き歸り、學校の運動場に於ける、餘りに親しみの深かりければ。されどあゝ、世は遂にわれらが物には候はず、交り僅か一とせを出でずして、榮ある、さはれ悲しき卒業式に希望の高さと離別の悲しさを「仰げば尊し」の一曲に別れてし、あゝそれぞ君とわがまた逢ひ得ざる別れなりしよ。
こゝの山里、白手拭の姉樣冠り里唄節をかしき姿が身を、傍目には幸多しとも平和なりとも見らるべけむ。さはれ一度仰ぎし希望の光明の消さんとすれどなかなかに消えやらず、唯あけくれ悶え苦しむのみにて候を、別れて二とせいや樂しき希望の道を辿り給はむ君には、唯高き理想の花にのみあくがれ給ひて妾が事ども思ひも出させ給はぬにか。去年の夏よりみ便りふつと絶えて、そよとの音づれもおはさぬはいかにと都の方を仰ぎては悶ある胸にかこち參らせしも幾度か、あはれ溫かき君がみ心より唯一片のみ便りも給はらばおなじ鍬持つ日々の勤めの寂しさも如何計りか慰められ候はむを、あゝさるにてもかくまでに溫かなりし君がみ心の姿をかくも忘れさせ給ふまてとは今日此頃の都の風はいかに冷たく候か、唯うらめしく候、されどまたなつかしき、あゝその冷たき風のみ便りだに給はらば…。

（評）怨めども慕ひ慕へども怨む切情人を動かす

○移轉を知らすとて（都の友へ）

三河　澤田つま子

年頃の願漸に叶ひて住み古りし宮古の家を後に、此程しも新しき舍に引越申候。家は清鈴川の流に臨める小丘の上の、日當りも良く、風も涼しう、わけて嬉しきは老いたる椎の樹の三株四株、庭の面に生茂り居る事

に候。何れは父上樣兼てより心懸け給ひし事とて、手狹ながらも居心地良く候、妾が部屋は南向の八疊と定り候へば、筆洗の水流れに掬ひて、椎の樹蔭に繪筆舐ばん事も難からず、咲きつゞく菜の花に路の夕を、追分節興ある少女の群に野良歸りの若者が、姉樣冠取らしやんせなど戯るゝ樣は、押繪にても見るやう、いと陽氣に面白く眺められて候。妹の望に任せ、白き雞の數多く畜はせ候しに、昨宵は桃散る畑に迷うて、今朝は花壇の菫踏み荒らし候など、なか／＼に世話焼けて候、さりながら雪の如き雙翮打連ね、紅の雞冠振りながら、妾がまく餌を拾はんと、黄なる嘴に窓の下に寄り來るなど、流石に可愛しう捨てかぬるものに候。若竹の生垣繩もさびず、枝折門に蔦も絡ねば、詩趣とやらには乏しく候へども、今年の夏休には是非優しき歌袋お忘れなく御音訪下されたく、矢作に船乘捨てて、桑畑つゞく野を北へ一里、是は是非なきお徒歩のまゝ、大峯屋敷とお尋ね下らば、畑打つ人の指にもしるき、こんもりとせし若葉の森蔭に、長閑なる雞の聲高き一棟こそ、是君待つ子の住家にて候、先は引越御知らせまで、草々かしこ

（評）通知の中自ら誘引の意溢る

花見の茶屋（賞外）　長門府村　益田子規子



○愛禽の葬式に招く文

飯田の里　葉　流　子

美知子さん！今から目白のお葬式をするからすぐいらしつて頂戴な。あの私のお室の縁の籠にかゝつてゐた、あなたのお好きな、目白がさつき死んだの。で、弟の發起で、これから御水葬にするのよ、今ね、板に小さいむくろをのせて、梅だの椿だの水仙だので、からだをつゝんで、首へリボンを結んで、小さい花輪をつばさにかけて、すつかり出來上つたのよ。これから、江戸川の美しい水に、流しに行くの、いらッしやいよ、すぐね、さうすれば、兄と、弟と、あなたと、私と、それからこのお使ひ、松やもつれて、五人で行きませう、……目白たつて、目白だつてきつとよろこぶわ……ね。松やと一所にすぐいらしつて頂戴な、待つてゝよ!!! 左樣なら

（評）無韻の詩

○雪の朝近きあたりの友の許に

大阪市　富永才子

白妙のけしき見捨がたう覺え候まゝいそぎ此文さし出し申候、無香の花を題と致して歌よまむも面白かるべく、小琴の調も亦一興と存じ取あへず其用意との居候まゝ、月子樣御同伴にて二の字ふみいで玉はずや時おくれてはあたらけしきの損じもやせんと、はしりがきして御返事伺上候。あら〳〵

（評）淸らかにして才氣ある文

○都の友に買物を賴む文

四谷　しらぎく

門田の稻葉を音信るゝ、風いとひやゝかに、千草にすだく蟲の音も、哀を添る夕まぐれ、何となく物淋しく御身、如何にと忍び居り候折柄、雲井はるかに渡り來し雁の御玉章、なつかしく拜し參らせ候、其上兼々望居りし、女學講義、御貸し送り下されいつもながら御情けの程身にしみ〳〵と、有難く存じ候、いて之よりは雪にほたるにいそしみて、せめて君樣の月の桂とやらを、手折給ひて御歸省の其日迄には、女子らしき文字の一ッも、心得おき度と存じ居り候、猶御言葉によればこ度、待宵會の詠草を集めし夕月夜てふ、歌集婦女新聞社よりあらはれし由、諺にも人のふり見て我ふりてふ事も、思ひ出でられていかにしても一讀せばやとの心抑へ難く幸ひ發行所は、御宅よりは程遠からぬ由、あまり抑つけがましうは候へ共、何卒一部御求下され度、郵劵をも添へて御願申上候、あはれ學ぶに師なく語るに友とてもなき、片山里に花の都を忍びつゝ秋のかなしさ身にしめて、わびしく暮す賤が身を、哀とおぼしてかなへさせ給はゞよなきよろこびにこそ、

先づは、御返し言かた〳〵御賴み迄　かしこ

さやけくてらせる月の光をよすがにて

賤が女

なつかしき

利子樣

（評）別に趣向を立てず自然にして筆つき穩なり、飾りたるよりは斯るがなつかし

○弟の許へ

上毛　月光

御手紙くりかへし〳〵拜見致し候其許の心のほどもはかりかねてひねもす案じくらし居り候ひしをようぞきゝわけ給ひしぞ思ひ止り給ひしぞ年はも行かぬ其許を學びなかばにして片山里の校内に敎へのむち取らせては叶はぬ家の樣其許にもさぞや〳〵口惜しと思ひつらん思へば我が身の不甲斐なさ天地の間に只一人の弟の敎育をだにしかぬるときゝまさば亡き御兩親のいかは

か〻り御無念に思召しつらんされども〳〵うつりかはる世の樣につれ日々にうすらぎ行く人のなさけにすがらんよりはとの姉の心にて候何も定まる運命に候へば世の困難とふるひたゝかひ名をあげてこそ眞の成功とは申さるべけれ殊に幼少より秀才のほまれ高かりし其許申までもなき事ながら世に恐ろしきは失望てふ魔神にさそはれぬ樣いたされ度之のみ願ひ上げ候春とは名のみ吹く風肌寒う候を心して御身いたはらせ給ひてよ

（許）文を飾らずして人を泣かしむ

○旅より

北豊島郡　朴　蝶　子

第一便

旅に暮れて一夜宿りし奈良の宿太古に
似たる廟の雨哉

小雨しと〳〵と旅衣、紅梅漸くに色あせて櫻やう〳〵と咲初めし奈良の宿に入りて候。夕飡をへしばしのつれ〴〵を欄によりて太古の樣なる雨に見入りて候花の香秘めし風しめりて高塔雨に淋びみ堂色あせてありし榮華の面影今更に悲しうも轉た懷古の念に絕へず候よ、さても淋しき〳〵廟の雨にも候かな。

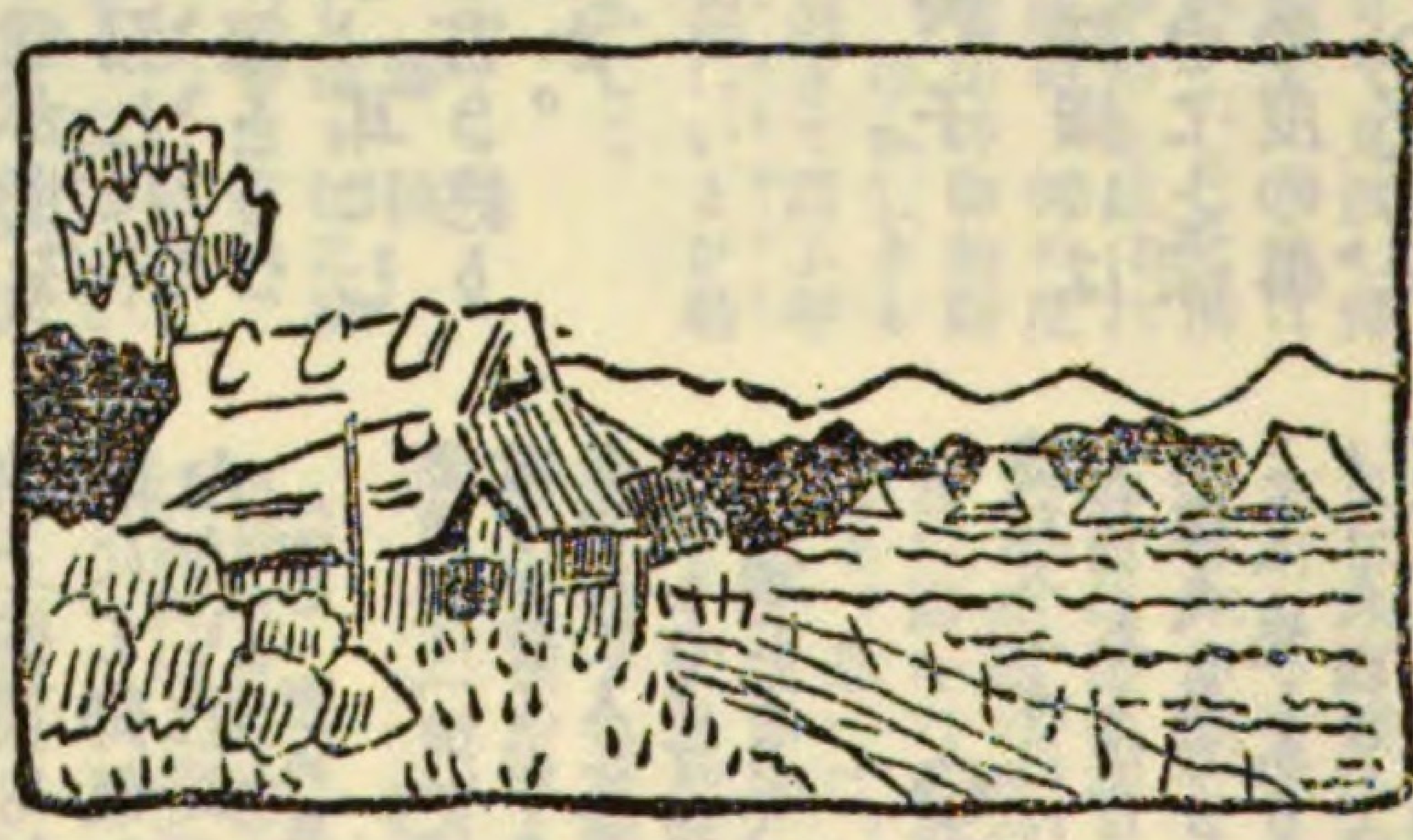
第二便

うらぶれて京に宿りし一夜さの君に送るの戀歌もあ
らじ

柳櫻をこきまぜて流石は春の洛陽なりけり。旅衣めぐり〳〵てまた京に一夜を宿るの身となりて候。窓排せば朧月絹もてつりあげたらん樣に早櫻の枝に影淡う、吹く風花の香亂れて、都の街々は朧に打ち霞みて詩興そゞろ、筆とりてすら〳〵と末は誰が手、窓よりつと大路になげしは此の歌に候。

（許）濃艶

田家（賞外）　播磨美嚢郡　津根美子



○雪の日に友の許に

因幡　天　野　清　子

すさびにすさぶ木がらしの音、止みつと思ふもなくヒラ〳〵と早くもふり出てし雪に、野山は等しく、佇めるひぢりの如く、淸らけき冬の衣をまとひ申候そは七日の夕べの事に候ひしがこゝに幾日、今日に至るもなほ日のみ光はあふぎ得ずして、埋み火の傍に、古き〳〵物語の卷、くりかへしてはよみ居り候。御地は早や梅もほゝゑみ候ふなるべし、さても彼方は、羨ましさよと南の國を遙に、想ひやり申候。

さはれ雪より出てゝ、雪に入る月影を見む時、はた又旭の光、うら〳〵と、ましろの國を照らさむ時、うすくれなゐに世を匂はせ日の沈まむ時、あはれ、いかばかり我が因幡の淸く尊く美しからむと、今より、樂しみに待ち居り候。あゝ又すさぶ雪よ、汚れし我が世を埋めて、新しく望みの都建てむとの、神の思召しにや冷えにひえ果つる指先を火にかざしつゝ、又筆とりつ又おきつ、日本海のむせぶが如き荒波の音を、耳にしつゝ梅の唇まだかたき〳〵丸窓の下にて之を書き終り候。あはれわがこの文も雪に延着となるらむか。

（評）莊重の影を認む

○試驗に落第せし人に送る

下都賀郡　川島輝美子

百千鳥心も空にうきたつ此頃承はり候へば御許樣にはとかく御もの難かしう御籠居のよしあるまじきことと深く〳〵御案し申上候兼ねての御性質にては此の度の事御氣に懸らせ御沈みがちなるも御尤と存じ候へども只試驗の成績のみが御勉學の御目的にも候まじことに此學期には御病氣がちにて御缺席の數も重なり候由知る程の人は御無理ならぬ事と察し申すべく候さるをあまり御心痛められまた御いたづきなど引出し給ふやうの事にてはいまだうら若き御身もて遙に漕ぎ出て給ふべき世の海をいかに渡り給はんとの思召にか失敗は成功の基と古の人も申候へば此度の恥辱は必ず此次の榮譽に替へんとの御心もて更に御勵み遊ばされさばかりの事に御氣を挫き給はぬやうにと念じ上候くだ〳〵しう申上候要も無之候私の庭の櫻早や咲きそめ候へばその蔭にて御氣を晴し遊ばされてはいかゞに候や御招きかたく〳〵思ふまゝをかくなん

（評）慰め且つ勵ます友情何ぞ切なる

書簡文は「情」に重きを置くがよろしいでしようか、又は「簡」と云ふ方に重きを置くがよろしいでしようか、御示しの程をお賴み申します（某女）

急用にて人を招く場合では簡なるがよし、鄕里の弟妹に近狀を報ずるには情を含まするがよし、時と場合によるなり、總じて何事によらず、一の主義によりであらゆる場合に押通さむとするは不可なり、（環音答）

○親しき友へ

大坂市　池田小絃子

待たるゝものは、お月樣のみならじと、幾度か、門邊にてゝ、見れども〳〵。あゝ情なの君よ、何故よべは、來まさゞりし。怪しと宣ひし、空模樣も、又なう、笑はししう候ひしに、宣ひし、君が胸模樣こそ、とくより、怪しかりしと、申上けんが。さるにても、優しき君を、あらぬ方〳〵と、誘ひ行きしものは、そも、何ならむ。須磨の濱風、そと、音づれて、君が、み胸に、さゝ浪立てば、可愛千鳥に、御歌袋もたせて、いそ〳〵と、御出立ち遊ばされしには候はずや。さる事とも知らぬ妾は、皆樣に、なぶらるゝをも、かまはて、幾度となく、門邊に、出てゝ過ぎ行く風にこと訪ひしに、果ては、つぶやき、となりて、天野の君に、笑はれしよ、秀子の君が、笑顔も、何となう、ものたらて、ならべられたる雲の、一つのこりたるも、淋しく候ひし。君あらばこそ、月姫樣も、み歌の願、下し賜はるべきに、率るべき歌も、なき身に、力そへ給ふ君も

なくて、新ら美はしき短册に、耻かきならべて候。君よ哀れと思召さばこん月の會合には、必ず〳〵もれ給ふな、今より、かたく願ひ上げ置き候。かく、口さがなき事ども、聞え上げて、誠に欠禮には候へど、よべ、門邊に、立ちし時の思ひの、萬分の一にも及はず、よしなに、はかり察せられよかしこ。

○雪の旦友の許に

廣島縣　水野亮子

曉告ぐる山寺の鐘の音に、おどろきおきいて、雨戸くりやりて見渡し侍れば、こはそもいかに、昨日までちり塚となりて果てし庭面も、今朝は初雪の折たがへたる花の、咲きたらむやうにいと深う〳〵積りたるは、所せき我庭ながら、いといと珍らしうなむ。まして野山はさぞやと思はれ侍るにも、かの御山の雪、さては不動が池のけしきを打ち眺め、例の尼寺の褥に遊びて、歌よみ、文かき、かつは、のどかなる四方山の御物語り、仕らまほしう思ひ立ち侍りぬ。過ぎし紅葉狩の御歸さ、ゆかしきものに契りのたまはせしをいざとく思ひ立たせ給へかし。時過ぎて謂ふ甲斐なく消失せたらんには、いかに口惜しからむ。やがて御庭にいとひ給ふ跡つく可く侍れば、其御心にて、待たせ給へかし。あなかしこ

○病床より友の許に寄す

相模　今井藤枝

先つ日はいとも御懇切なる御慰問に與り、何とも御禮の申し様も無之朝に夕に君が友情の厚きに病衣の袖を濕し居り候、其節早速、妾が近狀、申し上ぐ可きの處、御分秋以來、病はつのりにつのり、何につけ氣進まず、只醫藥をのみ、友とし、夜は夜もすがら、日は日ねもす、夢境にさすらひ居り、遂々今日まで延引候次第、何卒御宥し願はしく候、偖て其後未だ快方には赴き申さず、冬風立ちし昨日今日は、朝夕うら寒きに殊の外心地惡しく覺え申し候、此後何時を何時と定めて、快癒すべきとも覺束なき、身の程をのみ悲しみ、煩ひ居り申し候、然れば病む人の常として、要なきに心を痛めては夜も落付きて眠りし事なく、様々の思に耽りて、樂しき事、悲しき事、交も小さき胸に描き出されて殆ど、晝も、夜も、辨へ申さぬ程に候、時にはかく重き病の一時に全快し、春の如き花園に君と逍遥しつるを夢み、自分ながら、其心地に相成り、飛び立つばかり嬉しさを覺え申し候、又或時は亡にし兄が突然妾が前に現れ、我が今居る所は、四時爛漫として花の絶えし事なく、皎たる月の缺けし事なく、鳥鳴き、蝶舞ひ、發する樂も止む事なき、いとも平和の樂園なれば、汝も病苦に煩悶するより、早く我が許に來よかしと言ひも果てず、かき消す如くに失せ給ひぬ、此時、初めて夢より覺むればはや、夜もいたく更けたりと覺しく四邊靜まり居り候て、ふとながむれば、燈火の下には未だ寢もやらぬ母君が一心に妾が衣を縫ひ給へるに、あゝかく迄も不肖なる妾が身を慈み給ふかとせき來る涙は、もろき想を煩しつ、獨り身の不甲斐なさを痛歎致し候。

其他學業の事、家計のことどもむら〳〵と湧出て、妾が胸は、流車の窓より外面の景色を迎ふるが如く、送るが如く、一事去れば、又一事來り實に腸をたつの思ひに御座候、ましてや此世を去る可き運命の、近き日にと、思へば、彼の和氣靄々たる教場の中に諸先生の温き教を受け、砂を蹴て運動場にスケツチングの舞、ピウチフルマーチの曲の樂さも叶ふまじく、只醫藥をのみ力に浴るが如く、飲めども飲めども：：：：：何も綴くれば胸の痛に筆もしぶり申候間、玆に擱筆致し候、宥してよ君、君の友情の厚き實に感に堪へ申さず、此に御禮方々妾が近狀御報迄、

○古郷の弟に林檎を送る文

下總　野々宮せい子

東風吹きそめて梅の蕾も綻び初め候折柄故郷成田の峯は如何に又園の梅は如何にと思を馳せ候は遠國に心寂しく暮居候身の常と御憐み下され度候

扨ても御身のいます懷しき古里を離れて此塵埃深き都に上てよりは隔なく語らむ友もなく父母はらからの上のみ懷かしく忍ばれて氣高き山の姿清き水の色など、あり〳〵、と目の前に現れて御許戀し古郷懷かしの情のみいや增りて、はては涙さへ頰を傳ひて獨り悲みに堪へぬ折柄思ひ掛なく從妹の尋れ來り候まゝ涙押拭ひ泣顔をかくし共につれ立て深川八幡に詣て候歸る道すがら、とある、店先に、かれてより御許が好める林檎の、いとも美事に山なして並び居候さらぬだに忘るゝ隙なき御許の上

の一入思はれて一篋求め歸候乍輕少懷かしの心を込て送り候まゝ御落手の上は姉が心の程を汲みて受させ給ひてよ

思へば去にし年御許と共に秋の長夜の書窓の下に倦みはてゝ林檎取出て且つ語り且つ食べしはてはいつしか机にもたれしまゝにて寢入りし事などもあはれ昔の夢と消え候靜に思へば思ふ程兩親戀しく兄弟懷しくやる方なく存じ候懷しき弟よせめて御身も此の品に思浮べ給ひて我身の上を憐れとも、おぼし、やらせ給ふと聞かば如何ばかり嬉しからむ憐れ此の涙風あらき都門の中にたゞよふ姉が心を汲みて折々は音づれ給ひてよかし

○梅の花を贈る文　近江國　竹村たけを

朧月は今しも丸窓に滌う照り渡り候、机上の文字も月に照らされて、いとなつかしう候。

部屋の二階に弟勉强致し居り候ひしならむ、本を讀む聲幽かに洩れて、前の小庭は靜かに候、窓をあくれは、朧月は軒にかゝりて、硯の海に影を落して候、晝なれば、庭の梅を眺めつゝ、鶯のうたを耳にしつゝ、樂しく机に凭りかゝり候はむを、夜なれば、鶯の影も見えず、床しきうたも聞こえず、梅花のみ、白う雪の樣にて候、折しも、その花のひら〳〵と窓に入りて候へば、直ちに一葩封入致して贈り申し候…

○故鄕の友より（本誌二卷壹號好月子の故鄕の友へを拜して假りに友になぞらひ）　下野　新井琴子

『夢ならば醒めそ』そは絕えて久しき懷しきみ便りを手に執りし一刹那の妾が叫びにて候ひき慈なき御樣子に喜び悲しき御言の葉に泣き幾度か淚に曇る眼を押拭ひ繰り返し〳〵拜誦致候御幼少の折に御兩親を失ひ給ひて嚴しき叔母君の下に生ひ立ち給ひし君夙こ浮世のせち辛きを味ひ給ひし御身のかゝろ御言の葉を漏らし給ふは然る可き事にしあれど處き熱き沙漠の中にもオアシスある事を記憶し給へやかく恐かしき妾の取るに足らぬ言ながら君の舊友にて遠き都に思を運び厚き情と愛とを捧げて同情の淚に咽ぶ者にて候ぞ淸水の底は濁るとのみ仰せなまだ裏若き君の口より漏出るとは何事に候や天は高く地は廣く候ものを訣別の一夜櫻月のテニスの庭に誓ひし御言葉よも御忘れは候まじあらゆる淚を押分けてこそ彼岸の花は手にも得れさはれ其荒淚こそ櫂を折り船を覆す者にて候へ、かゝる言深うは申候まじ只方向を正しく忍耐を常として百折不撓彼岸に着き給はん事を願ぎまつるになん妾も共に遅れはせじ此後は共々に御力ともなりつなられつ候べければ……

次の御便りに焦れ居る妾を哀と思召さば是非に

○在京の兄の許へ　兵庫縣　規畑江

六つの花盛は、いつもながら、美しく心地よいもので、御座いますれ。御當地では、御見飽きなされたてしやうが、こちらでは、今日が始めてなのです。

毛糸のシヤツ、御落手下さいましたか、一針々々に、誠心こめて編んだのですから少しは無格好でも辛抱して、着用して下さいませ。

來る春季大展覽會に、御出品の苦の繪畫もう御取りかゝりに、なりましたてせうれ、申上げる迄も有りませんが、何卒、立派な、家の風を興すやうなのを、書いて下さいよ、家の爲、世の爲、道のために、私はあなたの御成功を祈〻居ります。斯樣な事を申しますと、御笑ひになるかも存じませんが、御兄樣、私は每朝工場に入る前に、必ずあの赤い鳥居を三つばかりくゞるので御座います。諺にも、命あつての物種とか申ます、もとよりあまり强くない御身故、無理な事を遊ばさぬ樣、私等母子の命も、また、あなたの御肩にかゝつて居るので御座いますから、充分御自愛なすて下さいませ。申上げたい事は未だ〳〵御座いきすが、頼まれの、仕立物の期日が、差迫て居りますから今日はこれにて惜しき筆を擱きます。

まあ美しう雪がつもりましたと！身は落ぶれても、心ばかりはこのやうにと、いつも心掛けて居ります、御兄樣、私も數年の後には、大畫家の令妹と云はれる身て御座います、心の修養は一日もおこたりはしませんよ、御安心下さいませ。

○初午に人を招く文

富山縣　珠江女史

うら/\と立つ、四方の霞もにほやかに、山あひの雪も、やゝむらぎえて、殘る寒さも、忘らるべう、覺ゆる折から、いかに渡らせ給ふらん、さて、過し、まつ竹しめはへし頃、いと、かたく、ちかひまつりし初午も、はや、明日とせまり侍れば、兼て、しろしめす友垣、三人四人消息し侍れども、君まさでは、いかに、ものたらぬ事にやと、思候へば、ふりはへて、とひ給へかし、さりとて、させる、主じ、まうけも、し侍られど、まがきの梅も、人まちがほの、色見え侍れば、まげて。

○早梅を送る文

東京市　露木きく

日にそへ寒さいやまさり候ところ御許樣如何御しのがせ給ふらんおこたりがちなる私は火桶のみな友として其日を送り居り候今朝しもひまもる風に得も云はぬ香をおくりこし候まゝ破まど引あけながむれば手植の梅春をも待たで咲き出でなか/\にすてがたく候古歌に「宿はと問はゞ如何答へん」と云ひし事も思ひやられ候へども色をも香をも知り給へる御許樣に一枝參らせ候、御文机のほとりにさし給はらば雪のしづくにぬれて手折りし本意にかなひ一入うれしく存じ候

○梅花に添へて都の妹へ

神戸　容湄女史

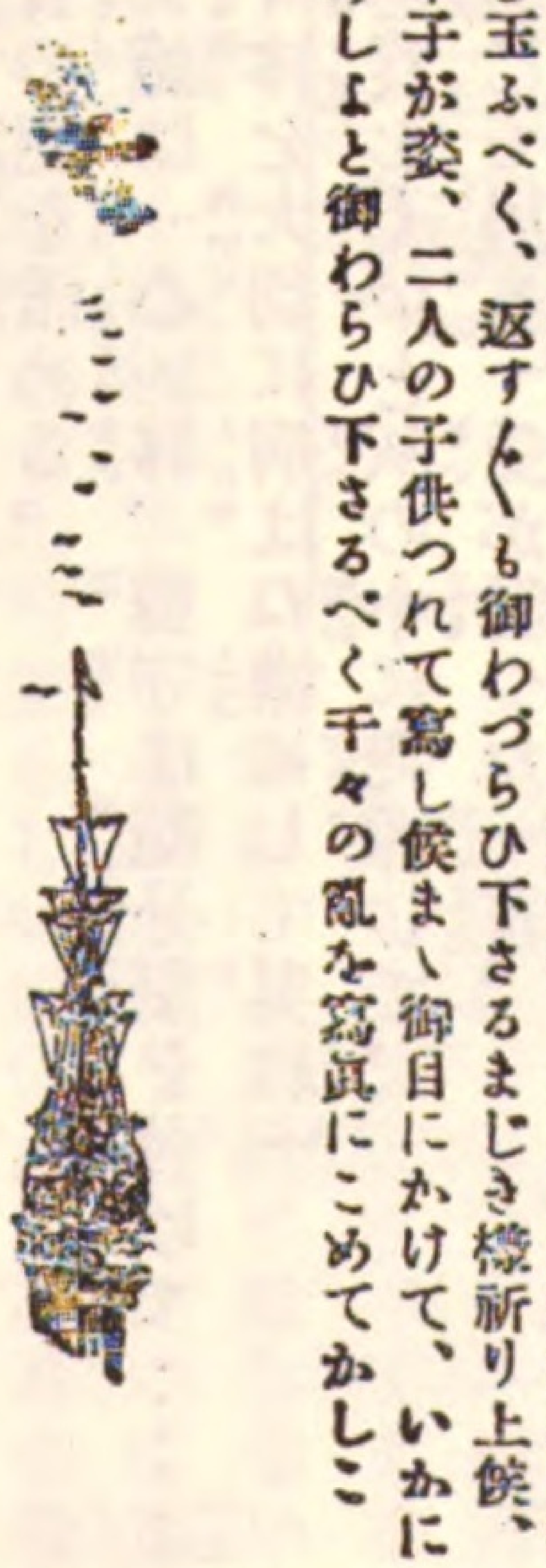
冬の中より深くも心にかけて育て上にし共有の鉢の梅今年も匂ひ床しく咲き初め申候去年の春御身と共に初咲の花片とりてソト唇に當てゝ香をかぎ和歌に詠じて愛でたりしを今は關山萬里を隔てたる都の空學び舍の窓の中何れの邊りにか梅やたゝえ給ふあはれ鉢の梅己れ二人前の心を以て愛づるともいと/\淋しげに見受けられ候梅にも倍して偲ぶ文字ずり妹ゆゑに花にもかけて詠むよしもなくせめては思ふ心を花に添へて袋中深く封じ込めおき候へば雪の英しきにも迷はず堪へがたき寒さをも能く忍ぶ志操の堅固なるを模範として學びの道にいそしみやがて積年の功高く花の咲く日を指折り數へて待ち申すべく候

尙殘寒きびしう侍れば呉々も自愛專一になさるべく都の風にな冒されたまひそかしこ

○母より寫眞をおくられし返し

和歌山縣　森井鶴枝

かれて御願ひ申上置候御寫眞御送り下され、昨夜確かに到着いたし、取る手おそしと拜見仕候、誠や御膝下はなれ候てより、早や三年の月日相暮らし候事とて只管御なつかしく慕はしく御寫眞かきいだきしばし涙にむせび入候。わづか三年の其間にいみじくも老いさせ給ひし樣なるは、全く寫眞師の不手際に候や、父上樣がなき御身になり給ひてより浮世の波風いとはげしく、おはしまし候に、多き子供も未だ幼少にて漸く御手傳なしまつるべき私は、いち早く良縁ありとて、御膝下はなるゝ事と相成、御胸にあまる御恩の程、察し擧るも涙の外無之候　不幸の私うけし御惠の萬分の一も報ひ得ぬのみならず、千里の郷に朝夕を異にし、風につけ雨につけ慈愛の心御痛めさせ給ふ御事、誠に何たる云ふ甲斐なくも罪深き我身にやと、口をしく空おそろしく存じ候。妹弟とたはむれ母上樣に無理なる御ねだりいたし候ひしも、昨日の夢かとばかり思はれ候に今は早や私も二人の子供持つ母と相成、子を持ちて知る親の恩とは古き諺に候もいとゞ身に思ひ當り申候なつかしき御ふところに、乳房ふくみてうまいせし昔もありしよと、抱ける我子のいとしきにつけさま/\にはてしなき思ひにかきくれ候て、つく/\と拜しまつる御おもかげの、幸子よとやさしくよばせ給はする如き心地いたし候、おろかや三百里の雲井の今更かなしくうらめしく打仰がれ申候、寒さいや嚴しく候に、御無理なる御働き遊ばさるまじく、御暇には隨分御うさはらしに相成る樣御保養なし玉ふべく、返す/\も御わづらひ下さるまじき樣祈り上候、三年振の幸子が姿、二人の子供つれて寫し候まゝ御目にかけて、いかにも世帶じみしよと御わらひ下さるべく千々の亂を寫眞にこめてかしこ



廣津柳浪先生選

投稿短篇小説

特別第三賞

○梅月夜

下谷上根岸　太田秋津子

「三年と云へば長い樣だが直に經て仕舞ふさ。何卒明日は潔く立たせて呉れ、泣顏なんか見せられると心持が惡い」

外は價千金の梅月夜、まだ雨戸も鎖さずに玻璃越、ほの白い梅の影を春樹は憮然と眺めたが、手にした紙莨の灰を、瀬戸の火鉢の端ではたいて、

「あゝ云ふお母樣の事だから、己が留守となれば、尚我計り張られるだろう。辛く當られるのは目に見へる樣だが、仕方がない、何でも逆はない樣にな、皮肉ても何でも親は親、殊に幼少から養はれた、義理ある、己には只一人の親だ。どんな無理を云はれても、何所迄もさからはぬように」

「はい」悄然として物思に沈んでいた妻の雪子、夫が燻らす莨の烟を瞶める。

「雪、夫婦は一心同躰、留守は隨分氣を付けて……お前も身躰を大切に病はぬ樣にして呉れ」

喫差の卷莨をぐいと灰の中に突挿して、

「己は案じて居る」愛が籠つた一言。

「は、有難う、お言葉は屹度守ります、何卒貴郎もお身躰を御大切に、土地が變る事でございますから」

夫の顏を凝乎と見上げて。

「妾、お歸りを樂しみに待つて居りますわ」と寂しく微笑んだ。樂しく待つとは云放つた物の、三年、あゝ隨分待つに永い月日ではあるまいか、お留守となれば又姑の、何程辛く當られるやら、今迄は辛くとも夫のあるに勵まされたが、之から三年の間、同情を呼ぶ人もなく、一人で泣かねば成らぬのか。心弱くも俛れて、思はず太息を吐いたが、いや然し夫の今のお言葉、夫婦は一心同躰、あゝさうだ、幾程辛くとも妾にも親、何所迄も堪へ忍ばねばならぬ。

春樹は凝乎と視守つたが、母の妻に酷いのは、自分も豫知つてゐる所、夫と云ふのも元は自分が、あの本田の小夜を迎へぬからてあるが、小夜は跳返りの迚も我

妻とする人でない。けれども今に母は、小夜を嫁にしようとの望がある。雪には知らせぬが、既に先頃も雪を離別せよと云はれた。夫だのに今度の自分の留學、留守は何樣に辛いであらう、母の事だからもし偶然したら雪に離別を……いゝや眞逆にそふ云ふ事もあるまいが……。今日結立の丸髷美しう、洋燈の光にきら〳〵と照つて白い襟元には後毛の幾筋か、常に晴れぬ面、二十二のうら若さを堪へぬ辛さに人知れず泣てかと、春樹は憐れさに面を曇らせたが、

「雪、己は察しるよ」心から出た聲であつた。

雪子の胸には何樣に嬉しく響いたろう、

「貴郎……………」と計り跡は語が續かぬ、はら〳〵と涙が落ちる、慌てゝ手巾て眼を押へた。



春樹は堪へて、つと障子を明けて椽へ出た、夜氣冷へて身に泌み渡る樣な白梅の香が、ぷーんと鼻を搏つ。

夜は更けた。月はいつの間にやら笠を被て明日はどうやら雨らしい。

さッぱりとして、いやみのない點は梅月夜と云ふ題其儘の作で、何處となく淋しい處も能く代表して居ろ、純潔の一語、此小說を評するに足るであらう、終りの數節、殊に筆尖の冴えたるを見る（選者評）

天 ○二人姉妹

横濱山手町共立女學校　しのぶ女史

上

「母樣妙子は今年の四月で最う小學校を卒業するのね」と裁縫に餘念ない母の傍に同じく編物を手にしながら斯う云ふたのは露子と云ふ年の頃十六七の可愛らしい娘である其星の樣な淸しい眼には暖い同情が溢れて居る、母と云ふのは

四十格恰なキリツとした品のよい人柄「あゝ早いものですね遂い此間上つたと思ふたら」「卒業したら妙子は何處へ參ますの？」「別に何處つてね、父樣でもいらしつたらもつと勉强させてやりたいけれど女の手一つではとてもねお前一人がやつとなのだから」と母はほろりとなる「母樣私實に勿躰ないは私の爲に妙子の勉强が出來ないのね可哀そうに」「なあに其も皆運命ですからいつかは又花の咲く時が來るでせうよ、お前の事だから左樣な事云ふ必要も無いけど母樣が居るうち能勉强しておくれよ只二人の姉妹なんだからお前でもしつかりやつておくれでなきや皆が難儀するからね」「えゝ其は母樣私さつと〳〵一生懸命にして業が成つた曉には妙子にも思ふ通り勉强させるは母樣今はゆるして頂戴ね」「おゝお前が今から其心掛で居るなら母樣は奈んなに嬉しいか其決心を永遠も忘れないでねきつと左樣なつておくれよ」と母は我子ながら其健氣なる樣子につく〳〵と見惚れて喜ばしげに微笑だ

下

翌日露子は將來の事などいろ〳〵考へながら獨て運動場を彼方此方と散歩して居ると向ふからキイ〳〵騷ぎながら馳せ來る一群のハイネ連「級長さん！露子さん貴女にお話すべき事があるのよ其は實に嬉しい事あてゝごらんなさい」「あらそうどんな事」「あのね明日は日曜でせうですから私達先生に杉田の梅見に連てつて下さる樣に御願ひしたら直に御承知下さたのよ其に付てね今も皆樣と一寸御相談したのですけど明日掛けるリボンと半襟をお揃にしたいと思ふのリボンは此度柳屋でね最新流行のが出來たそうですから其にするとして半襟は皆さんでいつて見立ませうではありませんかいゝてせう貴方賛成して下すつて」露子は瞬間に母の事や妹の事を思ひあゝ自分は今其樣なものを買う境遇ではないのだと心にうなづき「まア其はよい事ねても私少し都合がありますからどうぞ私だけ除けて頂戴な皆樣惡からずね」と年に似氣なくキパリと云ふた、あゝ山々であらうけど少しもさる樣子なく明かにことはる其健氣さ「あらあなた一年に一度の梅見じやありませんか級で一人除者じや私なんだか……」「私も行きたいのは山々ですけど明日は兼て人から頼れた用事もあるしてすから此度だけはね……」「其ては奈しても？」「はア惡からず」「何だか氣拔がしちやつたは」「つまらないのね」などゝ口々に中には「隨分變人ね」と罵る者

さへあつた「仕方が無いは御用があると仰しやるんですからさア皆さんベンチへ行て又相談しませうよ」と世話焼の蝦村を先として皆バタ〱と走り去つた露子は彼等の後を漸く見送つて居たがやがて我に歸ると其愛らしい目からは何の露やらハラ〱とこぼれた

＊　＊　＊　＊　＊　＊

露子の決心は益々固かつたそして能く百難に打勝て勉强した甲斐あつて其翌年先生を驚かせる様な好成績を以て目出度卒業した彼女の喜は云ふ迄もないが其可憐なる母と妹は如何に感謝してよいか知らなかつた。

露子の意志の堅固なところを現はす爲に、親梅運動會を出したのは甚だ賢なる作意で、これでこそ妹を學ばすだけの力ある事が知れる、別に不思議な着眼でもないが女らしい思想である事は爭へない(選者評)



我が妹　（賞外）

本郷千駄木町　松本わか子

『只今。』書籍包みを片手に。格子戸静かに引き明け、上り框の破れ障子に手を掛て云ひながら、薄暗い四疊半一間。形ばかりなる長火鉢の傍、裁縫に餘念なき母の向側に坐つた。

年は未だやつと七つか八つ位であらう。色の白い黒目勝の可愛らしい丸顔、髪を紅色褪せたリボンでお下髪にして居る。

『オヽお歸りかい。戸外は寒かつたらう。』

針の手を止め、慌てゝ埋火かきたて乍ら、慈愛こもれる眼を向けし母親。まだ四十歳には間があらうと思はれるに、いたく窶れた容貌。髪は油氣なしの櫛巻で。

『否え、そんなでも無いわ。』全く寒くもないと見えてあたらうともせぬ。

『左樣かい、家に居ても隨分寒いのに……矢張子供は風の子ッて云ふから……。』母は淋しき笑顏。

『まあいゝ着物ね、これ私の？』

眼注ぎしは、母の縫へる、色美くしき友禪の二枚襲。

地

○木枯

神田區西小川町二ノ七　大澤隆子

『……。』背向る顔に涙さしぐむ。
『ね、母さんてば。』
『こ、これは房ちやんのぢやないの。お前には今に買つて上げるよ。』
襦袢の袖もて涙押し拭ひつゝ、唐棧の萎へたる衣服着けし我子いぢらしと見詰めた。
『然う。私しんぢや無いの。』
稍不平らしく呟いてゐた。
『それぢや母さん、きつとお正月には買つて頂戴よ。』

* * * * *

薄暗き二分心洋燈のもとに、ひとり靜かに他人の子の春着縫へる母親の心やいかに……？
房子は早や樂しき夢路を辿つてゐやう。
夜はやう〳〵更け渡つて、破れ障子洩る木枯の風一入身に泌み〳〵と……。

いつもながら一句もたるみなき文章の妙、蓋し天品であらう『まだ四十にはまがあらうと思はれるに、いたく窶れたおもざし』の如き僅に一句のうちも其人を描き出す技倆が具はつてゐる（選者評）

人

○宵の霜

横濱市中村町　幸田光子

露路を這入つて右角の古びた長屋の臺所口から、此寒中に袷の重着貧苦にやつれた顏を出して居る三十恰好の女、月明りに十一ばかりの男の子を覗くやうにして
「ね、今言つた通り父樣はお酒呑んでは惡いお友達と遊んでばかり居るし、子供は皆未だ小さいんだし、迚此お母さん一人の腕ぢや何うする事も出來ない、奉公なんてまださせる年ぢやないのだけれど、家に居たつて少つとも可い事は覺えないし、悲くつても辛旁すれば其がお前の爲て、又お母さんにも孝行になるんだからね、サ今日はお歸り送つてあげるから、お父さんだつて何時か夢がさめて改心なさるだろうから、お前が赤んぼの時分は可いお父さんだつたもの、此も皆、惡い友達の仲間に這入つたからだから、只もう心の中で一日も早く改心するやうにと祈つて居るのだもの、お母さんの心を察して歸つておくれね。」
そこの壁板にペッタリとくつついて、啜泣して居た男の子は短い筒袖て眼をこすつて。
「お母さん行よもう必と歸て來ないからだけど……」
又何か思ひ出してはしく〳〵と泣くそんなにも悲しいんならと口に迄出かゝつた母親は又氣を取りなをして

「サ、お父さんの歸らない中早く行てうね」
薄ぺつたくなつた下駄をはいて泣く子をすかしながら細い露路を左りに。
「清の野郞又逃げて來たのか、意氣地なし」
足もしどろに今丁度歸つて來た父に、出合ひがしらになつた。
「何を泣くんだ男らしくもない一人でサッサと歸れ」
子供はわつと又一泣。
「お母さんもうい〻よ一人で歸るから」
と廣い往來へ出た。ひゞだらけの足に足袋もはかずに霜の夜をとぼ〳〵と。
「お母さんもう辛勞するよ」
「ア、辛勞しておくれと」見かはす母と子
「何をいつ迄云つて居るんだ」と
どなられて母親
「ぢや早くお出て」とまだ名殘惜しそうに、ふり返り〳〵露路をはいつた。
往來はひつそりとして小さい清雄の影を地に引くばかり橋の向ふの二階家も戸をしめる。
お母さんが戀しいのか、奉公がつらいのか、又しく〳〵と泣き出した。

子供も母親も、くどく同じやうな辭を繰返すところ、實際々々、此作者も亦文壇有數の才華あり、女流文學の將來の爲に自重を祈る（選者評）

秀逸

○處女心

岩代　阿部津記子

「伯母樣何うしたら好いてせうね」と千枝子は尋ねた「何うしたらて緣の事だ者お父樣の意見に從つたら好いだろう」「あら、だつて私嫁きたくないんだもの眞實に困つて了ふわ」昨日結ふた束髮の後れ毛の白き額にはらりとか〻りオリーブのリボンかすかにゆれる「一躰お前は何うしやうと云ふのだかつまらぬ考へなんか起しちや不可ないよ、お前の心次第で、伯母樣も相談相手になるさ」と千枝子の伯母は云ふた「私東京の學校に入れてもらいたいの伯母樣願いだからお父樣に話して下さいな」千枝子は高等女學校を卒業して先づ一人前の女になつたので今後專門の學課を修めて獨立自活の道を立て樣と父に願い出ると此上學問は無益だと一言のもとにはねられて了まつた夫れ斗りか川田實と云ふ財產家の一人息子某銀行員に嫁せとす〻められた千枝子はか〻る事には差當り相談相手になる人もない

のて夕方近村の伯母を尋ねたのてある

「夫れ位なことは話してもやるがお前の云ふ通りに成功すれば好いがあの學校の松山樣三十に近いだろうに未だ獨りで居るてはないか伯母さんだつてもお前位の時はお嫁に行くのがいやていやて家を出やうかと思つた事も二三度あつたが矢張お嫁になつてしまつたんだから成る可くお父樣の云ふ樣になつたが好いよ」千枝子は只手巾を採んで居る「だけど伯母樣一つ話して見て下さいな私もう決めて居るんだから氣に合ぬ結婚なんかするより好きな道に身を入れ何んなことでもして見たいと思ひますの」と千枝子は決心の樣子

「お父樣は反對なんだろうねこんなこと申したら」「だから困つて了ふのですわ」とぐたりと首を下げた、彼方の森からは家路を急ぐ馬子の歌の聲が聞える、夕榮えの色褪せて行く空にははや十五夜の月が松の上から離れた、千枝子は伯母に別れを告げても來し道を引返した、

「あゝ何うしたら好いだろう、困つて了ふわ、だつて彼な高が銀行員位な人に……財産なんか的にならないわ、よし又的になつたとした處で只だ喫く食べて着て行かれると云ふだけ、夫れては社會に生れた甲斐がない、女だつて獨立の出來ないと云ふ事はあるまい何にも男子方の妻になるばかりがまさか、婦人の天職てもあるまいから」

千枝子は知らず知らず歩みを運んで松並木の處まで來かゝつた月影が雪にキラキラと輝く「寧そ家を出やうか、けれど、體が弱いから松山樣のやうな苦學は出來ないし、此まゝ居れば川田と結婚さして了はれる親の家を出て苦學した末が小學敎師位ては詰らぬ、だけど氣に合はぬ結婚なんかするより好な道に身を入れて何んな苦學でもして見たい、それには堅き決心が無くては駄目だ」

千枝子の胸にはふと松山春子の身の上が浮んだ女の身に家までぬけ出て苦しい修業を續けた後立派に社會に立つ事も出來ず三十に近き年を此片田舍に小學の敎師位て獨身淋しく明す人かと思へば俄に胸が塞つて兩の眼からは熱い淚が落るかと思へば吾身の行末が幻の如く眼前に映じ來る、若き決心は稍々脆くなつた

「ア、寧そ嫁入りして川田の家で泣かうか、それとも遣れる迄遣つて見て松山と同じ身に終るか、

「女は何うしたら好いのだろうね」と獨言ながら流るゝ淚を押へてふと月を仰いだ。

文品は別として此一篇、能く現代の若き女子の一面を捉へて、おぼろげながら彼等の理想とする處を描出して居る、素より千枝子の考は極端であるが、此極端な考は必ず持つて居る人があらう、つまり「女は何うしたら好いのだらうれ」と月を仰いて、浩嘆するもの一人の千枝子のみでない、這間の煩悶、疑惑、衝突などを能く書いたならば、屹度時代思想に觸れる事が出來やう（選者評）

○無情

伊賀　上野みつ子

此處は慈善家で名高い村長の離座敷である、はなれ座敷とは名ばかりで茶小屋を直してヤット、古い坊子畳を敷てある位の、小さな汚い處なので其住んで居る人も、昔は此土地での家柄であつたそうであるが、今は落魄て、祖父と娘との二人で、其日其日の生活にすら、事缺くばかり其の上祖父は多年の病氣で、足腰立たず實に赤貧洗ふが如きとは此の如き樣を云ふのであろう。

種々の反古や廣告で、張つてある茶色の障子に映つて居る影を見ると、娘が祖父の腰のあたりを摩つて居るらしい。

「ナアお祖父さん遣らして頂戴、お祖父さんの御病氣は溫泉へ行つたら直るつて今朝村長さんが云ひなさつたてはありませんか」と、一寸言葉を切り「工場では十五錢の日給があるつて昨日募集人が來た時に、云ひましたナ、私が行つて精々儉約して、錢を貯めて送ります、そうすると、お祖父さんも溫泉へ行かれるし、病氣も癒るからやつて頂戴ナ」と健氣にも祖父を思ふばかりに一心になつて言ふ。

祖父は起き直つて、

「お前も小供ではなし、祖父の云ふ事はまだわからんか」といつもにも似ず、キット、娘をにらんで、

「お前は工女がどれほど好く、又どれ程ど錢が儲かると思ふのか、いつか郡山の紡績會社で、工女がのたれ死したつて祖父に話して呉れたではないか、工場は此の世の地獄みた樣なところで、實に實に苦しい、そうして錢を儲けるどころじやない、命も危い處じや」

娘は俯向がちに、

「そら私は工場の苦しい事は知つて居ります、そうて



靉がほ（賞外）　下谷中根岸　黒澤ふみ子

すけれども、此の樣にして居ては、お祖父さんの病氣はいつまでたつても、癒りませんワ、又五年も六年もと云ふのではなく、長くて三年ですから、御不自由てすけれども、少しの間忍耐して下さい、又喜ばす事もありますから」

祖父は老人だけて涙脆く、最早目には嬉し涙が宿つて居る

「そんなに此祖父を思つて吳れるのは實に嬉しい、然しお前に行かれては、御飯も煮る事も出來ず、此の樣に腰が痛くても、こんなに摩つて吳れる人もないじやないか、又祖父も大分年をとつたから、病が癒つたつて二十年も三十年も居るではなし、ナア娘もう死るまて、お前の顏を見て居たいから、マア行かずに家に居つて吳れ」と云つた時は、娘も祖父もワットばかりに、打ち伏してしまつた、

後は障子の破目が風の爲にビイー〳〵と鳴る音ばかり小さなカンテラの火も油も無き爲めか、風の爲か、消されて終つて、鎌の樣な月の光が、此の淸い濕いホームに、さし込むばかり。

＊　＊　＊　＊　＊

それより三年を經て祖父は不歸の客となつた。

だから娘は隣村の叔母の家に養はれて居つたが、叔母は誠に不人情な人て、又家も富んて居らないから娘を「お前も大分年が大きくなつたから乞食してなりとも獨り立ちしろ」と情ある人の口にすべからざる言葉を以て遂に家を追ひ出した。

實に何處までも哀しい物語、「もう死ぬるまでお前の顏を見て居たいから」のあたり風、覺えず讀者をホロりとさせる、能く同情も籠つてある、伊賀のやうな小さな國にも此の樣な女秀才が居るかと思へは、我文壇の前途は計り知れない（選者評）

○利根の春水　神田　太田熒子

花は咲かねど、時來れば流るるぞうれし、利根の春水いとも豊かに。

遠近の山々霞こめて、緑衣の袖の色はなやかに放春の光、舟やる翁は我兒の凱旋して歸鄕るを迎へんとて、今都さして、上りの櫓を漕ぐなり。

「えゝ、もう少し風が出てくれればよいに」と梶をつかみし若女をかへり見る。「少しは出てきましたよ」と女は微笑を洩らして。

「私が少し漕ぎましよう」と、老翁の櫓に、手を懸けん許り、

「何あにお前、これ位にまだ〳〵此の松右衛門の腕は

鈍らないよ。丁度十歳の時から、舟へ乘り出して、今年て四十年」ハヽヽヽと、さもうれしげに笑ひながら。
「こんな事を云ふてはないけれど、私が二十五の時、親父が死んだので、今のお闕を貰つて、どうやらこうやら、一本立ちになつたが、さあこうなつて見ると、中々世の中はつらいもの、義理だ人情だ、人の爲めだなんぞと云つて、いらない物迄つかつて。
それに此の川を上下する船頭では、私が一番若かつたので、自然と船もよけて通らにや成らん樣な始末」松右衛門は一息つきて。
「それはそれと、此處が、一番堪忍時と、齒ぎしりしてやつた結果、人の二度上る間に、私等は三度上る樣にして、まあ少しは、樂が出來る樣に成つたのだが」
春風そよ〳〵と、二人の顏を吹いて、女が白手拭の、ひら〳〵とひらめく松右衛船上るのかえと、呼ばりし聲に、話しを止めて後ふりむけば、舳先に立ちし船頭の仁藏。
「ああ今日は、吉の奴が歸るので」と、喜ばしき語調、彼方も同じく「ああ然うか、それは御目出度う」小波さは〳〵と、二人が船邊を打つて、次第次第に遠ざかりゆく。
「吉もどんなに、喜んで居るか」
「本眞に吉さんも――」と若女は耻かし想。
「明日から此の職業は、お前達二人てやつて貰はにや成らんだから」と、威勢よく云ひ放ちたり。
老翁はつゞけて。
「吉も兵隊にいつた許りに、少しは學問も出來てきて人の前へも出られる樣に成つたが、此度の此度は大出來ぢや、村長樣から、旗が下るやら、御出迎いに來て下さるとやらで、大騷ぎだ」と日に燒けたる顏に、誇りの色をあらはして、水切る音の、常にもなき美しき聲。
若女はぐつと、握りし梶を引きしむれば、船は南に向きて東京近く進むなり。

文章に含蓄もあれば、對話にあやもある、殊に船頭松右衛門の身の上話は、短い間に能く彼が一生を語つてゐる（選者評）

○小蝶物がたり

淺草　紅の花

あゝ私は何といふ不幸な身の上で御座いませう？忘れもせぬ十日前の事でした、私の大切の大切の唯一人の父上は雪の澤山ふつた翌日珍らしい梅の香に誘はれて

私の止むるも聞き入れ給はずひらひらと浮かれ出て、常から好むで居られたお庭の紅梅の邊りに、さも樂しさうに舞ふて居られましたが折しも此雪に餌もなくて飢に疲れお土藏の屋根に止つて居た一羽の雀！好き餌食こそあれと言はぬ計り父上の方へきつと見構へを致ました、あゝ此時遥に之を見とめました私の悲しさ！お助け申したくも未だ幼き身の甲斐なさ、翼は弱く飛ぶ事すら自由ならず、さればとてみすみす父上を惡き雀に……私は決心しました。滿身の力を小さき翼にこめて一生懸命に父上の傍へと馳せ寄りました。其の一刹那！彼の雀は颯とばかりに下りてまゐりましたが。あゝ何をいふても飛ぶ事には妙を得た彼の雀！私は初めて巣を出たばかりのかよわき翼如何して、彼に叶ひませう？あはやと見る間に彼はその尖き嘴を以つて、明け暮れ私に溫き息をかけては育むで下さつた優しくもお情けに富むで居た父上の胸元をグサ！とばかりにつらぬきました。あゝ其時の私の想！それはもう、とても申しつくす事は出來ませぬ。どうぞお察し下されませ。然るに此の時折よくお廊下を通りかゝられたお家のお孃樣が此の躰を御覽になるよりツトお庭へ下り立つて彼の惡き雀！否私の爲には八つ裂きにしても飽き足らぬ父上の敵を追ひ拂はれましたので漸う父上が死骸だけは敵の手に渡さずにすむだのでございました。やゝあつてお孃樣は『おゝ可愛さうに！』とおほせられて眠つて居られる樣な父上の死骸をそつと和いお手の上におのせに成り其のまゝお座敷の方へと行つておしまひに成りました。私は力なき翼を漸う動かせてかへりましたが、思へば思へば惡い雀！もう此の宿には父上も居られず、今宵からは私一人で淋しく暮さねばならぬか？明日からは誰と慰め合はうぞと便りなき身の心細くて終日聲も立て得ずたゞ翼を震はせてのみ泣き暮しました、翌日父上の亡くなられた塲所の戀しくて、おどおどしながら辿り行きますと、あゝ小さきお孃樣のお情け！父上の大好きであつた紅梅の下に土うづ高く盛れて其の上に片假名で愛らしく『テフノオハカ』と記されてありました。私はそれを見ると又悲しくうら寂しくなつてまりまして熱い涙のみ、はらはらとまろび落つるので御座いました。其の後私は毎日此所へ來ては亡き父上のお墓のお守りをして居たので今日もお池の傍の白梅が風につれてひらひらと散つてまゐりますその一片を翼にうけて父上のおくつきへもうて、しよんぼりとたゝずむで居る私の翼を、

之も心あつてかやはらかい春の夕風は、しじうひらひらと動かして居るのでございます。

『私は蝶である』と云ふ物語て、小說と云ふよりお伽噺に近いが、筆のたしかなこと、能く廻ることゝ觀察の緻密な點は、必ず小說も書けやうと思ふ（選者評）

○雪の夜

麴町　すみ子

（賞外）

雪催ひのどんよりした、今か降りいてさうな空の氣合に風さへ吹きいて、ハラ〳〵と落つる木の葉も米寒げの夕べを、お淸は人目なき裏や庭の、淋しく立てる青桐に身をもたせ、思ふ限りを獨泣き、いとせめて憂を涙にわかつのてあつた。颯々たる風は耳根に響いて、折柄聞ゆる遠寺の鐘、身にしみ渡るか胸を抱いて、色なき頰に傳はる幾雫。ア、今頃富雄は何をしているてあらふ、外面に立つて母を慕ふて泣いてはゐまいか、よし夫のいかばかり此身に辛ければとて、最愛の子を後に殘して情なくも去つた自分の心は邪慳てあつた、あんまり〳〵思ひきりがつよかつた。

……身悶して咽びいり、咽びいりつ、素性も知れぬ汚しい女に見替られた口惜しい中にも、もしやもし、我子の愛にひかされて、情なき心の二度昔しに返るよすがもあろふかと敢果ない望のそれをのみ樂しみにして居た我心は、扨も〳〵愚かてあつた。

只一縷の望の糸はもろくも絕たれて、最愛の我子は新しき母になれ親しまて日毎〳〵泣音の細々と、人よりきいた其夕、よくも〳〵我氣は確實てあつたと思ふ、何故に煩へ死にはしなかつたか、ようも心が狂はなんだ。さるを他なる人にかしづけとは、あんまり兄上も思ひやりがなさすぎる、あんな奴に未練があるのか、今宵迄に何れとも決心せい、憎い者の子ぢや富雄も我子と思ふなと……



麴町三番町　赤城壽美江

暗は文なく庭の一隅より逼つてきて、風に亂るゝ病葉のハラ〳〵と袖に散つた。悲しき身よと空打仰けば、折柄奥座敷邊に聞ゆる聲は心よからぬ義妹のそれよと我にもあらずゾッとして、お淸は袖をかみしめた。

下

「マアこの暗いに、富ちやん何してゐるのだえ」

油徳利手にした老母は曲つた腰付だるさうに、立止まつたが差覗いて、

「アレマア泣いてるのかえ」哀れとやうに可憐の富雄の脊を撫でつ聲も優しくいたわるのである。

ポツリ〳〵と次第に積る雪の夜を、家の軒端に悄然と小さき唇血氣失せ足袋なき足元わな〳〵と打震ふ姿の哀れさ。

「マア、寒かろふ」と老母は鼻聲。

「か、母ちやんがゐないんだもの……」優しく言はれて子供心の早やしく〳〵としやくりあげて、

「小母さん、本當の母ちやん連てきとくれ、よー小母さん」と袂に縋つたが、小さき心に誰をか憚かる、燈火洩る家の小窓を見返り〳〵泣音を忍ぶいぢらしさ、

「オヽ〳〵無理もない」と老母も引入られて、今は共音に涙聲。

「母ちやんを連てきとくれ、小母さん、母ちやんはどこへいつたの、ど、どこへいつたの……」語尾は涙に咽びいつて、しやくりあげしやりあげ、眼元を押ゆる兩の手は赤く宛ら、氷のやう。

颯と風一陣吹き過れば、軒の呉竹枝折れてかバサリと音して雪は二人の襟元へ……

富雄の泣音はまた一しきり打震ふ。

「富雄やッ、母ちやんだよッ」

黑き影のつと走りよると見る間もなく、犇とばかり小さきを胸にかき抱いて、

「ど、どこへも行きやしないッ、母ちやんは最う、どこへも行きやしないよッ」

我兩袖に確乎と包み、宛ら狂せし人のやう、降る雪の上に伏しまろびて、暫はよゝと泣音をたてた。

袖の中には細き聲音に、母ちやんやと……幾度か……雪は音なく降りまさり行く。

雪の夜、我兒の愛に惹かされて、つれなき夫の家をたづぬると云ふ最もあはれな趣向、今少し波瀾があつたらとも思はれるが、一通り書きあらはされてある（選者評）

○天父の愛

德島市　秋月女

『秀雄樣貴兄も聖教徒の一人では有りませんか、貴兄が御病氣で休んで此度の成績が不結果であると云ふ事は兼々山本樣から聞て居りましたが、まさか親友の間宮樣の後を追て死だとて世間の人が何と云ます、私は貴兄の樣な信仰あり、大望ある人が死ぬなんて心によくなれたと思ひます、若しも天父がゐますとしたら一時でも死ぬなんて考へは起らぬ筈です、貴兄は未だ死

仰の薄い、意志の弱い、未だ天父を見る眼が閉さゝれて居る未信者の樣です、天人論など口にする生意氣な女だとお賤しむでしやうが、貴兄のお心を知て居るだけ死すと云ふお心に成られた原因をさぐる事が出來ません、彼杉村樣をごらんなさい、大學で二度落第して三度目に漸く卒業して今では高等師範へ出て威張てるては有りませんか、人は死の爲に死するに非ず死の爲に生るなり、といつも口ぐせの樣に被仰ては有りませんか、古郷には愛くるしひ美ちやんと慈愛深き御兩親私から比べると何程樂みな家庭だか知れない位です、私は貴兄によく話しますが、私が五才の時父に別れ十五の春母は歸らぬ旅路に立ちました、私はまるで木から落ちた猿同樣でした、されても死と云ふ考へは少しも起りませなんだ、それも秀雄樣の樣な學者でもなかつたんです、學者でなくて幸でした、私が抑も聖敎徒になる動機を作つたのは此時です、母の一七日墓に詣て歸るさ山手の敎會より漏る讃美歌、私は知らず〳〵敎會の內へ足を運びました、今思ひますと、其時唄ふて居たのは彼『神の德』の一節でした、鈴木牧師の說敎は天父の愛と云ふ演題でありました、私が兎も角今日迄命を保ち勉强が出來たのも、天父の愛のお說敎の爲です、否天父の愛て有りました、天父の愛と云ふ事を想つたら死ぬなんて考へは浮ばん筈です、サア心を取なほして早く歸りましやう秀雄樣解りましたか』

秀雄は今迄俯て居つた顏をすつと上げ、その表情の力に富だ明かな涼しい眼には一ばい感謝の涙に滿ちて居る『モウ解つた、僕が……僕が惡かつた、繁子樣切望僕の罪を容して下さい、全く惡魔の誘惑の苦めに會ふたのだ、畢竟僕の意志の弱のと信仰の薄かつたのだ容して呉れ給へ』

溢るゝばかり熱誠に富だ答に繁子は頰笑ざるを得なかつた、かくも自分の言葉を解して呉れたかと思へば喜び此上もない『何も容す容さぬのでは有りません私に謝す事は有ません、天父に御祈りなさい、私も共に御禮申しますから』いつしか海岸通へ來りぬ、『秀雄樣もお別に致します、決して短氣なお心を出してはいけませんよ』『決心した以上はそんな氣も起りません御安心下さい左樣なら』『左樣なら』

＊　＊　＊　＊　＊　＊

荷物を引纏め古郷へ出發する朝、繁子は新橋まで見送に行きぬ、涙を振て別れし武村秀雄の前途を見て居て下さいと云ふ言葉と共に汽車は停車場をはなれぬ繁子

は影の見へぬまで眺め居たり、われと氣が附きたる頃には今迄多く居りし人も姿見へすたゞ場内を掃除する驛夫のみ

＊　＊　＊　＊　＊

春去り秋すぎて人々花に浮出る頃都の諸新聞に名譽此上もなき思賜の金盃を尊なうせし優等生武村秀雄と報道し有りき、其より數ケ月の後、工學士武村秀雄は某女學校卒業生なる多田繁子と目出度華燭の典を上ぬ。

秀雄に對する繁子の説得は、少し角があり過ぎて、姉が弟に向つて言ふ樣な口吻であるが、元來此小説は、一個の抽象したる觀念から來て居るだけ、つやが乏しいけれど、讀んで人か導くものがある（選者評）

新刊紹介

▲はつしほ（幸田露伴篇）。讀賣新聞に出でたる四行詩を集めしものにて露伴系統に屬する新體詩の風を窺はんとするには本書を一讀するの必要あり詩風は凡て穩籍明瞭を旨としまゝ輕快にして人を欣ばすものあり蕨葉氏の畵を色刷として挿み袖珍形クロース表紙百七十八頁の可憐なる詩集なり（定價四十錢京橋區中橋和泉町泰山堂發行）

▲水彩畫手引（三宅克己著）。風景水彩畫に於ける三宅氏の技倆は、何人も之を知るが氏は此度水彩畫を學ぶものゝ手引にもと一冊の書として獨學者の爲に著述せられしものは本書なり先づ繪の具の事より説き出てゝ道具の扱ひ方、寫生の注意に及び空の描法、樹木草花の描法、山川雨雪、人物などの描法、圖題の選擇等を細く懇ろに敎へたり文章は平易簡明、初學者と雖も容易に了解すべく別に氏自筆の水彩畫十數圖を挿み一々實際に就いて說明したれば手引としては殆んど遺憾なし（定價七十五錢小石川久堅町日本葉書會發兌）

○寫眞を求む！（本號より掲出す）

御遠慮深い諸孃に記者から折入つて無理なお願ひを申します、即ち諸孃の御寫眞を頂戴又は拜借いたし度い事で、一般に諸孃の風姿に接したいとの希望もありますし、讀者相互の親密を計る爲めにもよろしと思ひますので、今回から御求めする事となりした、寄稿者は勿論ですが、普通の愛讀者でも宜しく記者の求めを快諾せられる方の御寫眞を得たいと存じます、就いては大躰のお約束を左の通り定めました

▲寫眞は寄贈者の都合にて御望みに依り御返送申上げること▲御返送すべき寫眞は叮重に取扱ふこと▲一人の姿でも家族と御いつしよにても親友と共に撮影の分にてもかまはぬこと▲拜見の上紙上に出すと否とは記者の選擇に御任せ下さること▲紙上には國名と姓名或は雅號のみにて發表すること

特別第二賞

○四季の雲

香川縣大川郡三木松　紫菫女史

春の雲は柔かにして温和なれど示すが如く、夏の雲は自由にして變幻出沒機敏なれど敎ふるが如く、秋の雲は淸淨にして淡白なれど諭すが如く、冬の雲は嚴として多言するなかれと戒るが如し。

此一文出て、創めて雲の默示を啓く、天意か人言か

特別第三賞

○大嫌

肥前　立枝芳香子

嫌な中でも朝寢と、無理に食物を進めらるるのと、瓜の曲つたのを料理するのとそれから女の髪のやつれたる、白足袋の汚れたのを穿くのが私大きらひ。

唐瓜は不平、眞瓜は得意

天

○古き寫眞

神戸税關官舍六號　勝田かつ子

手文庫の底から出た古寫眞、裏に明治廿六年撮影としてあるのを見ると、姉様は七八つの切下髪、紅葉の様な手で母様の乳房を無心に握つて居るのは妾。あゝこんな時代もあつたのかと思はず頰笑まれた。

人多く我顏の歴史を知らず

地

○家内

大和國宇智郡大阿太村佐名傳　小山ふさ

私の家内は四人であります、父は毎日馬おいに。母は毎日花賣りに、兄は村役場の小使に、私は獨り留守番を、

太古の家

人

○妾の願ひ

大分縣豐後國直入郡竹田町　田能村ひさ子

人の妻となつてから夫によくかしづき舅姑によく仕へ子供の敎育に心を用ひ一家華美に流れず能整へ家内和氣あいゝとして樂しく過したいと思つて居ますのよ

女大學も縮むれば一篇のハガキ文たり

秀逸

○梅　豫州 みどり

九本ある、梅の中で、此古木を、一番兄様が愛して、居なされたの、其で、一昨年御出征なさる時には、之れの實を、澤山砂糖漬にして上げましたが、いよ／＼、明日凱旋なさるので、立派に早咲きを生けました

始あり終あり

○悪いまじない　早蕨

いつもお尻の長いお客が今日も亦來て居るので箒に手拭で頬被りさせて置くと腕白者の武坊が是を眞先に押立てゝ入つて來てお客の周圍をグルッと廻つた。

主客驚倒す

○歡迎　下關 田中けい

私は此頃兵隊さんをお歡迎にまゐりますのですが、どの兵隊さんを見ても、皆憔悴けた黒い顔に髯をいつぱい生やして入被います、私はそれを見るたびにいつも涙を溢して居るのです、

少女涙ありて國亡びず

○御化粧　大阪 ゆかり

お居間へ行くと、姉様は、お出掛けの支度最中。なまめかしい白粉の香は、室中いつぱいにひろがつて、錦の帯は、ゆるく流れて居る。

誰か軽羅となるものぞ

○冬の一朝　加賀 かをり

枕元の目覺がけたゝましく鳴るので、是非なく起きて井戸端に行くと隣の橙が七分赤らんで見える、數へかけたが數へ切れず軒を見回すと半皺のよつた大根がさもだるさうに竿に縋り附いたのが二束。

井戸ははれつるべ

○椿　名古屋 中村よし

二坪の小庭に、買ひ求めてから三年になる椿が一本あります、此椿は毎年四花より多くは咲きませんでしたが、今年は如何なる事か蕾を五ッ持ちました、之は定めし兄さんが、凱旋して來るからでありましよう

來年六ッ咲けばお嫁に行くしるし

○日向ボッコ　陸前 八崎靜子

「夕ゆめ見た横濱で大きな船にのりこんで」と歌ひながら裏のお庭でお姉様と毎日小春日和のあたゝかなお日様を肩にうけて、日向ボッコをやるのよ

村嬢の口吻躍如たり

○蟲　備中 さゆり子

今日習つた唱歌ひいて見んと、立寄る窓のオルガンの上に、美くしい蟲がとまつて居た、庭の芝生から來たのか知ら。あゝ!! ほんとに、優しい蟲!

ふと氣がついて、手早く寫生しておいた

秋の譜成る

○歸途　和歌山　西村長子女

野中の細徑に藥屋四五戶、乞食の家にも佐保姬は宿り給ふよ、厠の垣をかこみたる竹籬に白梅の辮跚ぼれかかつて、螺鈿を鏤めぬ、此處小便無用と立札ありたかりし。

彩筆

○兄上樣々　近江　石川里子

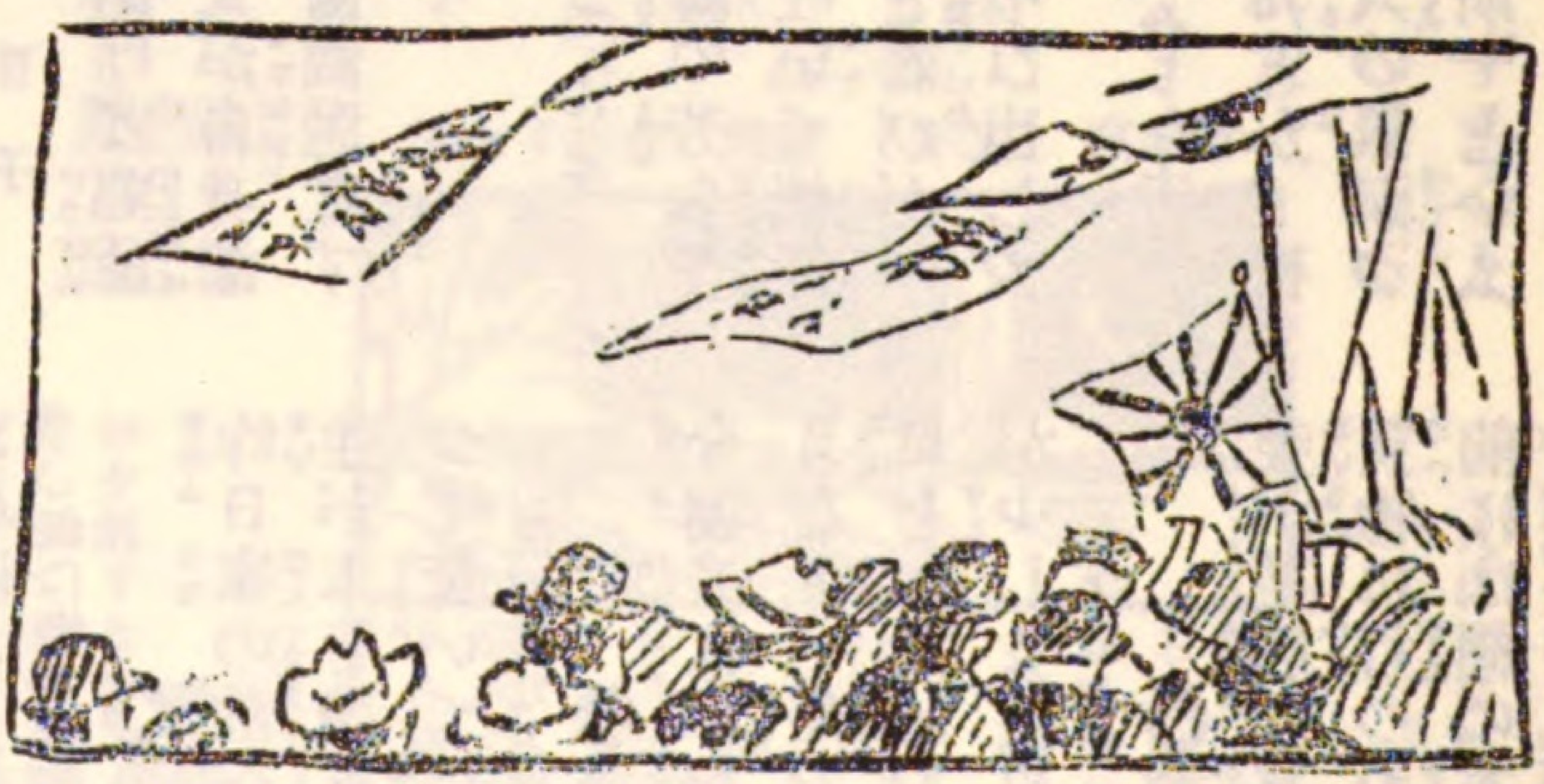
妾も今度小學技を卒業しましたから、女學校へ入學と思ふて、兩親に尋ねるとお止めなさいと云はれます、間も無く「郵便」と云ふ聲に飛むで行くと小包一個あけて見ると兄上樣より妾への袴一着。

原作の題は只兄上樣とあり、今、樣の字一つを附加す、一字の增減も忽にすべからざるは文章の秘訣

○不幸中の幸　廣島　正木

今日か明日かと危ぶまれし我病ひ腸窒扶斯も天つ惠みや深かりけん今は全く下熱して今日で一週間あゝ不幸中の幸なる哉いざ今日迄の事老いませる我古里の母上に告げ參らせん

兵士の凱旋（選外）　府下瀧ノ川　溝口みつ子



此意志ありて病にも勝てり

○世渡り　京都　玉川雪子

兄が叩く太皷につれて、弟は舞ふよ越後獅子、お獅子舞つたよ、お獅子舞つたよ、あゝお獅子、お獅子文讀むことも、ならずして、二度とは逢はぬ大切の、幼な時をば過すとは。

親は獅にも產まざりしを

○長夜　小田原　久風

まばゆき斗りの、電燈の許に、母樣の目鏡越しにてお裁縫、私は其おそばて、お手習。ふたりの下女は、女の室で、一生懸命ボートレース。

昔の白河夜船、今のボートレース

○養生　名古屋　熊澤たか

わたしは近頃、非常に身躰が衰弱して來ましたから、母樣の言付て、朝、豆腐の生汁一合、夕方に、豆腐半丁づゝ、養生に食べてをります。

豆腐づくめはチトをかしい

○夜の魔物　甲斐　ゆたか

夜の十二時頃、ふと目がさめると、屋根にさわ〳〵ッさわ〳〵ッと聞える、風もないのに何物かと思ふとこわくつて、夜具をかむつて寢てゐた、翌

る朝母上につげようと起きたら、表が一面に眞白くなつてゐた、

文中、雪の字をかくす

◎郵便配夫　徳島　三木百子

暴風雨の宵、頻りに門扉叩く音あり。漸く開けば郵便の聲に、出でゝ受取るに年齒六十近き老配夫が自身濡鼠となりながら、是ばかりは濡らさじと、雨滴滴なす合羽の袖深く護りしハガキを渡し行けり。

職業は神聖なり

◎芳ちやん　金澤　山本せん子

雪に朝日の美しさは何とも云へぬ今しも御隣の芳ちやんは御庭に雪達摩をこさへ縁側に濃い息を吐いて恍然休んで居る、ふと空を見るや向ふの屋根にとんびが一羽彼方向ひて見され、此方向ひて見されと唱ひ出した

北國鳶のこはいろ初めて聞く

◎化物屋敷　伊勢　守岡みちを子

村の翁媼の話では、何でも迷ふ佛があるのだとか、夜深けて妖鬼が顯れるといつて、絶えて住む人の無かつた空屋敷に、二三箇月前から『英數學教授所』といふ表札が掲げられて、日夜咿唔の聲の絶間がない。

妖怪も外國語は知らず

◎氣がかり　徳島　木戸玉緒

少さき時女の子がお嫁に行くと姑に種々苦しめられると聞きてあたしお嫁に行くのこはくてよと云て居たが今早やお嫁に行かねばならぬ樣になつたが妾の姑のお心はどうかこうか其れが氣掛りよ

氣に掛るが既に衝突の遠因

◎馬鹿　東京　紫星

昨日家の前へ荷馬車が暫く止つて居た時向ふから一書生が本を讀みながら來ていきなり馬の鼻面へつきあつて驚いて馬鹿と云つてとをりすぎた

眞面目なる滑稽

◎湯たんぽ　京橋　波瓦

今朝妾は、椽側にあつた、湯たんぽの上へ乘たら、いきなり、足をすべらして、庭へ落た、其時妾は、少し足をいためたのに湯たんぽは何もしないで、只、お湯が少しこぼれてゐた許り。

マアあぶないこと

◎世人の心　千葉　武田たき子

妾が某店に買物に行くとそら親切に見たことよ、後又買物に行つたら今度は前と打て變つて不親切てある。前には絹の衣を着て行き今度は手織の粗末なのよ。

馬士にも衣裳

◎弟の手柄　上毛　磯貝すみれ

今朝は七草のお粥をたくのでお勝手で母樣が大騷ぎ清やまだ薺が無いよと仰しやると五歳の弟僕が摘んでく

ると謎を手に飛び出した、やがて歸て來たのを見ると之は驚いたお祖父樣の御丹精の福壽草の蕾

踏を七草に用ゆる風俗ありと見ゆ

埼玉 山口くに子

○恥かしい

姉さんがくに子さんも今年は十六におなりですからと仰有つて廂髮へ少しおまじないほどたぼをだして結て下すつた始めてたぼをだしたので人に見られた時なんだか妾恥かしいわ

肩過るまで——

○遺愛の筆　米澤 荘田菊子

私は今紅梅の根本を堀つて、そが遺愛の筆を葬りました。操ちやん、僕が戰地で亡つたら、忘れずに此筆を愛木下にうめてくれ、とは日頃、梅好きな兄樣の、是が最後の御言葉でしたもの。

言外の涙

○書齋　紀伊 須美江子

妾は母樣にお願ひ申して、今年の秋收穫しまふなり、庭の片隅へ小さな茅ぶきの書齋をたてゝ戴きましたの間は床と押入をとつて四疊半、妾これを殘月庵となづけましたよ、

殘月庵は陳腐、室にふさはず

○有感　尾張 渡邊霞石

腰も種蒔くに都合好い程に屈み、年も、もう恰度には直に手も屆き相な年恰好のお翁さん、何だか嬉しそうにほく〱と麥を蒔いて御座る——あゝ未だ死なぬつもりだそうな！植ゑて、熟つて、孫の子の手切る迄も!!

人は死なむ、汝のはたらきは永遠に死せず

雪の夜（選外）　靜岡 菅谷すゞ子



○春風　宮城 浦 子

心地よき春風に誘はれて池めぐる、築山に上り見つれば露含める葉には小蝶宿りて梅花二片三片妾が袖にふりかゝり、仰ぐ御空に金糸の亂れし如き夕雲美はしう、窓よりは弟の笛の音、もれて聞えぬ。

○袴の裾　長野 淺野曉星

お正月、學校の式を濟ませて家へ歸つて來て大急ぎて炬燵へ、——、あら姉さんこげ臭いよと妹の聲に驚かされて見ると惜しい事新らしい袴の、裾が黑こげ、だから、女は御行儀善く、あるのですよと、母樣の御小言、

○最後の光輝　下谷 太田あきつ子

燈火の滅せんとするや、必ず一度は强明となり、夕陽沈まんとする時は海に山に美しき夕榮あり、その最後の光輝の、いかに華やかなる事よ、人の身にして最後を飾るべき光輝を放つ者少なきは、そも何の故ぞ。

○樂しみ　信濃 中村ちか子

お夕飯すまして、お父樣と、お母樣と、弟は先に、私は洗物をして後に、皆んなて炬燵を圍んで、色々の面白いお話しするのが何よりの樂しみ、炬燵は和合の倶樂部よ

○驚きし事　越北 花代

避くる間もあらばこそ身戰きて流邊にすくめば鞍の上より誠あり力ある聲してお氣の毒でしたとほゝゑみて……あはれ情を知る爪人

○日記　福岡　大和きく子

あら、まあいや！八日間もつけ忘れて私どうしよう、仕方がないわ、ては今日からきつと……だけど今朝は母様にしかられたから、じやあもうついでに明朝からにしよう、

○即興　伊勢　寺四せい子

或春の夜でございました、あまり月がよいので私は庭の泉水のほとりを散歩してゐますと、廐の方で「この畜生何をするんだい」と馬を叱る三太の聲がしました、そこで私は「別當の馬しかりけり春の月」と詠みました。

○慰問袋の主　飛驒　萬小夜子

花野馨子、何と言ふ優しい御名だらう、きつと十七八の美しいお孃さんに違ひない早く御目に懸つて慰問袋の御禮を申上げようと應接所に待つて居ると、頓てドアを明けて這入てゐらしつた馨子さん、乳婆の膝に眠つて！

○紅梅　因幡　みどり子

故郷の友より「笑み若き寒紅梅に淡雪のかゝれるさまは何ともいへぬ風情に候、封あらばこの一片を包みて參らせんを、梅も本意なう候はんかと、足らぬ思ひのいたし居り候」と

○山彦　伊豫　眞鍋みゆき

今朝懐しい友に別れて歸途に着た嶮しい道をよぢ上つてやつと絶頂に達したあゝ春様の家はあの森の向ふだあれ木の間から白壁が!!思はず春さーんと叫だすると向の方でも春さーんと

○愛弟　豐後　鈴木芒

靜子様の寫眞に、變な髪を晝いて、妾に笑ひ泣きをさせた弟は、妾に叱られて、今泣き寢入りに眠つて居る。さて夜は更け、冷たい風が一陣。弟は續けさまに咳二ッ三ッ。妾は狼狽てゝ蒲團を着せた。

○思ひ出　栃木　非出翠子

父上の植置きし、黄菊白菊二ッ三ッ手折りて、妹と共に實家ごととして、父上にしかられしは、最早八年の昔あはれ、今一度其の樣な、無邪氣に歸る日はなきか

○歸省　上總　田村濡子

急に歸る事になつた三年振の古郷、懐しい山も川も漸々に近くなつた、汽車から下りて一二町我家の門、妹はあれ姉さんがと嬉しさに駈け込んだ、老いたる母は能くお前まあと言つたぎり、後は涙に物を言はせた

○己が投書　大阪　玉木

今しも郵便屋の入れて行つた女子文壇を、妹が見て「姉さん今度の繪葉書見て御覽きれいてすよ」と私に渡した。けれど私は表紙も水彩畫も何も見ないでずん／＼と中を一心に探した結果顏を掩ふて泣き出した。

○あゝ先生　近江　白蓮

こゝ二三日は何故か岐阜にわびずまゐし給ふ、したしの先生の事ども、思ひ出され常になくめいるもことはりや、あゝ先生は病になやみ給ふとか、つばさあればと思へどなきをいかにせむ。

○花選み　北總　大崎紫水女

氣高い菊、美しい海棠、潔よい梅、麗な桃、皆いやそれなら、紅いばら、黄な山吹、紫の桔梗、白い萩、それもいや、妾はあのすなほな藤が一番すき……あゝ天國の姉さんの名は美しいそれである。

○秘密　和歌山　平松たれ子

一生徒己が秘密を一人の知己に「誰にも漏し給ふな」と告げぬ。知己は又他の知己を持てり、之に語るに彼の秘密を以てしぬ、而かも「誰にも漏し給ふな」とて。かくして一人の秘密は遂に全生徒に知れ渡りぬ。

○旅立　大阪　喜佐子

今日は父様お旅立、弟も私も皆揃つて玄關へ出てお送りする。荷物は澤山車の上に載せられた、所が切符を求めに行つた召使歸つて來て「今日は船が出ませぬので」とすましたもの

○我が家　近江　遠藤ふさ子

まちにまつた休暇がきた、大急ぎて歸省すると、お母さんが間もなく産氣づいて男の子をお産みなさる、兄さんも歸つていらしつた、妾の成績もわるくない、お父さんのお顏には喜悅の色が滿ちてゐる。

○櫻の一花　山城　山本ふゆ子

冬の日がゆるく光りをなげる南のえんに今ふと古箱から取り出して智盡集をあけたするとはら／＼白い物が地に落ちたそれは色香もうせぬ櫻の一花であつたあいつの春の形見であらうかあはれ

○數學　南品川　霜水

私が書齋で一日算術書を繙いた、ふとした好奇心にかられて比例雜題の九番を解いた始め圖をかいたり物に當はめても解けなかつたがふとした事に氣付いてからすぐ後より來て答が合た時の嬉しさ思はず飛び上た

○元旦の買物　神戶　ぬい子

私は今年の御正月に小使錢が一厘も殘さませんでしたそして歲暮を持つていつて御ためにに戴いた廿五錢の御金で學生日記簿を買ひました是に本年中日々爲すべき事を記して後に悔ゆる事のないやうにと思つて

○霰　丸龜　みどり女

氷のトンネルを、ぬけて來たかと疑はれる、冷たい風が、一しきり吹いたかと思ふと、やがて、板屋に響く急霰の音。今迄すや／＼と眠つてゐた弟の露ちやん俄かに、眼をばつちり、廻らぬ舌に霰やこんこ。霰やこんこ。

○大氣焰　石川　うもれ木

遠き未來の事であるが、私の夫即ち私を妻にした其人こそ世界第一の幸運兒であらう。見よ如何して我は夫に仕ふるかを。

○平和の福音　堺市　竹叟文子

碧松十里、波は白砂を洗ぎてこの春の曙、ゆたりゆたりと流るゝ、黄雲の蔭より靜かに舞ひ降る白鵠の一群、あゝ春の女神が麗かなる地の凡てに、平和の福音を告ぐるべく天降りますのではあるまいか。

○虛榮心　宮崎　若かえて

虛榮心虛榮心程いやなものはない、いくら絹を身にまとつても、香水をプン／＼させて居ても、稻を刈つたり、お芋掘つたりする、田舍少女の方がいくらか、樂しいか知れないと、私は思ふ



ゆきがけ（選外）　大坂九條町　赤崎たか子

○庇髮　橫濱　寺田光子

祖母樣は大のハイカラ嫌ひて、庇髮に結ぶといつもにがい御顏をなさる。桃割に結ふといつもにこ／＼遊す。

○紅菊　山梨　伊藤睦子

朝起きて裏の雨戶を押あけて見ると宜ちやんが泣いて居るのでなぜ泣くのかと問ふたら庭の南天の木の方へ指したので見ると昨日迄美麗に咲いてた紅菊が今朝のしもて。枯れてしまつたのであつた

○一枚の羽織　伊豫　高橋かめよ

他國てたよる父母はなし子供三人いさゝかの俸給て大へん困つて居るとの友のお手紙にあの小紋の羽織賣つてこれは當座のお小使にてもと送た時のあの返事泣いてお喜びなさつた雄のお言葉私もうれしくて泣いた

○古雛　伊賀　木津君子

今日は桃の節句、妹と二人て、座敷を片附けるやら、掃除をするやら大混雜、やつと雛棚を造らへ、雛箱から一ッ／＼出して居ると、底から出た古雛。亡きお母さんが忍ばれて、そつと、接吻をしました。

○笑　大阪　江上かほる

世の物萬態活き初めたので、久しう物想ひに惱むでゐた美代子も亦色づいて來たが、それは春の風に吹れた爲であらうか。

○妾が嫌な人　飛驒　伊藤すゞ子

一、男の癖に香水等香はせて居る人、二、女の癖に人を人と思はぬ人、三、老人染みた事をいふ人、其他「らしからぬ」人、

○水仙　愛知　品子

あの白い奇麗な、なんともいへぬ、愛らしい水仙に、毎朝きつい霜のかゝるのが、私はいちばん、氣の毒です。それて私はいつも、水をそそいて、優しい花の蕾をたすけてやります。

○質屋　岐阜　梅村いく子

私の家は質屋です妹の時子さんはをさなくつてがんぜがありませんかられいさん家の質はながれるつてうちの御くらに大水がてますかと家内一同大わらひ

○雪降り　北海道　松井長子

今日はあまり雪が降る故か、昨日約束した冬月さんが、來ないので詰らなくつて、一人火鉢を圍み讀帶してたら、不意に玄關で下駄の雪を落す音がしたと思ふと、「松井様濟みませんわネ斯様に遅く來て……」

○午後　小倉喜代子妹

前の先生の所で御面御小手の音五時頃からは裏の錢湯へ人の足音からころ／＼すじ向のかし席の三味の音それにまじつて凱旋兵士を祝す花火の音ズドンパチ／＼と田舍町ですがそれは／＼にぎやかよ

○親　安藤ちと子

親の言を守るがいやとて家出した雛二、處は高田に名高き祝谷山の麓についた、之を眺めた道端の柏は雛二が袖を引き乍ら「たこらずに待ちなさい譬へ無理でも親の言」と戒めた、渓流端の秋蒲は歸れ／＼とまねいた、

○不思議　加賀　松原みつ枝

何故に、惡人！不具者！醜人！愚人！賤貧人！等を神は造りしか、善人！完備人！美人！智者！貴富人！等のみを造らざりしや、仰も不思議なる哉、神!!!

○目白鳥　大和　榮山利子

昨日弟の武雄が叔父の家で貰ふて來た、目白鳥が今朝どうしたのか、勢が惡るくて死にそうなので籠の口を開けてやると飛び出すや、一聲高くなつて飛び去つた

○琴　三河　澤田つま

思はず夜更した擁琴をそと床柱の下に凭せ、日記を記して居ると、コロン／＼と優しい空鳴の音、阿母様のお遺身、若鼠にでも傷められてはと振返つたら、二十五弦の黄金の流に花生の牡丹であらう二片三片漂ふて

○我父上　ひとは子

六十歳の父君富士登山遊ばされしとの手紙故郷からついたあまり目出度さにトッサ考へついた祝歌一首短册にしるし御送りせしに三日へてかの和歌は上出來にて父は大滿足せりとの反對のおほめに預りました

○しめやき　都子

一月七日、東雲の頃、掃き清めたお庭へ、お下りの、しめを澤山つみ、是に火をつけて樂しんでる小供、おしめの陷落萬歲とさけぶ、わきから、兄さんお餅が燒けてよ。

○仕上　上毛　增田まさ子

お正月に、人は立派な袴に絹の着物で、朝から晩迄、遊ぶのゝ、私は半日づゝ遊びて造りし花ちゃんの着物今日は立派に仕上り、其の着初め、まあ可愛らしいこと。

○繪葉書　伯耆　榊原松子

出立の前夜買ひ候ひし木履漸く低うなりて今日此の地に着き申て候、かよわきこの身のよくも來りしよと叔父上樣より御賞め下されしも誠やかうあるべしと存じ候。とは旅行中の姉上から杵築大社の繪はがきに書いて。

○妾の文　陸前　殘翠子

母様が柿を熟させやうと、俵に入れてお出ての時、此柿が色付いて熟すまでに、妾も勉強してきつとといふたに、姉が美しく色付いて熟したが、妾の文は何時熟すだらう、そして何時紙上に出るだらう、

○姉様と反對　上毛　眞砂壽惠

お正月月が來てもお節句が來ても姉様は一間に籠り何か物思にふけつていらしやる、そうしてたまには妾に今一度齢ちやんの年頃になりたいと云ふのよ、あゝどう云ふ譯だらう妾は一日も早く姉様位の年になりたいのに

○花賣女　京都　つゆ子

朝まだき、露深き紫野をたどつて居ると、上手から、頭に花を一ぱい、戴せた娘にやさしひ、娘がありましたア、此人達は、入瀨や大原の里からはる／＼都の門に花のせて日毎にひさん／＼花賣女なのであるア、、

○妾の愛物

秋田　大越幹子

妾が愛物は、物を食べぬ、嘶きもせぬ、幾ら書を荷着けても潰れもせぬところの、極温順しい駒でありまする、妾は學の花が手折らうと、ひたすら此の愛物に鞭つては文の林にわけ入るのです、記者様當て御覽、此の駒を。

○三月

佐賀　野百合

妾本年の三月ほどたのしい月は又となからう大佐の父上の凱旋なさるも三月去年中より滿洲に出張していらつしやる良人の歸國も三月三六の妹の理想のホームに嫁入するも三月あゝ三月のまちどおい事

○お爺さん

筑後　小野春子

ヘイ〳〵爺も今年で八十三になりまする、孫も五人もつてゐます、上から三人はお上にさしあげて、コーと一昨年の春から軍にも出ました、みんな凱旋して勲章まで戴いて、爺もお蔭で年がとれまする

○夕陽

栃木　小島朧月

赤城颪は漸く吹き止むだが急いで歸る田甫路、後からまだスースーと後毛を吹きみだされるのが煩いので、ちよとふり返るとまア美しいこと金の屏風に墨繪の遠山。

○水仙の花

伊豆　上原茂子

はら〳〵と白萩みだれ散るあした、私は戀しき友にわかれ、『友去る』と日記にかきて戸に立てば小窓を洩れてくる殘んの月に散つたのは、香り冷たい水仙の花

○殘月

赤坂　森ふさ子

向に一つ北の方に三つ星は日の出を待わびて居るやうにつかれた光りを投げて、殘月は松の木に風をよけて居る、けたゝましい鳥の一聲、世は全く明け放れて月姫は一枚〳〵と緋の衣をぬいて、星も塒所へと消えぬ



石けり（選外）　神戸市永澤町　水越たつ子

○妾の務め

王子　朴蝶子

お小使の中一日二錢宛と髮を自分で束髮に結ふて其髮結賃と髮飾りのお金とを毎月ためて置いて毎月末に是を恤兵部に寄附するのが妾の一月中に於ける最も嬉しい樂しい務であります。

○不幸のかんざし

嶺　月子

くず紙籠の中で悲しげな聲で、「嗚呼お情のない方よな、始は私を愛て方々へお伴をさせ、少し油がしみたら、新に買のだと私をいじめて此様な處へ押込てあゝ悲いと泣き始めた、

○たのしみ

京都　秋月清子

嵐山の紅葉に、雪の金閣寺、朝霧はるゝ加茂の川はよけれど、姉さんと、青い〳〵野原へ草摘にいつて雲雀と一しよに唱歌を歌ふのが私の第一の樂しみですよ、

○母こゝろ

神奈川　中村三金子

妾が東京の某お屋敷に御奉公をして居た時、いつも母様からのお手紙は半紙で、筆末へ、此書御らんの上は枕の換へ紙になさるべく候。

○樂しき我家

大阪　池田小菘子

夜漁にいつた兄弟の一行が、がや〳〵と歸つて來たので、私はすぐ洗足を取らせる、お母さんは、獲物のお料理をなさる、五人の兄弟は、火鉢の緣を、とりまいて、いづれ劣らぬ機嫌話、それは〳〵賑やかな事

○冬の夜

三重　山本藤子

冬の夜の寒さ身にしむ我臥床の邊に來て、風邪なひきそと、夜着引寄せつ四隅たゝいて行き玉ふ老母の影をそと伏し拜みつ、何にもいはず夜た

〻枕をうるほしぬ。

○朝　　四谷 山中芳子

味噌汁の香たかき臺所には、姉樣の膳部とゝなふる音が、朝風と共に、身を切るやうに聞えて、堀井戸は、ぽつ〱と水蒸氣を吐いてゐる。中庭の一隅にたつた妾は、綻びかけた梅の花を、祖父樣に知らせんと、敷へ居れば、折しも弟の聲、「姉さん、御飯。」

○朝起の習慣　　福生村 森田奈賀子

鷄の八聲はまだしもの事幾度ゆり起しても朝眠の追加を貪る程の夫てしたが此頃坊やが早く起きてやんちや言ふ眠て計りも居られないと見へて一朝二朝と早起きが重てとう〱坊やに朝起の習慣を付けられました。

○花園　　和歌山 津村美智子

妾と姉さんとて庭に小さい畑を作つて、色々な花を植ゑてあります、紅も黄も紫も白も今盛りてす。二人が朝夕水をやると必と蝶が飛びますの。蝶も妾等を助けて花を咲かせてくれるてせう。

○隱居所通ひ　　京橋 雅子

「御祖父樣、一服召しあがりませな」と妹が楓の樣な手を付いて妾のたてた濃茶をお進め申すと、少し下つた目じりの處に百重の皺の波を御寄せになつて嬉しさうに御笑ひなさる御祖父樣の御顏！それを拜するのが樂しさに二人して日曜每に隱居所に通ふのである。

○弟の日記　　但馬 森垣文子

姉さん、先生のいひつけて今日から日誌をつけましたから見て下さいつて、さも嬉しさうな顏、讀むと「今日は天から雪が降つた」とかいて居たので思はず吹出した

○母さま　　大阪 杉田秀子

私のお母さまは、どんな時でも中々容易にお怒りなさらぬ。今までお母さまは私を、大層お叱り遊した事は一度もなかつたのてあつたが、この間、私が縫物をしながら居眠むりをして居るのをお見付なすつて、涙をこぼして、それは〱大層お叱になつた。

○お父樣　　信濃 なみ

内のお父樣は去年の春お母樣のおなくなされた後は兎角おふさぎ勝で平常お酒もよけいおあがりなさらないし又私等にもやさしくおあたりなさる。

○朝　　宮城 白菫子

まあ今朝の寒い事松葉か眞實の針の樣にま白くなつたよ、翌朝、何と言ふ冷だろーおや雑布のかたく氷つた事火にかけても溶けないよ、今朝は一番だ次の朝ア、寒い〱道理てこの雪だもの今朝は一番寒い

○姉妹　　岩代 杉原たかやす

今つくろつた、障子のしわは、糊が乾くにつれて、なくなつたが、姉樣の額のしわは、何したらなくなるてせう、せめて妾が、男子てあつたら、姉樣のお相談相手になることもあるだらうものを……

○神の子　　常陸 石塚靜江

君ちやんと芳ちやんとは書齋の前てお飯事してゐたが急に氏神樣の前へ驅て行た。何をするのかと見てゐたら、跪て「氏神樣氏神樣何卒水仙の花を下さい」と恭く禮をした。お下のリボンは春風に翩翩。宛然神の子!!

○朝　　王子 秋津君江

工場通いの女工が通り過ぎると横町の孝行娘の納豆賣が來る頃裏のお寺て坊さんの讀經が始まると、千鶴子さん行きませんかと誘に來るたか子さんの可愛らしい聲が聞へた頃。奥てお父樣の新聞を讀むのが聞ゑる

○春の散歩　　西多摩 愛子

春の日麗かに、花笑ひ、鳥歌ふ、好季節、幸ひ、今日は日曜故郷へ散歩にゆこうと、さて郷へ行き水神樣の所で景色を見ると、下は玉川、向ふは青々とした山つゞき、東は川にそうて限りもなき櫻の花

○叔父樣の繪葉書　　牛込 林安津子

出征の叔父樣から美はしき繪葉書が參りました見ますと「四日門司に凱旋上陸仕候征旅の長日月後援の榮を辱り今日あるを謝し候委細帰郷より」と私は每月一二回御便り致した計りてしたのに後援なんて嬉し涙が出ました

"I shake my curls," said the youth, "and the air sparkles with sunshine. In a moment the snow is gone."

"I say to the birds, 'Sing no more. Leave me,' and they spread their wings and fly for away."

"I say, 'Little birds, come back,' and in a moment they are back again and singing their sweetest songs to me.

"No one can count the leaves," said the old man, "but whether I shake the trees with my icy touch, or whether I turn my cold breath upon them, they fall to the ground with fear and trembling. Are there any rumors of my deeds as great as that?."

The young man answered gravely, but with a laugh in his voice, "I never saw any leaves falling to the ground, for when I appear, they are all fair and green and trembling with the gladness of my coming."

So the two talked all night long. As morning came near, the old man appeared weary, but the youth grew merrier. The sunlight brightened and the youth turned to the open door. The trees were full of birds and when they saw him, they sang, "O beautiful Spring glad are we to look again upon your face."

「私の垂髮を振りますと空中日光て燦めきまして，雪は直ちに消えて仕舞ひます」。

「俺は小鳥に，モー歌ふな,去れ，と云ふと鳥は翼を延ばして飛び去るのだ」。

「私は，小鳥よ，立歸れ，と申しますと見るが中に歸て來まして實に可愛らしい歌を歌つて呉れます」。

「木の葉を數へ得る者はないが」と，又老人が續けた，「俺が此冷たい手て觸るか，又は，冷たい息を吹きかけると葉は皆恐れ戰慄して地上に倒れて仕舞ふ俺の功績が評判だとて，これ迄にはいくまい」。

青年は眞似目に，其聲には笑の音調があつたが，老人に返事をした，「私は葉が地上に落ちます處を一度も見た事が御座いません，何時も私の參ります時は皆が綺麗に青々して，私が來るて嬉しがつて震へて居ります」。

斯く兩人は夜中談したが，夜明頃に老人は疲勞した樣子．其に反して青年は增々元氣てある。

太陽が輝いて來たので青年は明いてる戶の方を向いた．樹木には鳥て滿て居り,「オー美しい春君，又御目に懸りますので本當に嬉しう御座ます」と歌つた。

"I am not," interrupted the old man. "I have heard rumors of your great deeds," said the youth, "and I came to see whether the tales are true."

"The deeds are more true than the tales," answered the cross old man, "for the tales are never great enough. No one can count the wonderful things I have done."

"And what are they?" asked the youth with a merry little twinkle in his eyes that would have made one think of the waves sparkling in the sunlight. "Let us see whether you or I can tell the greatest tales."

"I can breathe upon a river and turn it to ice," said the old man.

"I can breathe upon the ice and turn it to a river," said the young man.

"I can say to water, 'Stand still,' and it will not dare to stir."

"I can say, 'Stand no longer,' and it will go running and chattering down the mountain side."

"I shake my white head," said the old man, "and snow covers the earth."

「乃公はしない」と老人が口を入れた.青年の云ふには,「私は貴下の大功績の風聞を耳にしましたので，噂が實際であるかを觀に參りましたので御座います」

「俺の功績は風聞より遙に勝て居る．到底噂位が適ふものではないさ．誰だつて俺のした偉業を皆數へ盡される事は無い」と氣六ケ敷い老人が返事した。

「何麼御功績で御座いますか」，と青年は尋ねた，眼に光線で波が爍々する樣な輝を浮べて。「貴下と私と何方が一番大な事が出來ますか云ひ竝べを致しましょう」。

「俺は河へ息を吹きかけて氷と變ぜしむる事が出來る」，と老人の言葉。

「私は氷の上に息を吹きかけて，河に變ずる事が出來ます」，と青年は云ふ。

「俺は水に，止まれ，と命じて一寸とも動かさせぬ事が出來る」。

「私は水に，止る勿れ，と命じますと，水は物語りつゝ山を遶つて流れます」。

「俺は此白髮頭を振ると地上滿面雪て蓋はれて仕舞ふ」。

Gone away with their song and sorrow;
Only the river still flows on.
Hurry along, sorrow and song,
All is vanity 'neath the run;
Velvet and rags, so the world wags,
Until the river no more shall run.

F. E. Weatherly.

憂さと歌もて　彼逝けど
此河のみは　變化なし。
急げや急げ　歌(カワリ)や憂さ,
天が下みな　空の空,
浮世は貧富を　搔亂す
此大流の　涸るゝまて。

Winter and Spring

An old man sat in his dark, gloomy house. "Here is no one else in the world," he muttered, "who has done such deeds as I." A sound outside of the house interrupted him. "What can it be?" he said to himself. "How dares anything interrupt me? I have told all things to be still. It sounds like the rippling of waters, and I have told the waters to be quiet in their beds.

Some one opened the door and came in. It was a youth with sunny curls and rosy face.

"Who said you might come in?" muttered the old man.

"Did you not?" asked the youth, with a merry little laugh. "I am really afraid that I came without asking. You see, every one is glad to see me and"—

冬と春

白髮の老人が自分の薄暗い陰氣な家に居り,獨言を云ふには「先づ此世界に俺程の事業をした者はなからう。」

外で一寸音がするので,折角の獨言が中止された。「何だらう.何者が失敬千萬な乃公の邪魔をするのだかしら,皆の者共に靜かにしろと言付て置いたのに。何だか川がサワサワ流れる樣な聲たが,併,河達にも寐て居れと言渡し置いたのだ。」

或人が戸を明けて這入て來た。即ち黃金色の垂髮をした,色艶のよい美少年であつた。

「誰が這入れと云ふた」かと老人は小言を云ふた。

「貴下が仰しやいませんてしたか」と青年は愉快な笑顔をして云ふた。「實は,誰ても,私を歡んてむかへてくれ————」

女子文壇第二卷

英　文

津田梅子閲　河井道子訳

London Bridge

Proud and lowly, beggar and lord,
Over the bridge they go;
Rags and velvet, fetter and sword,
Poverty, pomp, and woe.
Laughing, weeping, hurrying ever,
Hour by hour they crowd along,
While, below, the mighty river
Sings them all a mocking song.
Hurry along, sorrow and song,
All is vanity 'neath the sun;
Velvet and rags, so the world wags,
Until the river no more shall run.

Storm and sunshine, peace and strife,
Over the bridge they go;
Floating on in the tide of life,
Wtither no man shall know.
Who will miss them there to-morrow,
Waifs that drift to the shade or sun?

倫敦橋

宮人乞食,　智者愚者と
堪えず橋を　渡るなり
襤褸,綾絹,　縄,劒,
貧富貴賤の　區別なく。
笑ひつ泣きつ　急きつゝ
隙もなきまて　行交へど
下に流るゝ　大川は
嘲み笑ひて　歌ふのみ。
急げや急げ　歌や憂さ,
天が下皆　空の空,
浮世は貧富を　擾亂す
此大流の　涸るゝまて。

戰爭平和,　暴に晴,
堪えず橋をば　渡るなり,
浮世の浪に　漂ひて
行手はさだか　ならねども。
誰問ふものぞ　浮浪人の
明日は何地に　呻吟と。

読友倶楽部

○好きな食物（課題）

○　赤穂　高谷はな子

妾の好きな食物は梨ビスケット瀆むしてす、この瀆むしはあまり他所には無かろーと思ひますからざつと紹介いたしませう、製鹽の時鹽釜よりポンにうつすとき先へ鷄玉子などを藁にて包み入れて置のてす、暫すると鹽の爲めにむされ、よき鹽味がついて居ます。

○　大阪　今出はるみ

私は大阪の者てすが生國が阿波なので少さい時からの好きな食物は新らしい魚類てすがそれも只煑て食ふのは嫌なので、オコゼの肉を湯てゆてゝ橙の酢と醬油を等分に交ぜてある器の中へ一切づゝ入れて食べるのてす。

○　總州　越川湖山女

妾は麥飯が一番好てあります いつても十五六杯づゝ平げます、生れてより親の乳をはなれて一度でもいやだと思つた時はありません。其の次はお雜煮てす今年のお正月も大な／＼おわんて妾の年則ち十七杯食つた。其の次は蛇の黑燒に蛙のナマスにさつまいもに西瓜に茄子に毛虫の黑燒に鰯にれづみの黑燒等は最も大好なり。

○　仁川　小國敏子

私すきなもの、澤山あるんですよ、云ッて見ましョーか、林檎もすき、ビスケットも、牛肉も、鷄肉も大すき、まだ／＼私のすきなものッて云ひ立てたら大變よ、明日のお晝すぎまでもかゝるんてすもの。

○　岩手　三ッ車女史

妾、田舍生れてすから、可味しいものとて食べたことがありませんが、餅とお蕎麥とが一番好きてす、だから子、皆さんが、貴女は、お父ざんのお娘さんてはないチー、と冡見されます、お父さんは、大のお酒好きだもんてすから。

○　小石川　佐川貞子

いづぞや篠ちやんと一所に、おしるこ屋へ行て食べたあのおしること、昨日お隣へ呼はれて飲んだ甘酒お正月のお雜煮節句のかしわ餅、今年始めてなつた林檎、うらの泉水へパタ／＼して居るお魚、父さんの、こしらへたおそば夕べ歌留多に負けて取られたあのお芋。

○　翩井　靜香

餅、おはぎ、汁粉、とうなす、てんぷら、とがうに、みそ汁、すし、卯の花、御所車、オムレツ、鯛のあまやき、小とり、羊かん、玉子やき、玉子飯、櫻飯、鷄のうま汁、饅ぢう、きんとん、鰹のさしみ。
アイスクリーム、コーヒ、麥湯、ひき茶。

○　埼玉　よれ子

私は遠方の學校に通ふ故朝飯は大急きて頂きます晝飯はお辨當てきまつたものです、それ故夕飯のとき家内中集まつて互に見聞した事を話し合ひながら生魚てあたゝかひごはんを食するのが何より大好てあります。

○　千葉　秀子

私の好きな飲物はまづ甘さけよ甘さけなら舌をやけどしながらも飲みます 次に好きな食物はおしるこのあとへのりまき又はぞうにをいたゞいた時はどさつぱりする物はないてしようてすから私は此は大變好きな食物の一ッあります。

○　和泉　光明女史

妾の一番好きな食物は、自分が丹精して、こしらへたお料理てす、次は時節柄の食物、たとへば松茸の頃に松茸と云ふ樣に、時候に適した物が大好てす、其次は食後の果物、今てしたら、御飯すましてから、御蜜柑一つても、頂戴するのてす。

○　芝　類川とき子

蒲鉾と鯛のお吸物と新らしき鮪のお刺身と奈良漬いり豆腐卵燒と鹿兒島汁と肉類一切（馬肉を除き）好きてす。

○　盛岡　江刺家つや子

あの妾は家中ては誰れも彼れも肉類は好きてすの父樣は冬になると鳥や獸等を病家から初中送り越されせすので度々自身て料理なさいますが妾其料理法を見る每に何だか胸のぐ合が變になります一番妾の好きな食物はおなばつかりよ凍える樣な雪を踏むて若菜を堀りにひろい畑に時々出ます。

○　青森　愛讀女

第一カステーラ、甘納豆、汁粉餅、牛ナベ、ゴボー、蛯のツクダニ、婚禮の時のお雜煮、ナスビの香の物、鯛のお鹽煑、燒芋、カント豆、アイスクリーム、衞衞酒、まあ…こんな物てすれ。

○　豐後　松艮かをり

アゴの落ちるやうな山海の美味よりも茶漬に香の物これが妾の理想の食てす。

○　信濃　山崎みき子

妾何の御料理甘味しいつて蜂の子の御料理程甘味しいものは無いと思ふ妾一番好きなのよ、去年の九月頃東京の叔母さんが入被つた時蜂の子の料理を差上げ様と學校で敎つた通り料理して上げると此んな料理食べないつて御被られる叔母さん妾折角料理したんですものと言へば漸く食べてから東京にも此んな甘味料理無いつて御被られたのよ。

○　淡路　三宅こつれ子

私の好きなのはお菓子ではカステーラ、ビスケツト、羊羹、菓物では密柑、柿、林檎、お魚では小鮎の酢味噌、鯛の濱燒、肉類では鳥類の肉殊に好きなのは嬉い／＼夕べ一家團欒の豆腐汁然し今では兩親は無く又遠い淡路に來て勉學の身ですから出來ませぬ。

○　常陸　太田女史

妾しの大々好きなのはかすてら、其のつぎがお芋のにたの、密柑、ばなゝ、も好き、御飯の御かずは何にも好きな物なし。

○　東京　なゝし

第一番に好物は栗のきんとん餅菓子おさつ唐なす洋食ではビフテキ、シヤモ、ウナギ、新澤庵、漬菜、奈良づけ、ジヤガ芋、むしぶ類、かまぼこ、おすし。

○　羽前　きよ子

私は、おかずでも何でも、淡泊な物が好きですから果物類等は、殊に大好物ですよ、當地の「やつなし」林檎葡萄などの滿鹽で漬けたの等は實に御いしいのですそして皆樣私は遊學の爲他人の家庭に、三四年居ります内に嫌なものもすつかり好むやうになりました。

○　磐城　雅　鶴

私は納豆餅が一ばん好物です、てこれをたべる度毎に見るもいやじやと母さんと兄さんにきらわれます。

○　長門　村田節子

私の一番好きな食物は裏の畑の大きい林檎、海苔卷のおすし、お饅頭、牡丹餅、珈琲、お汁粉それからあのビスケツトと御菓子は何でも好きですまた鎭守祭禮の時に燒く鮮かな大きい鯛と伯父樣が京都見物の御土產の有名な「鴨川のさぎしらず」。

○　北海道　松井長子

ふかしたてのホヤ／＼としたお薩、空腹の際にお砂糖のたんとはいたお汁粉、濃紫色のフサフサとしたブドー、淡綠色の上に紅斑などの斑紋のある中成子、（苹果の名）以上の四種。

○　中遠　伊東平子

皆樣下品だとて御笑ひくださるな私あの有名なそら俗に靜岡いもと云つて靜岡縣磐田郡大藤村の名產で甘藷を切つて干したのが大の大の好物よそれてれくし柿の樣に白く粉が附くともう實に言ふに言はれない程おいしいのよ。

○　東京　芝野水江

皆さんいぢきたなしだつてお笑ひなすつてはいやよ、好きな物はだれても好きだわ妾はどぜうの丸煮となまこの酢と松露のむし燒き香りは鼻に付いてるわ夫れからおさつは十本ぐらい夫れからおしることお萩餅は三四盆受合ひ夫れからあの大鰯の燒きたてもおいしいわ。

○　岐阜　梅村いく子

私は鳥類が好きて有升毎年御母樫の御家より山鳥をたくさんいただき升から私は誠によろこびます其の次には魚類が好きて有升是らの物を自分で料理しますと食するに又味がよろしいやうて御座います。

○　山形　たか子

私の大好物はおすもじにおうどんに栗に西瓜にそれから當地には櫻桃と申すものが御座いますが、これは赤い少さい實で誠においしいもので御座います、夫れから私共當地に參りまして驚きましたのは田に居る「イナゴ」をお砂糖とお醬油ていつて、おいしそうに頂ひて居る事で御座います、それに納豆も皆よく頂きます殊に、納豆餅などは大層おいしひといふ事て御座います。

○　和泉　辻林みどり子

妾の好きな食物と云へばすべて野菜のもてあつて中にも一番好きなのは「かぶら」「大根」です、どちらも一度乾かしてそれから漬物にするのです。

○　靜岡　道子女

妾が好きな食物は麥飯に三年味噌汁、香の物に澁茶。そして運動も好きですが又、女子文壇を讀みかゝると御飯一度くらい食べなくても宜しい。

○　信濃　山崎美きよ

妾一番御餅好きなの、七つのお正月に御叔母さんの宅へ招かれて御雜煮の御餅を十切食べて皆さんに驚かれたよ、御叔母さんが入被つて餅の話が始まると何日も妾の話が出る妾は恥しくつて。

○　高崎　露野愛子

私の一番好きな食物は岡源の栗のキントン鶉生のカツレツ、オムレツ、土產屋のカノコモチです。

○　近江　石川臥龍子

妾の好きな食物は澤山有升が其内で好きなのは「江洲阪本比叡山麓名物大文字納豆と汁粉ぜんざいとです又飲物では上等の玉露茶です」

○　芝區　かつ子

私の好きな飲食物は……と申しましても別にハイカラな物ではありません、遠慮なく申せば先づ海苔、肉類は何によらず好む、刺身(鮪)卵燒き、漬物、珈琲、ミルク、夏はラムネ、餅菓子類、果物類以上の物が主なる好物ですよ。

○　尾張　野菊女史

妾の好きな食物つて何でせう、餅かすしか赤飯か、いやそーでない、米の飯に豆腐汁、是が一番好きな食物!!飲物では、晩茶に一寸した茶菓子、是が私の理想の……いや好きな食物。

○　德島　多田秋月

私は貴魚は少しも戴けませぬが、やき鯛又は新しき鯛を三枚におろしあらを去り兩方を、くさ味噌に付けたるものと、鰹のお刺身です飲ものは、ひき茶の初苦を少し濃く點てしものなり。

○　小石川　きよ子

好きな食物澤山ありますが妾の一番好きなのは昨日今日の樣に寒い朝、早く運動してから母樣の御情の籠つたあつたかい御飯に御こうこで戴くのが一番好きよ、それから次には私のばあやが時々持つて來て呉れる田舍のおさつが大好物。

○　大分　すれみ

おしろこ、氷、牛肉、魚類、栗のきんとんは思ひ出しても口水がでます次はうれしのに當地名產クハイなどは私の大好物であります。

○　橫濱　文月

私御飯をのぞいて好きな物はおさつにもち菓子ごかぼです。其内でもつとも大好なのは、おさつよ。先日も私が兄樣に、「今年はお芋が不作の時は私の饑饉ですよ」と申しましたら大變に笑はれましたわ。

○　長野　小林柏枝子

妾の好な物を數へて見ると第一はお年越の晩膳にのつた鰤の切目に、屠蘇の酒、元日の朝のお雑煮とお燒、平常では煮溫飩に色の能い葱の香のぷんとするの、甘く煮た牛肉、薯蕷汁を啜いご飯にかけたの、等が妾の極好な飲食物です。

○　信夫郡　丹治はるみ子

妾の好きな食物は、水飴、葡萄酒、生菓子、あんずのかん詰、などです。

○　芝　杉水利子

皆さん笑つちやいやーよ私は鳥のお刺身と鮪のお刺身をあつたかい御飯で食るのと、うにと山蛤、松茸に蛤のお汁と海苔卷の太といのとおさつの煮たて、甘いものでは栗のきんとん、牡丹餅なら二三盆、羊羹と粉茶に鹽せんべいこれが好きな食物よ。

○　秋田　BN生

私の好きな食物は、餅、密柑、山鳥、葡萄、以下。

○　常陸　愛子

お雑煮、おすし、きのこ飯、なすのおし漬、お芋

○　相模　むすい

わたしの好きな物つて澤山ありますが中でも香の物が一番好き、みなさんはさぞ質素と思ふでしようが、それでも一番好き。

○　伊豫　白百合

私しの好きな食物は、まづ柿梨、ベイナップル、魚の刺身、牛肉のきんとん、ゆで卵子、茸、餅などであります皆樣お笑ひ成さらぬやう。

○　比叡の麓　四明の里子

妾の一番好きな食物とは斯の歌がるた會の時休戰によばれるお汁粉です。

○　伯耆　みさほ子

御飯では松竹飯果物では梨子とりんごが最も好きですそして菓子類ときてはカステーラと羊かんが第一理想の食物ですよ。

○　筑前　玉惠

ハイ、あの私の好きなのですか、それはもういたゞけないものはありませんがれよりぬきのところで極々新らしい魚の刺身とオムレツと上茶の濃いの、冷へたのとおすしとりんごとチョコレートと鯛の茶付けと……オヤもうよしませうホヽヽきりがありませんもの。

○　府下　磯ケ谷紫江子

私の好きな食物は鷄肉刺身牛肉鹿肉鯛鮭林檎柿栗薩摩芋杏子密柑瓜菓子煎餅羊羹最中カステラ大根蓮ねぎ豆うどみつばビステキフライサンドイッチカツレツ天ぷら壽司吸物そば梅干卵子牛乳等で取分け朝飯に味噌汁がないと御飯が食べられないし御飯の出來がよいと一日愉快で御飯の進む性です。

○　本郷　スミレ子

私何かすきつてておさつほどすきなものはあり

ませんわ學校からお腹をすかしてかへつてくると烟がぽつぽと出て居るの その時のうれしいたらありませんの。

○　　菫　女　史

折角の御尋れ故妾胸を開ひて申上げますが 妾は學びの閑に机の塵を拂つて、二三の友どちと相對し御芋でお茶をいただくのが唯一の好物です。敢てたわむれ申上げるてはありません、父母君より學資を戴いてをる 妾の身、恥しながら希望のある妾、是れが美味です。

▲新　課　題▼

▲理想の夫（〆切三月五日）

▲委細は前號に在り

▲我愛讀書（〆切四月五日）

▲現在の愛讀書にても以前よりの愛讀書にてもよし▲書名と著者の名を擧げよ▲愛讀する理由又は其書に對する諸嬢の感想等を述べらるれば最も妙ならむ▲文章は簡單にして明瞭なるを要す▲七行以内▲半紙又は罫紙に認むること▲國名と雅號又は本名を認むること

◎諸嬢の交際

○我東北の人々はこの極寒に饑に 泣き居る樣に候へば女子文壇の愛讀者諸孃より 髮結錢などを節しられて御送附あらんとを願上候 これが記を書くにも饑に泣く子の聲が聞えるやうに候 二月十一日（東北の饑泣女）○滿天下の女子文壇愛讀諸姉よ妾は伏して希上奉ります承りますれば 福島縣宮城縣等は大饑饉の由 誠に氣の毒の至りです何卒少しづゝなりとも皆さんの志を 記者樣の許へ送りまして御手數でも記者 樣から其地へ寄附致しましては如何で有りますか 御願です皆樣御賛成の上双手を擧げて頂戴な（北海道早來木鄕直枝子）○皆樣ご參考までわが町の 降雪をお知らせ申ませう一月廿九日宵から降つて朝 止んだ其の高さ二尺五寸翌朝は 三尺五寸これは當地方冬期中いつも一月頃にはふ るのです（羽後角間川町松田せい子）○皆さん新聞雜誌繪葉書などを御送り下さい三十名を限り雜誌 冒險小說詩集等を差上げますよ繪葉書は上等物で和歌 俳句を書いて 頂戴願ひ升よ（信州北安大町一二三內山靜子）○誌友の皆樣 の內で「すみれ」の押花御持ちの方はぜひ〳〵一本頂き度うござゐます 御禮は屹度差上ますからそれから 横濱のゆき子樣英文で葉書差上ましたに、 何の御返事も ございませんが、どう遊しましたか（茨城縣石岡町栗栖信子）○私は始めて 皆樣に 御目にかゝります 無作法娘ですがどーか宜しく御願申ます 就いては繪葉書肉筆のものを交換致したう御座います 又私は中等教育と申す雜誌を持つて居りますから 編物を送つて下ざつた御方にはそれ を送ります（香川縣高松市中新町太田醫院內田所孝子）○皆々樣御寫眞を御送り下され私からきつと 御返し申上ます（淡路玉津 名郡 洲本町一丁目高谷方橘菊子）○本誌愛讀者諸孃 妾しの 兄は久しく病氣でしたが漸く快方に向ひしが 何分無手にて運動するを好まんから娛樂て運動をかれて 致したいとの事故寫眞機械及附屬品共 御讓り下さる方は下名へ迄御一報 願 上候（加賀國石川郡鶴來町近藤淺代）○繪葉書や寫眞 を送くつて下さい妾は必ず先着の方には妾の寫眞を送くつて 上げます（千葉縣長生郡新治村 下吉井 大谷市太郎方高山千鳥子）○みな樣御寫眞を御送り下され 私しからきつと御返し申します 繪葉書の交換も願ます（淡路玉津名郡 洲本町中[illegible]前 木村方 白藤なみ子）○本誌愛讀者にて靜岡たか子と申す御方はもしや靜岡縣立高等女學校の 田中たかよ樣とはちがうでしようかもしやそうでしたなら誌上て御知せ 下さい 私も同校て 本誌愛讀者ですから（白百合）○愛讀者の皆さん繪葉書や寫眞の交換願ひます、 して妾に樂あみものを 御送り下されましたお方へは早速相當の御禮 致 します（京都市護聖院町中河原丹波屋方 木村花子）○親しき女子文壇愛讀者の諸姉に何卒 御交際を仰きます 繪葉書交換も（淡路津名郡野島村國分光榮）○繪葉書交換又は御手紙の御交際して下さ る方はありませんか必ず御返禮致します 又皆樣方の御寫眞を送つて下されば 妾もみにくきながら 妾の寫眞差上申候（東京市本鄕區春木町一丁目十八番地中島近子）○皆さんどうぞ エハガキや玉章や 寫眞の交換をしてくださいませんか必然相當の ものでお返し申ます から（越中國出町玉川筋五六一久保可美子）○諸姉上樣 以後は何卒御交際を願ひます（鹿兒島市易居町二二五 宮內ふみ子）○私も第拾號より愛讀者になりましたから 姉君樣よ以後は何卒宜しく御交際を願上ます（鹿兒島市荒田町五百四十番戶 藤野冬子）○天下諸孃よ希願ふ各自の寫眞交換を乞ふ 寫眞を送らるゝ 方には私の編物二品と面白き書類三册と 私の寫眞を差上ます 寫眞二枚以上送らるゝ方には特別 繪畵北海土產 美人其他種々の繪葉書を呈す（北海道釧路町大字眞砂町二八番地 前田ヤス）○栞

や編物をお送り下さる篤志の方には 先着十名に鬮のよだれかけを其外へは梅の肱突をさし上ます(高崎市白銀町二岸友子)

○御寫眞を御送り下され私からもきつと御送り申しますから そして繪葉書も御願ひ申上ます(淡路國津名郡假屋町渡瀬利一郎方深雪)

○敬する愛讀諸孃よ願くば今後の御交際を給はらんとを 倘美はしき玉章や繪はがきの交換を乞ふ(熊本縣八代郡太田郷村本郷いち子)

○皆さんの内で御不用の寫眞御持ちの方は送くつて下さい 上田繪葉書一組宛上げますから(信濃上田山口山崎美さよ)

○妾は文壇愛讀者の一人てすが皆様よろしく御交際を願ひます(遠州見付町東坂鈴木方土屋松江)

○玉蘭子さん花守は如何と記者さんへ御尋ねてすが ぜひに御一讀遊ばせ實に優美な高尚な詩集てすよ 夜雨君のなぜ生れながらの厭世詩人て あるかをもよく知る事が出來ます 私はいつもこの詩集に同情の涙をそゝぐのてすよ(高崎市露野愛子)

○諸姉様御交際を願ひます繪端書御玉章の 交際も願ひます 又當地の學校に習ふて居りますから丸の習字帖上下共拙筆にて書て有ますのを 雜誌又は繪端書等と御交換を願ます(德島市當田濱側市山方多田秋月)

○皆樣私は深山の草家に 果敢なく暮して居る誠に淺學なものてすが どーぞ御交際を願ます(長野縣小縣郡東鹽田村吉田しげ子)

○みなさま妾も此度のお正月から 讀者になりました故よろしく御交際を願ひます 又繪はがき交換も(肥後熊本市妙體寺丁八〇佐藤やす子)

○皆さん方の御寫眞又は地方の名所景色寫眞や 編物御送り下さいな御禮として 寫眞畫報一册宛に繪端書を添へて上升(信州上田在山口清水りん)

○皆様私はおし花が大好きてすから 何んてもよろしう御座ひます送ッて下さいまし お願ひ致します猶繪はがき交換も願ひ升(東京淺草清島町三竹田光枝)

○愛讀者の中の虎の門の 東京女學館及びお茶水の師範附屬高等女學校幷びに 女子大學附屬高等女學校生徒諸孃に 御伺申上升、前記通學生徒は、大低身分ある方即ち華族とか 何々博士とか何々學士とか又は軍人方の令孃方が 多く入學とか聞いて居り升が、實際て御座い升か又二、三年入學者ても受驗致すので 御座い升か又毎年三月の外に九月にも 入學は許しますか次に二年位の方方では お幾年位の方が多いてせうか、何か御敎しへを伏して願升(白菊少女)

○誌友の諸孃に御願ひまする 私はお寫眞の御交換が致しとう御座りまするそして 長へにお互に親密に第二の姉妹の樣に交際が致したいのです お寫眞先着拾名に淡路名所はがき一組(十二枚)及絹のしをりを一ッ及妾の寫眞を送ります(淡路洲本町之內汐見町 木村彌五郎樣內三宅こつれ子)

○皆さん私も 女子文壇の一卷一號よりの愛讀者てすが編み物及び 文通などして下さいませんかきつとお返ししますから(山形縣西田川郡念珠關村大川豐子)

○妾は本誌を愛讀して 居ますが親愛なる諸姉樣どうか 御交際を願ひます、且つ繪はがき玉章葉等送つてくださる方には 相當以上の御禮致します(栃木縣那須郡親園村下の原星藤子)

○私の甥は咋年三日僅か一歲を 一期として世を去りました 若し憐と思ふ涙ある人は歌なりはがき文なり新體詩なりを寄せて下せい 御禮として抽籤の上五名に丈け 悲歌戀歌廿五弦塔影眞蹟野詩園を差上ます 期日は四月十日まで結果は本紙上本欄て 報告します(福島縣福島町中間町二高澤愁子)

○滿天下の秀才 賢孃諸姉よ妾は玄界の浦里加布てふ生魚村の 賤の女に候よ、されど〱見捨て玉ひぞ、妾は絕望す玉章を寄せて 御交際あらん事を(筑前國原島郡加布里港大塚松子)

○隱岐の三子島と云へば誰もふりかへつて見るものもない孤島てあります 私はこのあはれな離れ小島が故鄕てあります どうか皆樣よろしく(伊勢しづ江)

○皆さんお寫眞や編物繪葉書等送つて下さい 私は拾錢以上の繪葉書を以て御禮申上ます(熊本市細工町三丁目茂里鶴聲)

○皆さまもお仲間になつて下さいませ 妹のときわにもふさにも願ひますよ(陸前登米町高橋みよし子)

○壇友諸姉樣よ妾共は 東北の田舍に住む不束者てあり升がどうぞ御見捨なく、御文通なすつて下さいな拙いけれど 速ぐ御返します(羽前西置賜郡小國町齋藤こま子 小林みわ子)

○御諸姉樣方。妾は當文壇愛讀者、會陽の露繁き 里に住める田舍娘、以後宜ろしく 御交際の程願はしう存じます(岩代國喜多方町寺町 伊藤千鶴子)

○皆さん! 妾も本年から本誌愛讀の一人になりよした以後宜しくご交際を願ひます、 又繪葉書や寫眞の交換も願ひます妾は(岩代國信夫郡 平用第一高等小學校內丹治はるみ子)

○東京に 居らるゝ中谷峰世樣私は 大に感謝致しまするあなた樣はなぜ私に 移轉先をおしへて下さらぬのですか私は誠に〱悲しい〱不幸な事が 出來まして貴孃の最初の御手紙の御返事も出す 暇が無い程でした洲本へ 着きましたのは一月廿六日てすそして第二回目の御手紙を拜見致しましたが 御文面の意味が分りませぬ 妾は御話し致し度事山程

ありま す何卒〳〵移轉先敎へて下されよ（淡路洲本町村内三宅しん子）○愛讀者の諸姉樣何卒寫眞を送つて下さい先着者六名にシホリ又はリボンの二ツの内御望みの品を差上げます（鹿兒島市西千石町九十九番戸森トミ）○妾は外國郵便切手を澤山持つて居ますよ支那、印度、朝鮮、白耳義、オーストリー、ハンガリー、伊太利、丁抹、露西亞、獨乙、米國、布哇等御望の方少づゝ分配いたしますよ然し其のかわりに繪葉書か寫眞編物何にてもよいから送つて下さい（廣島縣佐伯郡津田村廣兼富惠子）○本誌愛讀の方々よ忌なくのでも御交際なれがい升又繪葉書やお手紙の交換をも心ある方は下名へ（神奈川縣高座郡田名村渡邊八重子）○賢明なる諸姉樣方よ妾は北海道の片田舍に住む淺學淺智の者ですから此後よろしく御交際なすつて下さいませ（北海道勇拂郡早來扇增たみ子）○赤阪の大木樣私は誌友倶樂部で神聖高潔なる御家庭の有樣を知る事を得ました私も信者の一人で御座いますが私は旅に居ります故家庭は未だ眞の神樣救ひ主のあることを知りません何卒今後はこの信仰うすき者を御憐みありて御導きを御ねがひ申し上げます（和歌山美屋子）○皆さん私は常陸の海岸にすんで居る一少女ですが望むらくは賢明なる諸姉の君と爾後の御交際が願ひたひです伺ほ繪端書の御交換をも（茨城縣多賀郡松原町石なみ子）○諸姉樣よ私し一月より皆樣のお仲間入りを致しました何卒薄學な者ですが御交際を願ます。それから當地（旭川）は二月四日の氣溫が攝氏零下四十二度に下降致しました（北海道旭川陸軍建築部官舍第八號吉住沖）○賢明な諸友の皆樣どうか御交際を願ます御手紙繪端書交換または寫眞しほりの交換何なりとも致しますから御見捨なく願ます（伊豫喜多郡大洲町本町二丁目上田丸平内宇都宮止子）○寫眞交換して下さい、必ず返信しますかられ繪葉書手紙の交換もれどーか此後も御見捨なく歌句のみ書いた繪葉書の交換も賴みます（廣島縣高田郡甲立村字深瀨箕岡靜子）○諸姉樣繪葉書や文通の交換を願ひます其地方の新聞も送つて下され私も必ず送ります（能登鳳輪島町河井後町黒田方菊子）○やさしき諸孃樣お手紙や繪葉書の交換をして下さいな妾きつとお返事を上ますから（深川佐賀町一ノ四〇臼井方松永かつみ）○本誌感讀者の皆さまどうぞ繪葉書の交換（新躰詩、美文、和歌、何れなりとも認めて下さい）を御願ひ申します。地方新聞、雜誌の交換。文通、何れも喜んで迎へます（羽後國飽海郡南平田村大字櫻林もみち會にて菅原花枝）○皆さん今後は御交際を願ひます繪葉書の交換もして頂戴（和歌山縣日高郡御坊東町南中村方阿隣保利露子）○皆さんどうか御交際下さいな繪葉書の交換や、編物繪などの交換お願ひ致します（三重縣安濃郡新町古河三本松山田ひさ）○皆さん今後御交際を願ひます繪葉書の交換を願ひますよ（紀伊日高郡御坊東町南中村方近森靜子）○何卒繪はかき土地新聞雜誌の交換を願ひます（千葉縣長生郡新治村上太田關屋もと方關屋久子）

○諸孃と記者

○記者樣妾は女子文壇を師友として愛讀して居ます、とーから投書しよーと思つて居ましたが諸孃の美文に驚き、どーしてこんな拙文をとよして居ましたが、そゝいつまでもしていては、覺える事が出來ないから、以後は思ひ切つて、どし〳〵投書致し升から、宜しく御賴み申上升（宮城縣田舍の山里にて操子）（記者曰、能くそこへ氣がつきました、全く餘りに引込思案でも勇氣を發する塲合がありませんから、思ひ立つた時からやる事です）○記者樣御社の隆盛は實に朝日の勢で御座います此の隆盛を見るのは實に我々讀者の幸福で御座います私共二十人程一つの家に住んで居りますが皆愛讀者です何卒此上とも諸先生方みちからを御盡し下さいまして益々盛んにして下さいまし私共も續く限り愛讀致します（和歌山美屋子）（記者曰、一家に二十人の愛讀者を得るとは女子文壇も幸福なる哉）○記者さん私も今度愛讀者になりました何卒宜しくお願ひ申ます原稿はこれでいゝでしやうか、皆拙文計りでお恥しうございます何卒お笑ひなく御覽下さい（甲斐ゆかり子）（記者曰、それ〳〵諸先生の手許に廻しました御謙遜いたみ入りましたが何れお作は紙上にあらはれるでせう）○記者樣私も亦た女子文壇の愛讀者の一人でしが投書するのは今日が初めてゞ御座いますから宜ろしく願ひ上げます以後どし〳〵投書致しますよ書き方はこれて宜しいですが伺上げます（ゆき子より）（記者曰、よろしうございます）○記者さん私れ今まで女子文壇といふ本はよい本と承り居りましたが拜見致した事がありませんでしたが本年から愛讀者になりましたが實に氣に入たホです此後は私一生拜見致すつもりです（羽前國にて久子）（記者曰、評判ばかりあつても實際

に内容が不親切では詮方ありませんが、本誌は努めて名實相かなうものをつくりたいと思つて居ります、長い間の事ですから、變りなく御覽下さい)○記者さん妾は極田舍ものですから文作るすべも何も知りません それで何卒覺えたいと思つて第十號から本誌の永久愛讀者になりました 此後は拙いのを續々投稿する心算ですからどしどし沒書にしても怨みはしません 此度は二妹の分をも代筆して送りましたから宜しくお願ひします(越後北蒲原郡長浦村水野清波)(記者曰、沒書して怨まれるより掲載して欣ばれたいのは山々ですから 何うぞ念を入れて傑作をお寄せ下さい、どちらも幸ひです)○投書樣 私は深山の七鬼ひ片田舍に詫び住居して居り升 暇のめてすが此度初めて女子文壇を拜見致しましたが大變によい本です事 永久に愛讀致します考です是から少しつゝ勉強して 投書致度思ひますから御訂正を御願申 上ますよ(山城の洛西にて敏子)(記者曰、毎號初めての方が澤山ありますからよろしく御愛顧をたまはりたいです)○記者さん御伺ひ申ます 此女子文壇原稿は只の半紙にても宜しいですか又は貴社にて 原稿紙販賣して居りますか(秋田縣黒丸登美子)(記者曰、前號に原稿紙はある場合に本社から差 上げても宜しいやうに申しましたけれど、あれは取消します、矢張皆樣の半紙へ書いて下さい)○記者さん妾の方の人は皆女子文壇の記者さんが お親切で皆いお人だつて妾もいつもそう思ふて 居ますのよ私記者さんを兄さんと思ふて慕つて居ますよ(陸奥の白露女)(記者曰、恐縮〳〵)○記者樣平和の新年より愛讀者となりました 妾は何んだか記者樣方を身内の方の様に思ひますのよ 十三才の少女ですが少しづゝ容易なのから 投書したいと思ひます 何卒よろしく御見知りをきをごきげんよう(金澤市新堅町二丁目巾泉錄)(記者曰、十三とは未だお月樣と同い年ですな、お若いのですからお急ぎなさらず好愛讀者となつて 追々は良投書家とおなり下さい)○記者樣一寸御伺申升俳句を半紙半枚にかいて投書有合一しよに出してはいけませんかお尋ね申します 又私裁縫舍内にて女子文壇愛讀會を立てまして 數人が投書をとりまとめ目方のゆるすかぎりは 全封にしてだしてもよろしきや(美濃加藤裁縫舍内みゆき)(記者曰、凡て結構です)○記者樣 手數ですが左の書物の定價幷に冊數をお敎へ下さいませ、源氏物語、枕草紙、平家物語、徒然草、萬葉集、古今集、そして之等は普通書店に ありませうか(大阪の一少女)(記者曰、お尋ねの書物は 凡て有名なものばかりですから、何處の書籍店へ入らつしやいましてもありましやう、定價なども本屋からお聞になつた方が早うございましやう、それに註釋つきにも種類が多いです、枕なら春曙抄、源氏なら湖月抄と成るべく信用すべきものをお求めなさい)○記者樣圖畫を出しますには彩色いたしますのですか おしえて下さい(神戸水仙花)(記者曰、彩色してはいけません)○記者先生にお尋ね申します東京市中央以東にして 廿四五才以上の女子の通學する學校がありますそうですが若し御存じですれば誌上でお知らせ下さい(岡山縣後月郡青野村西田紫陽)(記者曰、中央以東とは少しぼんやりして分りかねますが 女學校は以東以西を問はずいくらもあります、其種類は何言ふ學校ですか)○記者先生私はこんな嬉しい事は生れてより十六年この方始てゞあります昔正月で年頭から歸へりましたらば机上に女子文壇すぐ見ましたらば私のが特別の處にありました實に夢ではあるまいかと思ふまでうれしく喜びました誠に終生忘るゝ事の出來ない喜びでありました早速父上兄上に見せますと大へん喜んで此後もよく勉强する樣との言葉を受けました本當に不肖の私此上もないほまれを頂ひました紫濟は雅號で柳原きくが實名でありますあまりうれしさにあまりかくは御知らせ申上ました(三河碧海郡鷲塚村柳原きく子)(記者曰、第二卷第二號はがき文特別二等「新衣」の作者の君から此禮狀を頂いたのです、新衣の文必ずしも才華ではありませんが、眞情人を動かすものありて殊に其女性的なる處を採りましたが、果して此文を拜見しても 選者の想像して居たやうな令嬢であつた事を欣ばしく思ひます)

○繪端書編物の交換

○澤山の皆樣から美しいのを頂きました有がたう御座いました中に草書で御住所のわかりませんのはごまかして書いて出しましたからとゞきましたかいかゞですかどうぞ之れからは御住所は楷書で願ひ度いもので御座います(本郷區弓町女子美術學校阿部秀子)○繪葉書の御交換を願ひます失禮ですが書籍や、みにくき妾の寫眞も少しありますから御望みの方は早く美しい繪葉書にて(佐賀市與賀町字精小路百四二古川久子)○私は女子文壇の愛讀者ですが此の頃誌友の諸姉樣繪はがき交換をなさいますが私も繪はがきが大へ

ん好きてすが此後諸姉様に交換して貰ひたいのですわ(神戸市元町五丁目三四神田吉得子)○何卒繪葉書御交換願ます第一巻第二第三第四巻の方には小說青葡萄及び伽羅若衆女學世界進呈致します(奈良縣奈良市椿井町箕輪京子)○態々繪はがき送て下されました諸女様へ申上ます。妾去十二月の誌上て交際を願ひましたが二十余名の御方から繪葉書送て下されました。遠國は沖縄縣北海道等てありまして嬉しいと思ひました好奇心から。どし／＼始めは返事を差上まして四圓餘を消失しました妾は未た小學校の者てすから高等なる敎育を受けまして成功しましたら、又御交換致しますから今後は文壇上てばかり願ひます(秋田縣りつ子)○諸孃さん繪葉書や枝折の交換を御願ひ申します先着者十名に成田山名所葉書六枚を差上ます(千葉縣成田 日吉倉裁縫講習所内橋爪天波子)○私事しばらくの間他行致しますから其間繪葉書御交換を中止致します又歸宅いたしますれば是迄通りたがいにふるつて御交換を致しませう(橫濱辨天通四永井その枝)○妾も誌友の一人てありますが兄は文かく道や繪などを樂んで居りますが私は文章も拙て繪などの素養は爪の先程もありませんが兄の肉筆て交換致し度いものてす亦弟は北米になりまして時々あちらの麗しい繪葉書を送りこされますが買の持ち朽れて今の處やくにたちません(山梨縣東八代郡楓村百六内田政子)○妾も何卒繪葉書交換の中間へ入れて下さい、(滋賀縣神崎郡能登川村北須田深田喜子)○御交際と繪葉書の交換もして下さらば成るべく良のを送りますよ(丹後新舞鶴北吸山崎方山崎千代子)○私は東京に一年半程遊學して居りましたが父の病氣の爲め田舎の故郷に返りましたから繪葉書や寫眞の御交換を愛讀諸孃様に御願ひ致します、(鹿兒島縣姶良郡西國分村住吉古川こぞ子)妾も繪葉書交換の榮を賜はり度思ふので御座います、どし／＼御送り願います(埼玉縣南埼玉郡岩槻町二上藤代)○妾も繪葉書交換の御仲間に入れて下さい(岡山縣笠岡町伏越町中非越智伊達嬬久代)○一筆申上候私こと繪はがきの交換をいたし度候間どうぞ御社御發行の女子文壇の為はがき交換らんへ御廣告下されたくくれ／＼も御れかひ申上候かしく(小石川區竹早町百拾四番地加藤雪子)○諸孃方よ繪はがき交換を願ひます(千葉縣印旛郡遠山村取香藤崎いさみ子)○本誌愛讀諸孃妾は編物栞を編むことをまだ知らないのよそれ故どうか送つて下さい御禮は是非致します(香川縣大川郡三本松町、松永あやめ子)○不出來てすが栞差上げませう美麗なる繪端書にて申越下さい先着五名までに差上げます尙繪端書の交換も願ひます(富山縣下新川郡加[illegible]村字[illegible]村荒井彦四郎方きよ子)○私は初て御交誼を願ふ東西も辨せぬ者故以來は宜敷何卒繪はがきの御交換み賴みます(大和郡山町森本恒三郎内峯子)○妾も今年より女子文壇愛讀致し升就ては皆様と肉筆繪はがき交換を願ひ升(芝區金杉三丁目十九番地字野治三郎様方山本蝶子)○諸孃交際欄に於て編物の御交換御希望の方が御座いますが私も其一人なので是非とも諸孃の御内にて右御交換下さる方が御座いましたらば何卒よろしく御交際を願ひたいてす(伊勢桑名本町水谷はつ)○皆さん繪葉書の交換や文通をして頂戴、妾も此度御返事いたします(伊豫松山市千船町曾根豐内奥島節子)○親愛なる吾が友よ妾は女子文壇愛讀者の一人てすが何卒以來繪はがき交換を願ます(京橋區桶町十八佐竹方稻垣てつ子)○私は女子文壇を愛讀していますが何卒繪はがきの交換を願ひます(芝區金杉町三丁目大和やさま内志波多初枝)○皆様繪はがき交換を願ひます先着五名限り女名刺入を上げます(仙臺市北六番丁二四五今井あや)○文壇の愛讀者と舶來葉書の御交換を乞ふ(大坂博勞町東堀西田中方白雪)○北海道風景と土人風俗の上等な繪葉書を昨年中に百枚集めたのがありますから諸姉様何卒交換を願上ます(北海道空知郡市來知村岡山芳川久子)○親愛なる誌友諸孃よ！私が先達つて本欄に於て諸孃に繪はかき交換を求めた時、諸孃は振つて御贊成下さいましてお陰て頗る好結果を得ましたが多くの中には隨分粗惡な品が有つて御返事に困つた方も御座いました、昨年に倍して舶來か、但しは和製の上等て繪はがき交換を希望致します(東京市京橋區南傳馬町三ノ二中川ノブ方小枝月華)○繪葉書の交換を御願申上し處皆様より數多御惠み下され候段御禮申上升皆様此後ともよろしく御願申升(日本橋樽正御十番地小や方山本八枝子)○繪葉書交換希望(橫須賀軍港汐歷町百九十六番地山田義子。橫濱市尾上町二丁目十五番地森方安田政子仝桂子)○御願てすあみ物や繪葉書を御送り下さい、妾きつと相當な北海道の產物を以て御禮致し升壹圓以上のあみ物を送て下さつた御方には北海名物のリンゴを送り上升(北海道岩見澤武小町)○滿洲軍總司令部の凱旋紀念繪はかき數葉所持い

たして、居りますが何にか面白き書籍と御交換下さる方なきや御望の方は書名封書にて御知らせ下さい（本所林町三丁目、正村方山田すみれ）○妾は少々繪葉書を蓄へましたから交換を願います妾は字を書きました大變に好みますかられ美麗なのを願ます（富山市日生井町一九一五、竹村綠子）○妾は片田舍の何も樂の無き所に住むで居ります未熟者ですどーか諸孃樣の內で栞を持ち居らるる御方あらば何卒御惠み被下度願ます先着拾人迄は小說か雜誌を送呈致し升又廿五人限り拾萬以上の繪葉書を送ります（近江國志賀阪本井神金子方凰子）○諸孃よ本邦紀念切手未使用のもの二枚以上又は紀念繪葉書未使用のもの三枚以上御送り下されし方には優美なる繪葉書を以て御厚禮致します（東京府下立川村丸芝方磯谷紫江）○諸孃樣よどうぞ御寫眞贈つて下さい先着者には女子文五山題第二は言文一致文例其他は文藝倶樂部、青年文庫差上げます千葉縣、長生郡、帆立町、廻田、高山靜子）○繪はがき交換して頂戴な必ず御返事しますよ（奈良縣生駒郡法隆寺村大字並松喜多總松方喜多涙台子）○諸友諸姉樣妾は繪葉書交換及び編物等の交換を望みます先着十名の御かたには特に書物を差上げます（山口縣長門國府松小田高田沖子）○繪葉書の交換を願ひます（淡路洲本町之內汐見町二一木村樣方伊藤綾子）○繪葉書の交換を願ひます 神戶市雲井通七丁目一一八梅宮濟子）○繪葉書寫眞の交換を望む（安藝國秋町局區內秋町川手島福島政子）○繪葉書、地方新聞、名刺交換御望みのお方はどし／＼御送り下さいまし妾もきつと御送り申ます（千葉縣山武郡士氣本鄉町上大和田字荒久大塚よし子）○皆さん繪葉書を送つて下さい先着五名には耶馬はがき一組（四十五錢）のものを差上げます（豐前中津諸町清水みさを）○誌友の諸姉樣私が繪はがき交換を望みましたら皆さんから御惠み下さいまして誠に有がたうぞんじました厚く御禮申上ます以後又何卒宜敷御交際の上御交換下さる樣御願致します（牛込區辨天町六林安津子）○皆樣一月には繪はがきを送つて下さつてありがとう早速御返事申しますのを妾兄病氣にて鄉へ歸り居りまして不在中で失れいしました御返事は追々だしましたがおゆるし下さい（美濃關相生町加藤裁縫舍傍島美遊喜）○妾れ眼病の爲め家をるすいたしました處、美しい繪端書をたび／＼御送り下さいまして如何程嬉しかつたか知れませんよ、御返事を上げるのでしたが何だか間がぬけて恥かしい樣ですから誌上で厚く御禮を致します、（埼玉縣北足立郡大砂土村字大和田見富方細沼藤代拜）○皆さん自筆の畵はがき送つて下さい（牛込天神町二七齋藤方たそかれ）○皆樣肉筆繪葉書の交換して頂戴妾幼より畵が大好て聊か眞似も致して居るものです拙筆ながら屹度返します（岡山縣久米郡稻岡南村字南庄、杉本駒子）○皆樣美しい舶來の繪はがきを交換して下さいよ私は上等てなければ御返事は差し出しません（岡山縣淺口郡玉島町豊しま町岡本増子）○諸孃樣繪葉書へ詩歌俳句を書て送てよ妾もキットンり送ります栞も送つて下さい（茨城縣那珂郡戶多村大字戶四十九番綿引早子）○皆さん繪はがきをたくさん送つて下すつて有りがたうまた、自製の栞、自筆の繪はがき、どし／＼送つて下さい、きつとお返事いたしますよ（備後國雙三郡酒河青河佐々木元三郎方定子並に妹艶子）○皆さん私はおろかの者ですが交際をれがひます自筆ゑはがきか手紙か栞かを御送り下さい先着二名の御方には十錢の雜誌どれてもおのぞみになれば一册づゝ御送り致します（芝車町八十五難波田うた子）○私は田舍の者で御座いますが天性繪や音樂を好みますが其中でも繪が好きて御座いますそれで諸姉上樣拾錢以上の舶來繪葉書又御自筆繪葉書を御交換を願ひます（陸中國西磐井郡一ノ關町八番小路坂本記代子）○大方の諸姉、私は繪畵が非常に好きなのです、ですから御自筆の繪はがきお贈り下さい、私も拙手ながら必度自筆のでおかへし致します。（佐世保市下宮田町三谷方橫山汎愛）○肉筆繪葉書の御交換を願ふ（大阪北區天神東四二〇八番地川村方とし子）○愛讀諸孃樣繪はがき送り下されませ早速御返事致します尙ほ「しほり」の交換を願ひます 伊勢國度會郡宇治山田町字中之切町梅谷屋方にて平井とし子）○繪葉書交換は大好きなのよ皆樣御送り下されば早速妾も御送ります（千葉縣山武郡士氣本鄉町下大和田字荒久九番地大塚霞女史）○諸姉樣、妾も繪葉書交換を願ひますよ、失禮だけど一枚六錢位のを御出し下さいまし、而してれあの趣味ある文字を書いて頂きたいわ（岩代國喜多方町寺町伊藤千鶴子）○諸孃よ願はくば繪葉書の交換を（長崎市萬年町七九松岡凛子）○繪はかき交換や文通致したいですからどうか御自筆なのを一枚づゝ送りて下さい（愛知縣中島郡豐田村大字ノサキ田島顯子）○誌友諸姉繪葉書交換を願ひます（德島常三島村坂

野芳乃）○妾は非常の 繪葉書好きてすが、蕃人風俗、及風景草木等百貳拾餘枚も 蒐集しましたに付、孤島に參りました紀念として 諸孃の美術繪葉書（共に六枚一組宛）と交換致したう御座りますが御賛同の御方は何卒至急送附して 下さい、（臺灣新竹驛 第六號官舍 黑木様方 波江野紫子）○繪はがきお好の御方は美しいの 珍しいのを（無論肉筆を含む）送つて下さい返事は早速相當のもので上げます又遞信省の 觀艦式及び滿洲軍司令部凱旋紀念葉書御所持の お方一葉でもよろしいから（成るべく紀念消印付にて 文字書ず袋入にて）御送り下さらんか 廿五錢以上の舶來珍美はがきを差上げます 三枚一揃御送りの方へは壹百枚挿舶來總ラシヤ紙 美製大アルバムを呈します（東京牛込區喜久井町三六 今井方にて本多紫子）

○圖書換讀

○私は、不用の書籍多く 御座りますから、皆様の内て不用書籍を 御持合いなら、その目錄を、送つて下さい、又、辭書類も有ります（陸前國浦谷町久道玉川女史）○皆さん私は（濱子）と田口先生の（春潮）とがあいて居りますから 紅葉先生が春雨先生の小說と 御交換が願ひたいのです、（神戸市北長狹通四丁目三十九番地三木方中村まさ）○私に小說「田毎鏡」と「文藝倶樂部（十一卷四號）」と「女學世界增刊姫百合」と女子 雜誌の「ムラサキ」（一號）、不用ですが、同じ種類の本と交換しませんか、（陸前松島村高城町古河松江）○「實驗作文敎授法」 全部不用ですが 小說「夏子」「裁縫法のかいてある本」何れなりとも御交換下さい（水戸市上市臺松町二三今泉方にて芙蓉子）

○諸姉様御約束てした本は市中の 御出ての方に乳姉妹は差し上げて 他は上野の増田様名古屋の栃木様と東京の宮井様に御送り致しました、（宇都宮青柳けむ）○諸姉様の中 本誌一卷二號と、九號十號と三冊の中一冊なりとも 御送り下さいませんか御禮として三十八年の 女學世界三冊とそれに本誌三冊分の定價とを合せて一着の方に御送り致す（仁川風月堂奥田あい）○男女學問病秀才文壇衞生新報文子奇譚繪葉書文範 ハがキ文學其他催眠學書等數部右誌友の 諸姉様へ御進呈致しましよーから御寫眞か成べく 上等の繪葉書又は雜誌ヒヂスケ類と御交換下さい 最も先着者へは當地の寫眞を 添へてもよろし（高知縣高陵郡越知町櫟木重子）○私の手許に 女學世界二十四冊食道樂春夏秋冬四冊 御座いますが入用の御方は舶來美術 及び自筆繪葉書へ詩歌を書き申込下さらば着順に何れなりとも御送り 申文ます栞を歡迎致します（新潟市古町通二番町 浦澤方水谷八重）○私只今手許に「白砂青松」、「歸省」、「開秀文壇」、「女學世界定期増刊小天地」及「女學校生活」、「女子の机上」など不用になつてゐます皆様の内「テニソン」の詩或は「黑潮」、「まだ見ぬ親」、「無花果」、「べにばら」か或はその他の詩集てようございますからどうか 交換を願ひます、（長崎市東濱の町古川みさ）○私し新古文林一卷より六卷までありますが 諸姉様達の内で何か古い文藝雜誌と御交換して下さる お方はありませんか又小說覺風戀風（上、中、后、）乳姉妹（上、下）男氣の六冊あります新版の讀了りと 換へて下さい（和歌山縣海草郡和佐村布施屋 木村土之助方山口みどり）○愛讀の 諸姉さま私は「春浪著の空中飛行艇上」を持つて居ましが皆様の中て「韻文花天月地」をおもちの方て交換 下さいませんか（陸前登米町三九三星とし子）○熊田千代子様に、此の間は、本誌澤山送つて下すつて有り難う、三號が有りませんてした、他のお方て 女子文壇の第一卷第三號の 御不用のお方があつたら一冊御惠送下さいませんか、其の外 唱歌の離小島、熊野、露營の夢等どんなのでも宜し 筆記したのでも宜しい、送つて下さいませんか、 お禮は致します。（岐阜縣惠那郡下原村永井方渡邊紫葉）○博文館發兌 俳諧文庫第四編其角全集第十五編續俳諧論集御持の方は 相當の價にておゆづりを願ます（埼玉縣桶川町富田きく子）○私こと小說伯爵夫人（前編）ほととぎす及び青春（はる四卷）持ておりますから繪葉がきにて 申込みの御方に差上げます、（栃木縣那須郡下江川村熊田見目みどり）○文政十二年頃の 衣服模様（但し一枚づゝ）婦女美文書假名手本等不用故 繪葉書にて申込の方に 送ります（仙臺市立町三ノ一三七、三浦雪子）○妾は兄さんから頂戴いたした雜誌類（新小說、文藝界、文藝倶樂部、中學世界、新聲）等都合百五十部餘 持つて居ます。諸孃の中に「新古文林、白百合、帝國文學」等御所持の方と交換を御願ひ申します。また詩集も三四册所持してゐますが、あし（白玉姫、不如歸の歌）御不用にて御送附の御方へは 岐度相當品を贈附いたします（羽後國飽海郡南平田村 大字櫻林菅原花枝）○皆様妾は十一號からの 愛讀者てあります故其前の物がほしいんてすけれど皆様の中内に御不用の御方がありますならば どうぞ御讓り下さいませ、（遠江國磐田郡大藤村 伊藤ゆわ）

○剽窃詩文の注意

○二卷一號及び二號の剽窃詩文として更に讀者より注意ありしもの左に披露します

○二卷二號の分

▲遠江、蝶子。　抒情文人賞遠江蝶子の「戀の辭」は「秀才文壇」五卷八號美文欄陸前高田高澤文正への「戀の辭」を剽窃せしものなりと云ふが此れより以前明治三十四年一月發行「中學世界」第四卷一號に伊勢宇治山田町お晴峯君作の「戀の辭」と云ふ一文一等賞に當選せり敢に眞の作者は此人なるべし。

▲伊勢、平松隆子。　抒情文秀逸三重縣桑名郡木曾岬村常在院平松隆子の「わが心」は「女學世界」第二卷六號八三頁丹波はなたち花君作人賞の「わが心」を剽窃せしものとす

▲岩代、佐瀬ほこ子。　抒情文秀逸岩代佐瀬ほこ子の「あゝ小牛よ」は「文藝倶樂部」第八卷五號汀花生の「牧場の小牛」に似たり剽窃の疑あり

▲紀伊、米田時子。　消息文八三頁紀伊米田時子の「梅見誘引を辭する文」は「秀才文壇」五卷七號書簡文秀逸堀田齋君「探梅誘引を辭する文」の剽窃なり但し此文は「女子文藝」一卷にも白菊として似よりのものあり。

▲京都、平林君英。　消息文秀逸京都花園學院平林君英の「嫁入する妹の許に」の一文ば「女敎訓千代の鶴」と云ふ書の烏丸光廣卿より小宰相どのへ贈りし文章より抜けるものなり。

▲茨城、諸岡梅子。　新體詩天賞茨城縣稻敷郡木原高等小學校内諸岡梅子の「希望の花」は三十八年一月發行「少女界」増刊少女鑑の新体詩一等群馬縣北甘樂郡富岡町仲町渡邊ふみ子の作「初夢」を剽窃し僅に一二句を取換へしのみ（但し此注意は原作者渡邊ふみ子孃よりも特に申來られ其他十數名より注意來れり）

▲大分、宮田秋子。　新体詩人賞大分縣中津宮田秋子の「細糸」は「中學世界」第八卷七號新体欄美濃加茂郡伊深村柴田清美君の作を窃取して投ぜしもの。

▲神戸、野菊子。　新体詩欄二十七頁神戸野菊子の低唱は泣菫氏の「ゆく春」五十七頁より抜來れるものなり。

▲伊勢、白菊女史。　新体詩欄二十九頁伊勢白菊女史の「工女」は「女學世界」二卷十二號二等賞に當れる新体詩伊勢宇治中之切町河原芳子君の工女を哭すを剽窃せしものなり。

▲長野、義子。　叙事文四十四頁長野義子の初冬の田園は國文學雜誌より丸抜きとの注意あり

▲伊勢、菫子。　和歌欄五十頁下段伊勢菫子の「病いえし母を……」の歌は「女學世界」増刊「花にしき」中の春興と一字も相違せず。

▲星山蠻子。　はがき文秀逸星山蠻子の「枕」は「萬朝報」百字文十四回當撰「枕」と寸分の相違なし。

▲奈良、藤田そめ子。　圖畵天賞奈良市押上町の藤田藤子方藤田そめ子の動物園は金尾文淵堂發行「小天地」の繪葉書より剽窃せしものなり

○二卷一號分

▲伊勢、菊之舍。　叙事文秀逸伊勢菊之舍の「露」は明治三十六年三月發行「中學文藝」二卷三號抒情二文等仙臺市清水王柳君作「奇麗な露」と一字も違はず剽窃なるべし且此文は本誌一卷二號美文欄には伊勢津市永田きの子作としても出てたり猶ほ「女學世界」増刊二卷十二號には白露伊勢山田古市一五白井きの子として出てたり。

▲上毛、好月子。　消息文特別第三賞上毛好月子の故郷の友へなる一文は上毛に於ける青年文士の或る團體より出せし「鬼百合」と稱する筆寫雜誌の五號に載せたる素月君の作なる由、好月子と云ふ人の自作にあらざるは明かなり

▲神戸、みどり子。　新體詩地賞神戸みどり子の「雲」は三十四年四月發行「少年世界」七卷五號新體詩一等羽前齋藤二三三君の「雲」を剽窃せしものなり

▲出雲、紅花子。　和歌天賞出雲大社のふと紅花子の「うすもやのあや組……」の歌は金子薫園氏編「凌霄花」百七頁小野氏の作に同じ。

▲相摸、石田千代子。　和歌山地賞相摸鎌倉石田千代子の「五年の旅を……」の歌は三十六年十月發行「中學世界」六卷十三號淺井落葉君の作と一字一句も違はず剽窃なるべし但し此歌は必ずしも落葉君の創意ならず與謝野君著「新作和歌大要」六十頁にある窪田うつぼ氏の「これやわが殘りの幸かうらぶれの旅の姿を泣かむ母なき」と云へるが原作なるべし。

▲上總、實川秋子。　和歌秀逸上總實川秋子の「白藤に雨やはらき‥‥」の歌は「ハガキ文學」二卷八號天賞横濱橋本君の作と殆んど同じ。

▲もと子。　俳句特別第一賞海老川のほとりもと子の「春の川‥‥」の句は「ハガキ文學」二卷八號天賞土佐西澤曙月君作と同じ。

▲羽後、花枝女史。　俳句人賞羽後花枝女史の「電燈に‥‥」の句は三十四年五月發行「文庫」十七卷第五號磐城羽岳君の作と一字の差なし

▲京都、かすみ子。　ハガキ文秀逸京都かすみ子の「掃除の半日」と云ふ文は「秀才文壇」五卷十四號牛込宮地猛夫君の作新婚日記の一節と相違なし。

▲神戸、德永みれ子。　圖書賞外神戸德永みれ子の「おつとめ」は三十四年五月發行「明星」十六號結城素明氏の「念佛」を縮めしに止まる。

驚くべし剽窃詩文の多き事、投稿者の德義心を知らず、思想界の恥辱を敢へてする輩には記者一大痛棒を與へる覺悟ですが、本號には少し手が廻り兼ねましたから、近々大いに筆誅するつもりです、潔白なる諸孃よ幸ひに安んじたまへ、日ならず我文壇の暗黑面を一掃して神聖にいたしませう、扨て右剽窃詩文の注意を賜った諸孃の芳名を、例に依り左に列記して謝意を表します。

○神戸、池田ぬい子○本郷、きく子○渡部竹野○横濱愛讀女○芝愛讀○備中、池田都子○深川、津谷花子○上野、蓼舟山人○上野、素月生○横濱、黄菊○大和、白眼生○甲斐、揚羽君江子○深川、荒尾みゐ子○岩代、福島はな子○金澤、中泉錄○横濱、英美子○神戸、剽窃通信倶樂部幹事○牛込、菱木きくゑ○靜岡、無名子○陸前、八崎りん子○大傳馬町、西川とき○京橋、忠告生○上毛、藤代子○京都、泣葉女○淺草、牧場の小牛○長崎、愛子○讃岐、茂子女史○伊勢、美露子○三重、山本富士子○豐後、平山良子○羽後の一少女○長井琴子○伊勢、竹村操○紀伊、文子○注意女○茨城、石なみ子○本郷、中島綾子○備中、ふみ子○常陸、霞濱女史○むくげの花○千葉、よし子○山城、花春香○下野、里の子

○取消。　二卷一號の小説欄中村白露君の「友のまごゝろ」を剽窃の疑ありと前號に發表したが、自作なる事判明しましたので、剽窃云々は取消す。

編輯たより

○妃殿下の御覧に献じ奉る（本誌の光榮）

申すも畏けれど我が女子文壇は第二卷第壹號より毎號　東宮御所に献じ奉り　東宮妃殿下の献覧に供する事となれり。九重の雲深うして仰ぐも恐れ多きに、文運殷盛なる當代の餘榮、我か女子文壇を御嘉納あらせらるゝに到れり。此際記者一同は益す愼重の態度を以て本誌に心を注ぐは勿論、投稿者、愛讀者の諸孃も亦深く本誌を愛顧せらるべきことを信ず。

▲義金募集。　東北凶作地義捐金募集の擧は幸ひにも讀者諸孃の同情を得て、續々義捐者ある模樣ですが、なほ金額の多少を問はず、一片の芳志を寄せられんことを熱望いたします。愛讀諸孃からの注意も別項「諸孃と交際」欄に出て居る位ですから何分の義擧を望む次第です。（詳細は廣告欄に就て見よ）

▲女學校の作文。　鹿兒島縣立高等女學校から生徒の作文を寄贈された厚意は深く謝します、なほ出來得る限り便宜を計りますから、全國各府縣高等女學校の作文で、秀れたものゝ御寄贈を願ひます、之れ又文運助長の一端ですから御贊成を望みます。

▲誌友の面影。　愈よ本號から愛讀諸孃の御寫眞を紙上に掲載する運びになりました、前號所載の如く、御寫眞は望みに依り御返送いたしますから、其家庭的たると、愛讀者たると、投稿者たると、多人數なると、單身なるとを問はず、一枚にても多く御寄送又は恩借を願ひます。（詳細は第二號に就て見よ）

▲增刊に就いて。　豫定の如く二月十五日に『きさらぎ』一册を增刊として發行いたしました、是は多く昨年分の投稿ですから選評も昨年の諸先生が爲されて居る次第です、此の次は五月、八月、十一月（各十五日）に增刊することに決しました。

募集課目

選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

○論文　○抒情文　○叙事文（各半紙廿四字詰三十行以内）

○消息文（半紙廿四字詰二十行以内）　○はがき文（半紙かな付廿四字四行）

○短編小説（半紙總かな付廿四字六十行内）　○新躰詩（半紙一枚：句以内）

○和歌（半紙一枚一首）　○圖書（一寸の二寸判風俗景色）

但着色無用可成鳥皮紙を用ゆ

○新舊俳句（端書半紙一枚一句）

○誌友倶樂部（半紙を用ひ一行廿字詰）

▲各欄とも一人佳作一章宛投稿の事

賞與品

抒情文○叙事文○消息文○小説○圖畫の當選者へは左記の相當價格品選定の上贈與すべし

▲天賞　金壹圓五拾錢　▲地賞　金壹圓　▲人賞　金五拾錢

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金三圓、二等金貳圓、三等金壹圓五拾錢

○新體詩○はがき文○和歌○俳句の當選者へ贈與品左の如し

▲天賞本誌三ヶ月分　▲地賞同二ヶ月分　▲人賞同一ヶ月分

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金壹圓、二等金七拾錢、三等金五拾錢

右當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ヶ月の後に故障なき者へ美麗なる名畫褒狀を添へ贈呈すべし

【投稿〆切＝毎月十五日】

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に涉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『原稿在中』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圏點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし○各種の原稿（全封）取纏郵送するときは開封にして差出せば卅匁迄二錢にて事足れり

【最寄書店になくば直接發行所へ注文をこふ】

定價

女子文壇（毎号水彩畫繪端書寫眞口繪數葉挿入）毎月一回發行

一冊（大判百二十頁）	前金拾錢
六冊	前金五拾七錢
十二冊	前金壹圓八錢
十六冊（増刊共）	前金壹圓四拾四錢

直接申込に限り
郵税全廢無料

定期増刊四回　二月　五月　八月　十一月

注文心得

○本誌は前金の外送本不致候○代金過不足のなき樣注意被下度候○領收書は一切差出さず候○御注文毎に何號より何册及御住所氏名等は詳細に御認め可被下候○郵券代用は必ず定價の壹割増に願上候○御問合は返信料付に願上候▲御申越の號數賣切の時は近刊の分を以て送本可仕候▲缺本にならぬ法▼：前金拂込むに限る

廣告料金

種別	一頁（二十四字六十四行）	半頁（二十四字三十二行）	一行（五號字二十四字）
普通	金拾五圓	金八圓	金参拾錢
特別（表紙四面口繪對面）	金貳拾圓	半頁以下御斷申上候	効顯著大

申込發行前十五日

▲廣告特約取次
（神田區千代田町二番地）博報堂
（京橋區南佐柄木町二番地）日本廣告株式會社

明治三十九年二月廿六日印刷
明治三十九年三月一日發行

（二卷第四號）

不許轉載

無比廉價　金拾錢

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十一番地　電話＝（本局六〇七番）　女子文壇社

特約發賣元
東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目廿　東海堂
東京市日本橋區吳服町六番地　北隆館合資會社
東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區鎗屋町九番地　巨明堂

明治三十七年十二月十□日第三種郵便物認可



（東京秀英舎印刷）